
学生時代

山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学生時代

【Nコード】

N48710

【作者名】

山

【あらすじ】

キャラ

やまもとれんこ

山本連碁

かんさきかなこ

間先加奈子

あかさきれみ

赤崎糰見

あかさきまみ

岡崎真魅

リオ・リフィル

コレット・ファラ

俺は・・・もう学校を辞めたいと思った
だが・・・5人の女子が辞めさせてくれない・・・
そう・・・俺の最悪？な学校生活が始まるのだ・・・

山本連暮（やまもとれんご）（前書き）

はじめまして？

はじめてみた方ははじめまして山です。

前の小説を見てくれた方はお久しぶりです。

今回は一応恋愛として・・頑張っていきたいと

思います・・一応あらすじでは

最悪？と書いてますが・・今後

みんなが幸せになるような小説に

しようかなと頑張っていきます・・

誤字脱字がかなりありますが・・

何かあったら感想に書いてくださると

すごく助かります。では

山本連暮（やまもとれんじ）

今自分はこの学校を辞めたいと思った。
なぜなら・・・

「山さん帰りましょう。」

「山ちゃん帰ろう。」

「山様帰りましょう。」

「山君帰りましょう。」

「山さん一緒に帰りませんか？」

つと5人の女の子と一緒に声をかけてきた。

そして・・・うちは・・・

「断る権利は？」

と言ったとき5人は同じことを行つた。

「「「「「ありません」「」「」「」」」」」

と言われた。そして俺は・・・落ち込みながら

「分かつたよ・・・」

と心の中で泣いて一緒に家に帰った。

なぜいつも5人と一緒に帰らないといけないのは

自分が原因であつた・・・。

まずは・・・自分の名前からだ・・・

俺の名前は山本連暮^{やまもとれんじ}

わけがあつて今は1人で小さなアパート生活を

送っているのだ。ん？なぜ1人でアパート？

と思つた？それは・・・もう親がいないから・・・

俺が中学に入る前に親が事故で亡くなつて

親の親戚から俺を引き取ろうとしたけど

俺はもう1人で歩くことを決心をして断つた

しかし・・・俺は1人で生活するのは

初めてであり、おばあちゃんからいろいろ

家事やバイト探しなど手伝ってくれた。

だが・俺が中学2年のときおばあちゃんも病気で亡くなってしまった。しかもおばあちゃんの家を使ってもいいつと言ったけど俺は断った。

こんな人間がおばあちゃんの家を使ってもいいはずがないから・・だから自分は親が住んでいた。

アパートの家に1人ぐらしで住んでいて1人で生活をしていた。それとおばあちゃんの家は

親戚の人が管理していていつか使うときは

言ってねつと伝えてくれた。それはありがたい。

なぜならまたおばあちゃんの家になれるからだ・・

そして・・俺が中学に入る前に2人の友達が

いたけど親がなくなっておれも別の学校に変わったので

もう合わなくなったが・・まさかの高校であってしまった。

そこから・俺の最悪な出会いが待っていたので

あった。

（第1章終わり）

間先加奈子（かんさきかなこ）

彼女との出会いは・・俺が小学生に入った時初めて声をかけた人だった。

「君の名前は？」

と彼女が言ってきたので俺は

「山本連暮だ（やまもとれんこ）」

と言った。そして彼女は

「山本連暮かゝじやあこれから山ちゃんと呼ぶね

私の名前は間先加奈子

加奈子って呼んでゝ」

と俺たちはそこで友達になった。しかし俺は元々友達を作るのも苦手で1人にいるのがとても好きだった。だから幼稚園では友達を作らなかった。小学校で自己紹介をした語

俺は誰とも付き合わなく1人で本を読んでいたら

「なんで1人で読んでるの？」

と加奈子が声をかけてきた。俺は

「1人のほうがいい」

と言ったら加奈子が

「それは悲しいなゝじやあ私とあそぼ」

と言ってきたので俺は

「いや、いい」

と言ったけど加奈子は

「だゝめ！行くよ」

と俺を引っ張って加奈子は俺とよく遊んだが

中学に入る前に俺は親を亡くし学校を転校することにな

ったが加奈子に何も伝えず俺は学校を去った。

そして普通の高校に入って俺の前に1人の女の子がいて

「山ちゃん？」

と声をかけられたので俺は

「ん？」

と返したらいきなり俺を殴って他の奴らが啞然をしていた。

そして加奈子が泣きながら

「なんで・・・なんで・・・私に何も言わずに勝手に転校するのよ！」

すごく悲しかったのよ・・・なんでかってにいなくなるのよ・・・」

と泣きながら俺に行った。そして俺は

「すまん・・・」

と言った。そして加奈子は

「まあ・・・また同じクラスになってよかった・・・」

これからもよろしくね！山ちゃん」

と言って加奈子は笑顔になった。俺は

「よろしく」

と言った。だが・・・俺は・・・もう友達を作りたくない

と思った。なぜなら中学校で1人だけ知り合いが居て

その子に裏切られてもう作らないことを決心をしたので

加奈子には申し訳ないけどもう付き合うことはないと思い

学校が終わった時に急いで俺は教室から出て行った。

「これから・・・大変な学校生活になるだろう・・・」

と俺は・・・思った。（第2章終わり。）

赤崎糰見（あかさきれみ）

彼女の出会いとは・・・俺が小学校に入った時
加奈子と出会いその数カ月後加奈子から

「やまちゃんちよつといい？」

と言われ俺は

「なんだ？」

と聞かれて加奈子が

「出てきて」

と言われ恥ずかしそうに出てきたのは

「は・・・はじめまして・・・私は

あかさきれみ
赤崎糰見と呼びます。

糰見つと呼んでください・・・」

と恥ずかしそうに言った。そして

「よろしくな・・・糰見」

と言ったら彼女は恥ずかしそうに下を向いて
俺はどうしたのだろうか？と思った。そして
加奈子と糰見はよく俺を誘って遊ぶけど俺は
飽きないのか？俺と付き合ってたと思

よく3人で遊んだ。そして・・・

親を亡くした俺は何も言わずに学校を転校をし、
まさかの出会いで高校で加奈子とばったり

しかも同じクラスでそれで勝手に転校したことで
なぐられてしまい、加奈子は少し泣きながら

教室から出た。そして俺は何も言わずに外を見たら
1人の影が俺の近くに來た。そして・・・

「もしかして山さん？」

と声がしたので俺は顔をその声の主の前に見たら

「もしかして糰見か？」

と俺は声を出した。そして糰見は

「加奈子がいきなり教室を出たからびっくりして
中を見たらもしかして・・・と思って声をかけたの」
と言って俺は

「そっか・・・」

と答えた。そして糰見は

「お久しぶりね。元気だった？」

と少し恥ずかしそうに言った。俺は

「ああ・・・まあ・・・元気と言ったら元気なのかな？」

と答えた。それを聞いて糰見は

「そっか」でも・・・いきなり転校しちゃったときは
私と加奈子はすごく泣いたよ・・・でもまた会えて
よかった・・・」

と言った。それを聞いて俺は

「あのときはすまんだった・・・」

と言ったら糰見は

「気にしないで、でも・・・加奈子が殴ったのは

許してあげて。加奈子もかなりショックで

数日までたちなれなくすごく泣いてたから・・・

高校にあえて本当にうれしかったけど・・・

あの時の悔しさでつい殴ってしまったと思うから・・・」

と糰見は言った。それを聞いて俺は

「気にしないよ・・・俺も勝手に転校したから責任で

殴られるのは仕方ない。糰見は・・・殴るのか？」

と言われ糰見は

「私は・・・また会えただけでとてもうれしいよ。

殴るまではしないけどどうして・・・何も言わずに

私たちの前から転校したの？」

と聞いてきたので俺は

「ああ・・・中学校に入る前に親が事故で亡くなってさ

「おばあちゃんにお世話になって学校を転校したわけさ」

と言ったら糰見は

「そつか・・・山さんも・・・大変だったんだね・・・
今もおばあちゃんと一緒なの？」

と聞いたので俺は

「もうなくなつたよ・・・中学2年で病気でさ・・・
仕方ないけどね今は1人でアパート生活さ」

と言ったら糰見が

「そつか・・・じゃあ・・・今度遊びに行ってもいい？」
と恥ずかしそうに言った。それを聞いて俺は

「ん・・・？まあ・・・来てもいいが何もないぞ？
てか・・・糰見・・・お前積極的に言えるようになったね。
驚いた・・・あ。でもバイトで遊べない時もあるから
そのときは勘弁して・・・」

と言ったら糰見は

「うん！分かった。私が積極的に言えるようになったのは
加奈子と山さんのおかげだよ。2人がいなくなったら今頃ね・・・

あ、加奈子を探してくるね。また後でね！山さん」

と言ったら糰見は教室から出て行った。そして・・・俺は
「これから大変になりそう・・・」

と落ち込みながら外を見た。 （第3章終わり。）

岡崎真魅（おかざきまみ）

俺は加奈子と糰見と高校で再会した後の放課後
バイトのために早めに帰宅をしてる途中で1人の
彼女が俺の前に現れ

「山君帰ろう」

と俺に声をかけた。俺は

「別にかまわんが」

と言って彼女は

「ラッキーじゃ一緒に帰ろう」

と俺と彼女は一緒に帰った。そういえば彼女の名前は
岡崎真魅おかざきまみと言って俺のおばあちゃんの

親戚の娘で俺の先輩であつた。俺が親を亡くして
おばあちゃんのお世話をしてたときに初めてあつた。

最初のほうは俺が親を亡くしたせいであまり暗かつたそうで
彼女もあり声をかけなかったが何回か会つたときに彼女から

「山本連暮君やまもとてんぼだよな？」

と声をかけたので俺は声を出さずにうんつと頭を振った。

そして彼女は

「私おかしきまみん名前は岡崎真魅おかざきまみっていうの

これから真魅まみって呼んでね」

と明るく声をかけた。しかし俺は親がなくなつて

当分立ち上がらなくよくおばあちゃんから俺の話を
聞いたらしくおばあちゃんがいないときによく俺の
相手をしてくれて何回かして俺は

「俺と一緒にいて面白いのか？」

と言ったら真魅が

「やっと話してくれた・・・ん」私わたしも友達そんなに
居ないし山君のことが気になつてから面白いつて

言うか一緒にいて山君のことを詳しくしりたい。」

と言った。そして俺が少したち治って中学校に行けるようになったが中2のときおばあちゃんが病気で亡くしその後いじめにあって俺は何も言わずにいじめを食らっていった。それを真魅が気づいて俺に声をかけた。

「山君何か困ったことある？」

と言って俺は

「別に今までの通りだよ。」

と答えた。その数カ月後いじめが突然亡くなった。

そのクラスの1人の女子が俺に

「岡崎先輩にお礼を言ってあげなさいよ。」

と言われ俺は

「なぜ？」

と言った。そしてそれを聞いた女子が

「岡崎先輩があなたがいじめていたことを気付いてね

私と岡崎先輩は一緒に部活だから私に聞いてきて

私も少しいじめの瞬間を見たけど・・・相手は男だったから

止められなくてね・・・だけど岡崎先輩はあなたを助けるために

いじめをした子を止めたのよ。だから後でもいいから

岡崎先輩にお礼を言ってあげて。」

と言って俺は

「分かった。放課後に行くね。」

と言っ放課後俺は真魅がいる家庭科部の部屋に言っ

てクラスの女子が俺が来たことを気付き真魅を呼んで

俺の前に来させて俺は真魅の顔に傷があったから

聞いてみた。

「この傷どうしたの？」

と聞いたら真魅が

「ああ、この傷はねちよつともめことがあってね。

気にしないで。で・・・私に何か用？」

と言ったら俺は

「クラスの女子に俺がいじめられたことを真魅が解決してくれたと聞いたから・・・もしかして・・・俺のために怪我をしたのか？」

と言ったら真魅が

「ああ・・・話を聞いてくれないから少し黙らせたわ・・・まあ軽い傷で済んだから問題なし！」

と笑顔で言った。それを聞いて俺は

「真魅ごめん・・・俺のせいで怪我をしてしまつて。」
と言った。それを聞いた真魅は

「山君は私を守るよ。どんなことがあつてもね。

だから気にしないで」

と笑いながら言った。そして俺は優しい先輩を持つてよかつたと初めて実感をした。そして真魅が卒業をし俺が3年になつて真魅が俺の家に来て

「山君もう高校決まつた？」

と聞いたら俺は

「まだ決めてないけど・・・もう就職にしようかとおもういつまでもおばあちゃんの遺産や親の遺産で生活をしたら罰が当たるから・・・」

と言った。俺は親の遺産とおばあちゃんの遺産は俺がさびしくないように遺産を残してくれたが俺は無駄にはしては行けないと思い。おばあちゃんの家は住まずに古いアパート生活で頑張つていこうと思ひバイトを見つけ働きながら学校に行つていた。真魅は考えて俺に言った。

「おばあちゃんからね。山君がおばあちゃんの家ですんでから私はいろいろ聞いたのよ過去のことを。そしてねおばあちゃんが山君に大学を卒業してほしいからつと云つてたんだよ。だから・・・山君私がいる高校に来ない？」

と誘いが来て俺は

「でも・・・」

と言った。眞魅は

「山君なら絶対に受かるよ！私も受験手伝っから一緒に高校に行こうよ。」

と言った。俺は

「分かった行くよ。」

と言って眞魅が

「やった！！じゃあ来週から勉強教えるね！」

と言って俺と眞魅は高校受験が始まる前に大事な所を

眞魅が分かりやすく勉強を教えてもらい無事に合格をして

今俺は眞魅と一緒に学校に行くことになった。んで帰り中眞魅が

「山君今日はバイトだったっけ？」

と言った。俺は

「うん。そうだよ。」

と言って眞魅が

「そっか山君バイト頑張ってたね！」

と言って俺と眞魅はお互いの家に行く分かれ道で別れた。

そして俺は

「さて・・・バイト頑張るか」

と言って。家に早く帰った。（第4章終わり）

リオ・リフィル

眞魅と別れ家に帰った俺はバイトの準備をして出かけた。そしてバイトに行く途中に2人の女性が俺の前に来て

「あ、山さん今からお出かけですか？」

と1人の女性が言って俺は

「今からバイトだよ。」

と答えてもう1人の女性が

「そうなんですか。バイトまで一緒について行ってもいいでしょうか？山様」

と言われて俺は

「別にいいですよ。」

と答えた。それを2人は聞いてとてもうれしそうになった。まず1人がリオ・リフォルさんと言っで彼女は普通の人間ではない。それは・・・天界から来たお嬢様だ。彼女との出会いは俺が高校に入った入学式のことだ。

俺が入学式後教室に入ろうとしたところ彼女が俺の前に来て

「あのゝすいません・・・」

と恥ずかしそうに俺に聞いて俺は

「何か？」

と言った。そして彼女は

「1年C組の教室はどこでしょうか？」

と聞いてきたので俺は

「ああ、俺と同じ教室かじゃあついてきたらいいよ」

と一緒に教室に向かった。そしてついて俺は

「ここが1年C組の教室だよ」

と答えた。そして彼女は

「ありがとうございます。えーとお名前は？」

と言ったので俺は

やまもとれんご
「山本連暮だ」

と言った。そして彼女は

「私の名前はリオ・リフィルと言います。リオって

呼んでください。」

と挨拶をしてリオは教室の中に入った。

そして俺は入学式後のLRで先生の話聞いて

その後終わったので俺は家に帰ろうとしたらリオが

現れ俺に何か言いたそうに待った。それを見て俺は

「何か用ですか？」

と言ってリオは

「あ・・はい！あの・・山さん私と友達になって

いただけませんか？」

と言ったとき彼女の顔が赤くなった。それを聞いて俺は

「別にいいけど・・俺と居ても楽しくないぞ？」

と答えた。まあ・・俺は中学校のときにいじめにあって

誰とも友達ができなかったし真魅先輩のおかげで何とか

中学を卒業をし、高校合格したが・・俺にはもう友達を

作る気がなかった。しかし・・まさかの初めて会った人に

友達になってつと言われたら。俺もさすがに言ってしまう。

しかし・・彼女は

「私は・・天界から来たので・・知り合いが1人いるのですが

他に友達がいなくて・・困ってたのです・・しかも・・私は

この世界に来てまだあまり慣れてないのでもしよかったら・・

町案内してもらえませんか？」

と言って俺は

「分かった・・俺が忙しくないときに町案内してあげるよ。」

と言って彼女はうれしそうに

「ありがとうございます！これからもよろしくお願いします！」

と言って俺とリオはこの時初めて会ったばかりだったがまさかの

友達になった。

（第5章終わり）

コレット・ファラ

もう1人はコレット・ファラさんと言って

リオと友達になった後に1人の彼女が3人の男子に

「彼女名前なんて言うの？」

と言われ彼女が問い詰められ怖がつてるときに俺が

「おい彼女が怖がつてるからやめなかい！」

と俺が言ったら3人の男子が俺に

「「「なんだと！」」」

と俺に殴ろうとして俺は3人にカウンターをしかけ

3人は俺の前に逃げて行つた。そして彼女が俺に

「ありがとうございます。」

と頭を下げた。俺は

「気にしないでいいよ」

つと言って俺は教室に戻つた。数日後リオから

呼びだされ俺は屋上に向かつた。そして俺はリオに

「どうしたの？」

と質問をしてリオは

「山さんに紹介したい人がいるんだ」

と言つたので俺は

「別にいいけど・・・で・・・その子は誰何だ？」

と言つたらリオが

「もうすぐ来ると思うよ。」

とちよつと待つてたら1人が屋上のドアを開けて

リオのそばに行つて俺に

「はじめまして・・・私は・・・コレット・ファラと

言います。この前助けてもらつてありがとうございます」

と言つて俺は

「ああ・・・この前のあの子ね・・・気にしないでいいよ。」

と言って彼女はあわてて

「いえ・・私は・・何もできなかったし・・とても怖かったので助けてもらったことでもうれしかったです・・」

と言ってリオは

「前に私に山さんと初めて会ったときに友達がいるって

行ったんだけど・・コレットがその友達ねこの子も天界の子でね
もしよかったら友達になってあげてくれない？」

と言ったので俺は考えて

「前にも行っただが俺と一緒に居ても面白くもないぞ？」

と言ってコレットは

「大丈夫です！私は山様のことをもつと詳しく知りたいのです！」

と言われ俺は・・・

「山様・・様は付けなくてもいいよ・・あはは・・」

と苦笑していたが彼女は

「いえ・・私を助けてもらったので・・今後は山様と呼びますね」
と言われ俺は恥ずかしそうに

「分かった・・・だけど俺と居ても楽しくないかもしれないが
そのときは・・もう・・無視してもかまわないから・・」

と言ったらリオとコレットは

「何ですか？」

と言われ俺は・・・

「昔から俺と居た人はみんな結局俺の前になくなるから
もしも楽しくないやだったなら無理してまで俺のこと

気にしないでいいから」

と言ってリオとコレットは

「大丈夫です。楽しくなかったら楽しくさせるつもりなので！」

と言って俺とリオとコレットは教室に戻るときに眞魅先輩とあって
眞魅先輩が俺に

「この子たちは？」

と言われリオとコレットは

「はじめまして私はリオ・リフィルと言います。リオって呼んでください。」

「はじめまして私はコレット・ファラと言います。コレットと呼んでください。」

と挨拶をした。それを聞いて真魅先輩は

「私の名前は岡崎真魅と言います。真魅って呼んでね」

後山君と私は山君が小さいときから友達になったから

何かあったら私に聞いてね、あ、一応私はここの家庭部の部長をやってるから料理関係も相談してね」

と言ってリオとコレットは

「真魅先輩にちよつと質問があります。」

と言ったので俺は

「真魅先輩あとはよろしくお願いします。」

と言って真魅は

「え、もう行っちゃうの？まあまた後でね」

と言って俺は教室に戻った。そして放課後俺が早く帰ろうとしたとき2人が俺に

「一緒に帰りませんか？」

と言われ俺は

「分かった。だけど帰る場所違うでは？」

と言われ2人は

「大丈夫です。多分途中までは同じ道なので」

と言われ俺たちは一緒に帰った。そして帰る途中にリオは俺に

「真魅先輩から山さんの過去の話を聞きました。」

と言われ俺は

「そっかじゃあ早いが・・・俺と付き合っても楽しくないぞ？」

と言われ2人は

「昔は昔。今は今です！だからこれからの思い出にしたいのでこれからよろしくお願いします！」

と2人は言ったので俺は

「分かった。じゃあ・・・これからもよろしくお願いします。」
と言って俺とリオ、コレットは友達になった。 (第6章終わり)

入学式後

俺は眞魅先輩と同じ学校に行くことができたが
まさかの小学校時代で知り合った加奈子と糰見と
あつて加奈子から少し殴られてしまつてその後
リオとコレットが俺の過去のことを知つても
友達になりたいつと言われあんまり友達を
作りたくない俺は仕方なく友達になつた。
その数日後俺は毎回授業が終わつた時と
学校が終わるときにはすぐ教室から出て行つた。
そして俺が出た時加奈子が

「はあ・・・」

と落ち込んでいた。それを見た糰見は

「加奈ちゃん大丈夫？」

と言われ加奈子は

「うん、大丈夫だよ・・・」

と少し落ち込んでいた。それを見て糰見は

「まだ、あの時のこと気にしてるの？」

と言われ加奈子は

「うん・・・」

と言つた。糰見は

「山さんならわかつてくれると思うよ？話してみたら？」

と言われ加奈子が

「うん・・・そうだね・・・でもすぐ教室から出て行くから・・・
捕まるのかな？」

と心配そうにしている糰見は

「加奈ちゃん。山さんのバイト先教えようか？」

と言われ加奈子はびっくりして

「なんで糰見が山ちゃんのバイト先を知ってるの？」

と聞かれ糰見は

「前に私が町を歩いてたら山さんがバイトをしていたところを見たから・・・まあ・・・声はさすがに書けなかったけど・・・」

と言った時教室の前にコレットが現れ

「リオちゃん山様いる？」

と言ったらリオは

「もう山さん帰ったよ・・・私も一緒に帰りたかったのに・・・」
と言ってコレットが

「じゃあ・・・明日こそ一緒に帰れるように準備しましょう。」
と言ってリオは

「そうだね～まだ会ったばかりだけど山さん優しいから・・・」
一緒に帰ってくれるはずだよ・・・じゃあ一緒に帰る？」

と言ってコレットが

「うん。一緒に帰ろう」

糰見と言って2人は教室から出て行った。それを聞いて糰見は
「加奈ちゃん早くしないと・・・山さん取られちゃうよ？」

と言ったら加奈子が

「え・・・？」

と言って糰見が

「私たちが先にあの子たちより山さんと一緒に帰らないとね！」
と言って加奈子は

「うん・・・」

といった。その頃俺は早く教室を出て靴箱に言ったら眞魅先輩が
「お、山君発見！」

とうちの腕につかまって俺は

「やめてくださいよ眞魅先輩」
といった。それを聞いて眞魅は

「2人だけは眞魅って呼んでもいいだよ？まあ・・・今日は部活がないから一緒に帰らない？」

と言われ俺は

「わかりました。」

と言って俺と眞魅先輩は一緒に帰った。帰りの途中で眞魅先輩が「山君。リオちゃんとコレットちゃんに山君の過去を教えてごめんね。」

といきなり言われ俺は

「気にしないでですよ。それに過去を知って俺から離れてくれれば嬉しかったですが・・・」

と苦笑で言った。それを聞いて眞魅先輩は

「もしかして2人は過去を聞いても山君と友達になりたいって言ったの？」

と言われ俺は

「そうなんだ・・・」

と言って眞魅先輩は

「やったじゃん！私以外にもちゃんと山君のことを理解できる人ができて

でもね山君高校は中学よりはじめは少ないと思うし私的には山君が

楽しい思い出を作ってほしいのよ・・・」

と言われ俺は

「はあ・・・まあ・・・地味に思い出を作りたいですね・・・俺は」

と言って眞魅先輩は

「もう！山君は・・・そういうことを言う・・・まあ・・・何かあったら遠慮なく私に言ってね。山君の相談は私がするから。」

と言って俺は

「ありがとうございます。でも・・・先輩も忙しいからなるべくは控えさせていただきますね。」

と言われ眞魅先輩は

「いやいや・・・控えなくていいから。。。どんどん相談してよ。」
と言って俺たちは同じ道を歩いて眞魅先輩は

「山君は今日バイト？」

と言われ俺は

「いや・・今日はバイト休み明日はあるけど」
と言って真魅先輩は

「じゃあ後から山君の家に行ってもいい？」

と言われ俺は

「好きにどうぞ・・・」

と言って真魅先輩は

「わーい。じゃあ後から来るね」

と言われ俺は

「了解」

と言って俺は家に帰った。その後真魅先輩が来て少し話をして
うちの夕ご飯まで作ってくれて家に帰った。俺はご飯を食って
宿題をして、銭湯に行つて帰ってから明日のために早く就寝を
した。
（第7章終わり）

帰り道で・・・

今日は俺はバイトがあつたため学校が終わつた後俺はすぐに教室から出て靴箱に向かつた。そのとき

「山さん一緒に帰りませんか？」

とリオとコレット少しはあつとリオが言つて俺は

「バイトがあるから・・・少し速足でもいいか？」

と言つたらコレットは

「それでも構いません！山様と一緒に帰れるなら。」

と言つて俺は

「そつか・・・」

と言つて俺たちは一緒に帰つた。それを見て糺見が

「山さん私たちも一緒に帰つてもいいでしょうか？」

と言つたので俺は

「別にかまわないが・・・リオ、コレットそれでもいいか？」

と言つてリオは

「別にかまいませんよ。山さんと一緒に帰れるなら。」

と言つて俺たちは一緒に帰り道を歩いた時俺は

「今日はなぜ俺と一緒に帰ろうと思つたの？」

と質問をしたのでリオが

「私はもつと山さんのことをいろいろ知りたいと思つたので

一緒に帰ろうとしたのですが・・・山さん早く帰つてしまうので

と言つてコレットは

「私もリオちゃんと同じで山様といろいろ話したくて少しでも

居たかつたから・・・」

といわれ俺は

「そつか。悪かつたな。俺もバイトなどがあつて急いで帰つてたんだ。」

それと学校に長く居ても楽しくないからな・・・」

といわれコレットは

「山様はどうしてこの学校に入ったのですか？」

といわれ俺は

「それは・俺は元々高校に入らなくてもよかったんだ・しかし
リオ、コレットお前らは真魅先輩から俺の過去を聞いただろ？」

そのために今俺はこうして高校に入れたのもおばあちゃんと

真魅先輩のおかげだったんだ」

といわれコレットが

「そうだったのですか・・では山様と出会ったから言い思い出を
作りたいです。」

といわれ俺は

「あはは・・よろしく・・」

と苦笑をしていて俺は

「加奈子と糰見はどうして俺と一緒に帰りがかったの？」

といわれ糰見は

「私も山さんと一緒に帰りがかったんです。」

と言って加奈子も

「わ・私も同じだよ。」

と言ってわかれ道まで歩いて俺は

「じゃあ俺はここで」

と言ってリオとコレットは

「「バイト頑張ってください！」」

と言って俺は

「あ・・ありがとう」

と言って俺は家に急いで帰った。その後糰見がリオとコレットに

「あの・・すいません。」

と聞かれリオとコレットは

「「はい、何でしょう？」」

といわれて糰見は

「お二人はどうやって山さんと友達になったのですか？」

と聞かれリオから

「私は天界から来てまだこの町のことや学校のことが詳しくなかったので、教室がわからなかったときに山さんが助けていただいたのでぜひ友達になりたいと思っていて山さんの詳しく聞きたかったです山さんから教えてもらえなかったのも山さんと一緒に居た真魅先輩からお話をいただいて私はもつと山さんのことを知りたい、そして友達になりたいと思って山さんに声をかけたんです。」
と言ってコレットも

「私も天界から来てて、入学式後に私は3人の知らない人から声をかけられ危ないところを山様に助けてもらったので私もリオちゃんと同じで山様のことをもつと知りたくそして友達になりたいと思うたので声をかけました。」

と言って糰見は

「そつか〜じゃあ私も自己紹介しますね。私の名前は赤崎糰見あかさきれみと言います。糰見と呼んでください。」

と頭を下げた。そして加奈子も

「わ・・私の名前は間先加奈子かんさきかなこと言います。」

よ・・よろしくです。」

と言った。そしてコレットとリオさんは

「「これからよろしくお願いします。加奈ちゃん糰見ちゃん」」
と言って加奈子が

「あの・・それで・・2人は山ちゃんのことをどう思ってますか？」
と言って2人は

「私はもつと友達関係を深く接していきたいと思います。」

「私は・・もつと山様のことをいろいろ知りたいです。」

と言って俺が知らない間に4人は仲良く？

なったのであった。（第8章終わり）

ゴールデンウィーク

学校生活とバイト生活療法を維持をしながら俺は毎日の生活を過ごしていたが入学式で小学校以来合わなかった加奈子と糰見と会い、そして

リオとコレットまで友達になった俺は前より早く4人を避けるように逃げていた。そして・・・

ゴールデンウィーク（以下GW）前に真魅先輩が「山君ゴールデンウィーク用事ある？」

と聞かれ俺は

「バイトはGWは休みになってるが・・・」
と言われ真魅先輩が

「じゃあさゝそのGW中暇なら遊ばない？」
と言われ俺は・・・

「拒否権は？」
と言つて真魅先輩が

「拒否権なし！」
と言われ俺は

「分かりました・・・」
と言つた。そして真魅先輩が

「じゃあゝGWが始まった休みの日に遊園地に行こう」
と言われ俺は・・・

「真魅先輩に任せます・・・」
と落ち込むように行つた。そして真魅先輩が

「じゃあ5月2日の夜に電話するね」
と言われ真魅先輩はうれしそうに走つて行つた。

5月2日の学校終了後俺はいつも通りに4人につかまる前に早く帰つて4人は

「・・・はあ・・・」

と落ち込んでいてリオが

「山さん帰るのがはやくい・・・」

と言ってコレットさんが

「そうですね・・・話したいことが多いのに・・・」

と言い糰見が

「そうだね～小学校のときはそんなことがないのに・・・」

と言って加奈子は

「・・・」

と無口になっていたその時

「山本連碁君いますでしようか？」

と言ってリオさんが

「あ、真魅先輩。山さんならもう帰りましたよ・・・」

と言ったら真魅先輩が

「はや！山君中学校から帰るスピード速くなったね」

次は捕まえるぞ」

と張り切っていたらコレットが

「真魅先輩山様に用事でしようか？」

と言われ真魅先輩は

「うん。まあ明日のことだね～まあ後で電話掛ければいいかな？」

と言われリオさんが

「真魅先輩はいいですね・・・山さんのことをよく知っていて・・・」

と言われ真魅先輩は

「そう？私も山君を知ったのは中学校に入る前に会ったんだけど

やっぱり最初は暗くてね。私も何回か挑戦をしてやっと話して

くれたんだよ。それと高校も誘ったのも私だよ。」

と言って4人は

「・・・そうなんだ・・・」

と言った。そして真魅先輩は

「あ、そうそうみんな明日用事はあるの？」

と言ってコレットは

「どうしてですか？」

と聞いたので真魅先輩は

「明日山君と遊園地に誘ったんだけどみんなはどうかな？」

と聞いてみたの。」

と言われリオとコレットは

「「ぜひ行きたいです」」

と言われ真魅先輩は

「私？人じゃね？さすがに山君も暗くなるかな？っと思

ってたから2人が来てくれると助かるよ。で・・

2人はどうするの？」

と言われ糰見さんは

「私たちもいいでしょうか？」

と聞かれ真魅先輩は

「別にいいよ！確か赤崎糰見さんと間先加奈子でしたよね？」

と言われ糰見は

「そうです。なぜ？私たちの名前を？」

と言われ真魅先輩は

「秘密！というか・・山君から教えてくれたんだけどね」

と言われ加奈子が

「私たちも一緒に行ってもかまいませんか？」

と言われ真魅先輩は

「まあ！明日はみんなで楽しみましょう！まだ学校が

始まったばかりで山君のこと知らない人もいるし

学校で疲れてるかもしれないからぱーと遊びましょう！」

と言われ私たちは

「「「はい！」」」

と言って真魅先輩は4人に明日の集合時間を教え家に帰った。

それを俺は知ることなく明日遊園地に行くことになった。（第9章

終わり）

遊園地 その1

遊園地に行く前に1本の電話が鳴った。そして

「はい山君私です。」

と真魅先輩が電話がかかって俺は

「何でしょうか？」

と言った。真魅先輩が

「明日の遊園地の件で電話です」。明日11時に
場所は山君のアパートの前にね。」

と言われ俺は真魅先輩に

「分かりました。」

と行って真魅先輩が

「あ、そうそう。明日サプライズがあるから

楽しみに待っててね」

と明るく言ったので俺は

「分かりました。。。」

と苦笑しながら行って電話が切れて俺は今日の勉強の
復習をして明日のために早めに就寝をした。そして朝

8時に起きた俺は毎朝習慣でトレーニングとして

家から10キロ離れた湖まで走ってまた10キロで

走って家まで戻るのが普通になった。そして家に帰って

朝ごはんを食べていろいろ準備をしてたら11時前になって

アパートの下に真魅先輩がいて

「お、早いね山君。おはよう」

と言って俺は

「おはようございます。真魅先輩。では行きましょうか」
と言って真魅先輩が

「もう。学校じゃないから真魅先輩っていつのはなしよ。

あ、待ってあと4人来るから少し待って」

と言われ少し待っていたら4人が現れ

「おはようございます山さん」

「おはようございます山様」

「おはよう・・・山ちゃん」

と4人が現れうちは？を出してて真魅先輩が

「あゝ山君はつたえてなかったけど誘ったのは僕なんだ」

前に打ち合わせに教室まで行ったんだけど・・・

山君毎回早く帰るから・・・んで・・・4人が行きたそうだったから

誘ったわけなんだ」

と言って俺は

「分かりました・・・真魅には負けました・・・」

と俺は少し落ち込んだ。それをみてコレットが

「大丈夫ですか？山様」

と言われ俺は

「ああ・・・大丈夫だよコレット。ありがとう」

と言っつて真魅先輩が

「まあ、みんなそろったから行きましょう！」

とウキウキしながら俺たちは遊園地に向かった。

そして・・・ついてから俺たちは最初からジェットコースターや

お化け屋敷など定番のアトラクションを楽しんで

最後に真魅先輩が

「観覧車に乗ろう！」

と言いだし・・・俺が

「5人で行つてらしゃい」

と言っつて真魅先輩が

「それはだめ！あ、もちろん全員一緒じゃなく

山君と1人ずつ乗ることでもいいかな？」

と言われ俺は

「拒否権は？」

と言われ真魅先輩が

「だゝめ！みんな山君にいろいろ話したいことがあると思うから山君は5回乗ってもらおうから」と言われ俺は

「分かりました・・・」

と言つて順番は加奈子、糰見、コレット、リオ、真魅の順番で乗ることになった。（第10章終わり）

遊園地 その2

まず、観覧車をあまり乗りたくない俺は

真魅先輩から拒否権なしで5回も乗らないと

いけなくなった。しかも・・・1人1人・・・

うちは・・・がっかりしたけど・・・真魅先輩には

お世話になってたから仕方なく乗った。まずは

加奈子からだ

「いつてらしゃい」

と真魅先輩が行って俺と加奈子は観覧車の中に入った。

入って1分後加奈子から

「今日はありがとうね」

と言って俺は

「お礼なら真魅先輩に言つてね。」

と言った。加奈子は

「うん・・・そうだね。山ちゃんこの前のこと怒ってる？」

と聞いたので俺は

「いや、気にしてない。」

と言った。加奈子は観覧車が1周回るまでに俺に質問を

考えてたらしく質問をしてきた。

「山ちゃんなぜ私たちの前にいきなり居なくなったの？」

と聞かれ俺は親がなくておばあちゃんの家に住んでもらい

学校も転校したけどその時は誰も話したくない状態のことを

いろいろ話した。そして加奈子は

「そっか・・・。山ちゃんも大変だったんだね・・・

でもこれから高校でも久しぶりに会えたからまた

一緒に遊ぼうね！」

と言って俺は

「ああ・・・よろしく。」

と言った。そして1周終わって次は糰見に乗った。

「山さん疲れてませんか？」

と言われ俺は

「ああ・・大丈夫だよ。糰見は疲れてないのか？」

と言って糰見は

「私は・・大丈夫だよ。山さんと小学校以来

遊んだの初めてだったんだ。だから楽しかったよ

今度山さんの家に遊びに来てもいい？」

と言って俺は

「バイトの日じゃなかったら別にかまわないが・・」

と言って糰見はすごく喜び

「ありがとう！じゃあ・・今度私が料理作るから

今度食べてくれる？」

と言ったので俺は

「ああ・・構わないよ。でも無理して作らなくても

いいからね。」

と言って糰見は

「分かった！」

と言って観覧車が1周回った。次はコレットに乗った。

「山様私初めて遊園地に行きました。」

と言われ俺は

「天界には遊園地はないのか？」

と質問をしてコレットは

「そうですね・・こういう楽しいところが1つも

ないですよ・・でも・・この町はまだ詳しくないので

初めて遊園地行つてすごく楽しめました。また今度

連れてつてもらえませんか？」

と言ったので俺は

「ああ。バイトの日じゃなかったら・・いつでも構わないよ。」

と言ってコレットが

「ありがとうございます。山様。山様のバイトは・・・どこですか？」
と聞いたので俺は

「普通のファミレスだよ。」

と言ってコレットが

「今度連れてってもらえませんか？」

と行って俺は

「別にかまわないが・・・あまり面白くないぞ？食べるだけだし。」
と言ってコレットが

「別にいいです。山様と一緒にいる時間がすごく大切なので。
今度よろしくお願いします。」

と頭を下げられ俺は

「ああ、分かったよ・・・よろしくな。コレット」

と言って観覧車が1周回った。次はリオだ

「山さん町いろいろ案内してくれてありがとうございます。」
と言って俺は

「まだ遊園地しか教えてないけどな・・・」

と苦笑してらリオが

「いえ・・・1つでも教えてくれてとてもうれしいです。」

しかも天界には遊園地がないのでとても楽しかったです。

また遊園地とか私が知らない場所を教えてくださいませんか？」

と言ったので俺は

「ああ、別にかまわないよ。」

と言った。リオは

「ありがとうございます。今度山さんのアパートに行っても
いいでしょうか？」

と言ったんで俺は

「ああ、別にかまわないよ。だが天界のお嬢様が俺のところに
行っても退屈だからな・・・大丈夫か？」

と聞いたのでリオが

「そんなの関係ありません！私はいろいろ山さんのことを

もつと知りたいのでよろしくお願いします。」

と言って1周回った。最後に真魅先輩

「山君今日はお疲れ様」

と言って俺は

「お疲れ様・・真魅」

と言って真魅先輩は

「今日はいろいろありがとうね」

と言って俺は

「気にしないでください。」

と言った。真魅先輩は

「だってさ山君いまだにさ昼休みや学校が終わった後にすぐ帰るからさみんな山君と帰りたいのにさっさと帰るからさ、みんな困ってたから誘ったわけ」

と言われ俺は

「真魅。俺の性格分かるよな？」

と言って真魅先輩は

「もちろん。だから私がみんなを誘ったわけ。けどね加奈ちゃんや糰見ちゃんは私から山君の過去を教えてないからさちゃんと説明してあげてね。コレットちゃんやリオちゃんはちゃんと理解して山君ともつと友達になりたいって言うてるだからさっもつと仲良くしてあげないと。」

と言われ俺は

「努力します・・。」

と言って真魅先輩は

「よし！じゃあもう少しで1周回るからこれから高校での思い出をたくさん作ろうね！山君」

と言って観覧車が1周回った。そして

「お疲れ様、みんな今日はお疲れ様でした」

まだGWは少しあるからゆっくり休んでね
じゃあ山君のアパートに行こうか。」

と言つて俺たちは俺のアパートまで歩いて

着いてからみんな解散をした。俺は・・・

「楽しかったけど・・・これから大変だな・・・」

と言いながら家に入った。 （第11章終わり）

ある日のこと

眞魅先輩から誘われた遊園地でまさかの俺1人と

眞魅先輩、加奈子、糰見、リオ、コレットと

一緒に行くとは思ってもなくまさかの眞魅先輩から

「1人ずつ観覧車に乗ろう!」

と言われ俺と一緒に1人ずつ乗った。まさかの俺が

5回乗るとは……。その後彼女達はよく仲良くなり

遊園地に行く前は俺は昼休みになった時と放課後になったときは

すぐに帰れたがまさかのつかまってしまい、このごろは5人(俺含めて6人)

と一緒に帰ることが多くなった。嫌ではないが・・・

さすがに男1人女5人はやめてほしい……。周りが・・・怖いからで・・・いつもどおりにバイトに言った俺は黙々とやっていったら、

「おゝい山本。今大丈夫か?」

と店長から言われ俺は

「大丈夫ですよ?」

と返事をしたら、店長が

「お前にお客様が来てるぞ。かわいいじゃないか」まあ

今から休憩を30分ぐらいあげるから一緒に言ってもいいから」

と言われ俺は

「別に・・・休憩はしなくてもいいですから・・・」

と言われ店長が

「そのお客さんがさ、店の前に1時間もいるのよ・・・

んで俺がそのお客様に聞いたら山本を待ってるらしいから

少しだけしか休憩は出せないけどどうか食事でも言ったらどうだ?

それかここで一緒に食べても構わないぞ?まあ金は自腹だけどね」

と言われ俺は

「そうですね・・・じゃあ・・・ここで一緒に食事をしますね。」

「すみません・・・」

と頭を下げたら店長が

「いいよ。気にしないで。俺は山本のおばあちゃんと真魅ちゃんにはお世話になってるから、これぐらいはね。」

と言って店長が言っただけ俺は少し着替えて店の入り口に見たらそこにいたのは

「コレットか・・・」

とつぶやいたらコレットが

「山様こんばんはです。」

と頭を下げた俺は

「どうしたの？ここにいて・・・」

と言って、コレットが

「前に山さんにバイト先を教えてもらって今日は確かバイトだったはずなので

見に行っただけですが・・・山様がいなくてどこにいるのかを探してまして」

と恥ずかしそうにいった。それを聞いて俺は

「だから店長に聞かれたんだね。」

と言われ、コレットが

「は・・・はい・・・すみません・・・」

と言われ俺は

「気にしないでいいよ。だけど入り口の前に1時間もいたらねほかのお客さんや店の人たちにも迷惑かかるから今度から行く時はメールでもいいから教えてくれ。」

と言って俺はメールアドレスをコレットに渡した。そして俺とコレットは店の中に入り30分も休憩時間をもらって席に座った俺は

「さっき店長から30分間の休憩時間をもらったからここで食事をしようと思うがコレットは一緒に食べるか？」

と言われコレットは

「いいのですか？」

と言われ俺は

「ああ、大丈夫だよ。俺が奢るから好きなものを選んでくれ」

と言って俺たちはメニューを選び料理が出てきたときに店長が俺に耳を当て

「がんばれよ」

と言って離れて行った。そしてコレットがいろいろ質問をしたりお話をしたら

「おっとそろそろ休憩時間が終わるな。次は外に待ってたらだめだよ。」

「ここの料金は俺が払うから。また明日ね。」

と言われコレットは

「わかりました……。奢ってもらいありがとうございます。」

今日はすごく楽しかったです。では、また明日」

と言ってコレットは店を出て俺は会計のところに行き代金を支払って店長が

「彼女？」

と言われたので俺は

「いえ、学校の友達です。」

と言って、俺はバイトの続きをしたのであった。（第12章終わり）

家に訪問

コレットが俺の店に来てから2日後俺は

家の掃除をしていたら

「ピンポン」

と音が鳴り俺は

「はい、今行きます〜誰でしょうか？」

と聞いたらそこにいたのはリオと糺見だった。

そして俺は

「どうしたの？しかし珍しい組み合わせだね。」

と言いいリオと糺見は

「本当はね、今日5人で行くとしたんだけどね

加奈子は部活、真魅先輩は用事、コレットは家庭の用事で

これなかったのよ。でいけたのは私とこれつとさんね」

と言われ俺は

「そっか・・・」

と言ってリオさんが

「ここが・・・山さんの家なんですね。」

と言いい俺は、

「そうだけど・・・家っていうかアパートに住んでいる学生かな？

汚くてごめんね。」

と言われリオは

「いえ・・・汚くはないですよ。でも・・・いつも山さんはここに

1人で住んでるのか？」

と興味をもったリオを見て俺は

「うん、ここが一番安くて使いやすいアパートだからね。

バイトの給料と学費で何とかいけそうなところだから助かったよ。

で・・・2人は今日はどういったご用件で？」

と質問をして2人は

「今日は2人で山さんにごちそうを作りたいと思い来ました。」

もちろん材料も買ってきたので一緒に食べませんか？」

とリオは言って俺は

「2人とも家の夕ご飯は食べなくていいのか？」

と言われ2人は

「私はお父さんに伝えたから大丈夫ですよ。」

「私はお母さんに山さんにご飯を作りたいと言ったら

一緒に食べてきなさいと言われました。」

と言って俺は

「そつか・・・じゃあ・・・頼むよ」

と言い2人は

「うん！」

「はい」

と言って2人はキッチンに向かって料理を作った。そして・・・

見たのは今日の夕ご飯のメニュー

・からあげ

・サラダ

・味噌汁

・混ぜご飯（茸類、ごぼうなど）

結構おいしかった。そして片付けまでしてくれて俺は

「今日はありがとう。糲見、リオ。おいしかった。」

と言って2人は

「山さんが喜んでくれてうれしい」

「山さんに1回料理を作りたくって頑張ったかいました。」

と言ってリオが俺に

「山さん・・・2週間後に中間テストがありますよね？」

と言って俺は

「ああ、確かあったね。」

と言われリオが

「私ね・・・勉強が少し駄目だから・・・もし・・・よかったら

勉強教えてくれませんか？」

と言われ俺は

「俺でいいなら別に構わないぞ？だが・・・俺よりは
糰見のほうが教え方がうまいぞ？」

と言われ糰見は

「いえ・・・私は・・・」

と恥ずかしくなって俺は

「まあ・・・今週の土日勉強教えようか？」

と言われリオが

「本当ですか？！じゃあ・・・私の家に来ませんか？」

そこなら辞書などがあっているいろ教えてもらえるから」

と言われ俺は

「俺が言ってもいいのか？うちでも構わんよ？」

と言われリオは

「いえ・・・今日は山さんの家に来たから今度は私の家に
来てください。そうだ！糰見ちゃんも来ない？」

と言われ糰見は

「私も行ってもいいでしょうか？」

と聞かれリオは

「もちろん！だって・・・私は・・・勉強が苦手だから2人に
教えてもらいたいから・・・」

と言つて俺が

「そうだな。糰見がいたら俺も助かる。来てくれるか？」

と言われ糰見は

「私でよければ、よろしくお願いします。」

と頭を下げました。そしてリオが

「じゃあ、今週の土曜日に13時に山さんの家で集合でいい？」

と言つて俺たちは

「了解」

「わかりました」

と言って2人は帰って行った。

（第14章終わり）

リオの家

リオと糰見が俺のために家まで来て料理を作ってくれた。

そして・・・リオが2週間後に中間テストがあることで勉強が苦手らしく一緒に勉強会をしようつといい数日後の土曜日の13時に俺はアパートの前に待ってた。そして

「山さん〴〵お待たせ〴〵」

と先に来たのがリオだ。

「いや、俺も今来たばかりだ。」

と言ってリオは

「そっか〴〵今日はよろしくお願いします。」

と頭を下げた。そして俺は

「ああ、俺もなるべく分かりやすく教えるが俺より

糰見のほうが教えやすいと思うぞ？」

と言ってリオは

「そうですね・・・分かりました〴〵」

と話したら

「山さんお待たせしました。」

と糰見が走ってきた。俺は

「そんなに焦らなくてもいいだぞ？」

と言い、糰見は

「ちよつと遅れてしまいすいません」

と言って俺らは大丈夫つと言ってリオが

「後からねコレットちゃんが来るから。だけどね・・・

加奈子ちゃん今日部活だつて・・・明日はこれるって

言つてた・・・」

と言って俺は

「そっか・・・」

と言って俺たちはリオの家に歩いて行つた。そしてリオの家に

着いた途端俺は・・・

「で・・・でかい家ですね・・・」

と言った。なぜなら城みたいな家だったから・・・リオは

「そうでもないよ？天界はこんなのが普通なんで・・・」

と言って糺見は

「普通ですか・・・」

と焦ってた。リオが

「まあ、とにかく・・・入って」

と言って俺と糺見は

「「おじやまします」」

と言って入ってリオの部屋に入ってリオがお茶を取ってくると言っ

て部屋を出た。俺は糺見に

「広い家だね・・・」

と言って糺見も

「そうだね・・・はじめてみました・・・」

とお互いが驚いていた・・・。そして数分後リオが

「お茶を入れてきました」じゃあ・・・勉強教えてください。」

と言って俺たちは勉強を教えた。」（第14章終わり）

勉強会 その1

リオの家を見て俺はすごく驚いたけど・・

なんとか落ち着き俺とリオと糰見で先に

2週間後のテストに向けて勉強をした。

「山さん〱ここを教えてくださいませんか？」

と出されたのが数学だった・・。

「ん〱とねここはこの公式を使うといいよ。

もう少し簡単な方法はこれを使うといいけど。」

と数学の問題を解いていった。俺と糰見は数学の

問題を解きながら分からないところをお互いに

教えながら解いていつてリオが

「そついえば、なんで山さんは糰見ちゃんが勉強が得意

つて言つたの？山さんも勉強得意そうなのに」

と質問をして俺は

「ん〱それは・・初めて糰見と会つたときから数年かけて

糰見は毎回100点近い点数を取つてたからな・・

俺とか・・40〱80が多かつたけどね・・。」

と言つて糰見は

「いえ・・私は復習予習をして、分からないところをお母さんに

聞いたりしていたから・・。」

と恥ずかしくなつて俺は

「まあ・・俺は元々高校に入るつもりはなかった・・これ以上

おばあちゃんの遺産を使いたくなかつたから・・。だから

中卒で仕事をしていこうとしたら眞魅先輩から大学まで

行かないと行けないつと言うおばあちゃんの遺書に書いてたらしく

高校を眞魅先輩がいるこの学校に行くことになり眞魅先輩から

厳しく指導してもらつたんだ・・。だから今では大体のことは

分かるようになってきたがまだまだだな・・。」

と言いいリオが

「そうなんですか・・・私も頑張ろう・・・」

と言って俺たちは黙々と分らないところは教え合い勉強をしてくるうちに

チャイムが鳴ってリオが

「ちよつと行ってくるね」

と言って部屋を出た。そして黙々と問題を解きながらリオが帰ってきて

コレットが来た。

「お待たせしました。山様私も分らないところがあつたら教えてください。」

と言って俺は

「ああ、俺でよかつたら教えるけど俺よりは糰見に聞いたほうがいいぞ？教え方もうまいし・・・」

と言ってコレットが

「そうなんですか」山様糰見ちゃん分らないところがあつたらよろしくお願いします。」

と言って俺たちは勉強をした。そしてテストの教科は数学、国語、英語、理科

の4つで今日は数学と国語を解いていき理科の勉強をしようと思つたとき

1本の電話が鳴り俺は

「はい、山本です。」

と言って相手が

「店長だ。すまんな山本ちよつとお願いしたいことがあつて・・・」
と言って俺は

「何でしょうか？」

と言つたら店長が

「今日来る店員が熱を出してこれなくなつた・・・だから・・・
今日出勤できないか？無理は言わんが」

と言って俺は

「いえ・・・大丈夫ですよ。店長にはいろいろお世話になってますし、

では今から行きますね。」

と言って店長が

「ああ。すまんな休日なのに・・・」

と言って俺は

「気にしないでください。俺は店長にはすごく感謝してますので。では。今から行きますね。」

と言い電話を切って俺はみんなに

「ごめん、急にバイトが入ったから俺はここで帰るね。」

と言ってリオが

「そうですか・・・また明日よろしく願いします。」

と言って俺は

「ああ、明日も来るからまたよろしくな」

と言って2人は

「「はい」」

と言って俺はリオの家を出て店に向かって言った。（第15章終わり）

勉強会 その2

昨日はリオの家に行きリオ、糺見と一緒に先に勉強会をして途中でコレットも来て一緒にやったが、急にバイトの店から連絡が来て俺はそのままバイトに向かうためにリオの家を出た。そして二日目13時にリオの家の前に来たらリオが

「山さんいらしゃいゝもうみなさんいらしゃってますので」

と言って俺はリオの家に入り部屋まで言ったら

「こんにちわゝ山様」

「こんにちわ。山さん」

「こんにちわ。山ちゃん」

と言って俺は

「遅れてごめん。」

と言ったがみんなは大丈夫つと言って俺たちは勉強をした。

俺と糺見はお互いに分からないところを教えていき

加奈子は自分でできるらしく黙々とやったがリオとコレットが

少し社会や理科が苦手らしく俺と糺見で教えながらやっていった。

「山さん。どうやってたら年号覚えられるのですか？」

と言って俺は

「んゝとね年号は数字を語呂合わせいいよ。そっちのほうが覚えやすい。例えば・・・1192年だと

1192（いいくに）つくろつ」とか語呂合わせを作ると

覚えやすいよ。」

と言ってリオは

「ありがとうございます。山さん」

と言って俺は

「いえいえ。」

と言ってコレットが

「山さん原子記号の覚え方とかありますか？」

と聞かれ俺は

「んゝ・・・確かね・・・」

と言ったら糺見は

「確か覚えるのはHゝKまででよかったねゝとね

H H e L i B e B C N O F N e N a M g A l S i
P S C l A r K C a

水平リーベボクの船。七曲りシップスクラークか？

っと言う覚え方でいいはずだよ。まあローマ字読みを
したら・・・いいと思いますよ。」

と言ってコレットが

「糺見ちゃんありがとうゝ」

と言って糺見は

「いえいえ。私は覚え方はそれなので。」

と言って俺は

「俺もその覚え方覚えようかな・・・」

と言って俺たちは黙々とやっていった。

そして・・・18時ごろ俺は

「じゃあ・・・今日は俺はこれで帰るね。」

と言ってリオが

「山さん今日はありがとうございます。またよろしくお願いします。」

と言って俺は

「お礼なら糺見に言って。俺は手伝いをしただけだから。」

と言って糺見は

「私も手伝いをしただけですから。」

と言って俺は

「じゃあまた明日」

と言って俺は家に帰ったのであった。

(第16章終わり)

中間テスト

リオが俺と糰見に勉強を教えてほしいといわれ

中間テストの前の週にリオの家に初めて俺と糰見は

行つてまず3人で勉強をした。糰見は元々勉強が得意であり

俺はまあまあだから糰見が教えられるところは教えてもらい

糰見が無理な場合は俺が教えながらというテスト範囲をしながら

問題を解いて途中でコレットが来て4人で勉強をした。しかし

コレットが来て数時間後にバイトに出てほしいと店長から言われ

俺は店長にはお世話になつてるからバイトに向かうために土曜日は

はやめに帰つた。そして次の日に眞魅先輩以外で勉強会をした。

そして俺と糰見はもうほとんど復習を終えてコレットやリオが

分からないところを俺や糰見で教えあつて勉強をした。

そして・・・月曜日～水曜日までテストがあり木曜日に全部

結果を出され金曜日には全校のテストの結果で成績が優秀だけ

廊下の掲示板に貼られていた。そして俺たちは40人クラスで

4組眞魅先輩は45人クラスで5組あり俺は外を見ていたら

5人が来てリオが

「山さんどうでしたか？」

と質問をした。俺は

「まあまあ。だったよ」

と言つた。なぜなら数学が85点国語が65点英語が60点

理科75点社会が67点だったからだ。いい点数でもないし

悪い点数でもない。まあまあだから俺は気にしてない。

「リオは？」

と聞いたらリオは

「私は山さんと糰見ちゃんのおかげで結構いい点数を取りました。

ありがとうございます。」

と頭を下げた。俺は

「お礼なら糰見に言っておけて。俺は何にもしていないから。」
と言った。糰見は

「私はなにもしてませんよ。」

と恥ずかしくなった。んで何にも話しかけない2人を見て俺は
「コレットと加奈子は？」

と言ったら2人は下を向きながらコレットが

「赤点はなかったけど・・英語がだめだったね・・・」

と言って加奈子は

「私も赤点はなかったけど数学と社会がだめだったよ・・」

と悲しそうに言ったので俺は

「まだ中間テストだから期末でがんばろう。まあ赤点じゃなければ
いいじゃないかな？」

と言って糰見が

「そうですね赤点じゃなければ大丈夫ですし・・・期末では分からない
ない

所は教えますので。」

と言ってリオが

「まあ暗い話はやめて放課後にみんなでカラオケに行こう！もちろん
真魅先輩も呼んでみんなでパーッと歌おう！」

と言って俺は帰ったかったが強制連行されカラオケに行った。

そうそう結果だがクラスで俺は10位糰見は1位コレットが20位
リオが12位加奈子が22位だった。真魅先輩はクラスで1位
学年では俺は20位糰見が4位コレットが30位リオが24位
加奈子は35位で真魅先輩は学年でも1位だった。どんだけ頭いい
ですか・・

っと思っただけ俺たちはカラオケに向かった。（第17章終わり）

中間テスト後

中間テストが終わりテストの結果が返ってきて俺は
帰りたいけど俺はみんなにつかまりカラオケに向かった。

俺は元々歌がうまくないのでみんなの歌を聴きながら
5時間がたつて解散する前にコレットが

「みなさんまだ先ですが・・・夏の予定とかありますか？」
と言われリオは

「コレットちゃんもしかして・・・？」

と言われコレットは

「そのまさかですよ？」

と言つて俺は

「まあ・・・夏休みはバイトがない日なら別にあいてるけど・・・」
と言つて加奈子は

「私も部活がない日なら大丈夫です。」

糰見は

「私は大丈夫ですよ」

眞魅先輩は

「私も大丈夫かな」部活は夏はなしだし」

と言つてコレットは

「じゃあ夏休みの前半は私たちの天界に来ませんか？」

と言つて俺はちよつと悩んだ。眞魅先輩は

「コレットちゃん天界は普通の人に行けないでは？」

と聞いたのでコレットは

「いえ。普通の人だけに行けないけども私たち天界人と
一緒なら大丈夫だよ」みんな来てくれる？」

と言われみんなは

「・・・・・・行きます」

と言つた。俺は

「俺だけはパスはだめか？」

と聞いた。それを聞いたリオは

「何ですか？」

と言われ俺は

「ちよつと・・・天界だけはね・・・」

と言われ真魅先輩は

「山君天界人に何かしたの？」

と聞いたので俺は

「いや・・・何にもしてないだが・・・」

と言ったので真魅先輩は

「じゃあ強制連行」

と言われ俺は強制連行されることになった。

そして話が終わり俺は1人で家に帰った。（第18章終わり）

天界への準備

中間テストが終わりコレットが突然に

「夏休みの前半に天界に行きませんか？」

と言われ俺は少し困ったんだが眞魅先輩に

強制連行され行くことになった。

だが・・・その前に中間テスト後の1ヶ月後に

期末テストがあること。なので期末テストまでに

土日を使つて勉強会を開くことになった。

その時もリオが

「勉強会は山さんの家じゃ迷惑だし・・・

私の家に来て」

と言われ俺たちはありがたくリオの家に行き、

リオ、コレット、加奈子、俺はわからないところを

糺見に教えてもらい解いていこうつと言う話なんだが

なぜか学年が違う眞魅先輩も来ていてみんなで解いていくことに

なった。まあそれも悪くないかつと思い期末テストまでに

がんばつて内容を理解してテストに向かった。そして

結果は中間テストよりみんな点数が上がった。

まあ眞魅先輩は毎回100点ばかりなのであまり気にして

ないらしい。んでなんとか俺たちは欠点を出すことがなく

夏休みを迎えた。俺は夏休みに入ってから一気に夏休みの宿題を

片づけていた。なぜならめんどくさいからなのだ。

んで勉強をしてる途中で一本の電話が鳴った。

「はい。山本ですが」

と言つて声がしたのは・・・

「山様ですか？コレットです。」

と聞こえたので俺は

「コレットかどうした？」

と言ってコレットは

「えーと・・・前に夏休みの前半に天界に行くことを伝えたので
一応来週の月々水曜日まで大丈夫でしょうか？」

と言われ俺は

「ああ、バイトのほうには休みをもらうから大丈夫だ。」

と言った。コレットは

「山様前に自分はパスつと聞きましたが・・・何かあったのですか
？」

と言って俺は

「ああ・・・ちょっとな。まあ気にしないでいいぞ。俺は
逃げるだけはいないから。ちゃんと行くから」

と言ってコレットは

「そうですか・・・無理だけはしないでくださいね・・・」

と言われ俺は

「ああ・・・ありがとうな・・・コレット」

と言って電話を切った。そして俺は

「さて来週の準備しないとな・・・」

と言ってまずは宿題をして準備をしたのであった。
(第19章終わり)

天界へ

リオが提案した天界に行くことになった俺たちは
約束の日に出る前にみんなが集まった。

そして・・・

「みんな準備いいですか？」

とリオが言っただけ

「じゃあ今から魔法を唱えますので皆さん目をつぶってください。」

と言っただけ俺たちは目をつぶったのを確認をしてリオとコレットは
呪文を唱えて

「「テレポート！」」

と言っただけ俺たちは天界に転送をした。そしてついた俺たちの周りには
天界人がたくさんいた。そしてリオは

「元々天界人は天界にいるときは天使の翼を出さないとイケないの
で・・・

天界人との見間違えがないようにするためですね。」

と言っただけ俺たちはリオとコレットが住んでいる場所に向かった。

「一応私が今日で火曜日と水曜日はコレットちゃんの家に泊まるので
みんなよろしくね。」

と言っただけ俺たちはリオの家に行き目の前にはお城がたっただけ

「リオ・・・俺たちの世界にも家でいけど・・・ここもでかいだね・
」

と俺は言っただけ。リオは

「元々天界の人の家はこれぐらいが普通ですよ。私たちが山さん
達の

世界に言っただけ家が小さくってびっくりしました・・・。」

と言っただけ。一応俺たちはリオの部屋に入って俺はリオに

「部屋割りとか決まってるのか？」

と聞いてリオは

「まだ決まっていただけど・・・一応みんなと寝たいから大部屋で寝ようかな」っと思ってるよ」

と言って俺は

「俺はリビングで寝てはダメか？」

と言ってリオは

「えゝ山さんも一緒に寝ましようよ」

と言った。俺は

「いやいや・・・そこは・・・男女関係もあるし・・・」

と言ったら真魅先輩は

「いいじゃない？山君こういうのも経験してみたら？」

と笑いながら言った。コレットも

「私ももつと山様のことをもつと知りたいので・・・」

できれば・・・一緒に寝たいです・・・。」

と言って他の人もいいよっと言う声で俺は

拒否権なしで一緒に眠ることを決定してしまった。

その後俺はいやな事件に遭遇した。（第20章終わり）

天界へ その1

大部屋で寝ることに決まってしまった俺は落ち込みながら
リオとコレットが

「天界の町を案内しますね」

と言ってみんなで外に出て町案内をした。

そして俺以外の3人は興味があきすごく楽しそうに
見ていた。そして気付いたことをコレットに聞いてみた。

「天界の通貨ってどんなもの？」

と言ってコレットが

「えーとこれですね。」

と見せたものが俺たちと同じものだった。

「私も山様のところに行ってみて同じ通貨でよかったので
とても助かりました・・・」

と言った。1時間ぐらい案内をしてコレットが

「あんまり離れないようにしてね1人だと危ないからなるべく2人で

1時間後ここに集合で」

と言ってコレットとリオの2手に分かれて買い物をした。

俺は興味がなかったのでリオたちの買い物中に

店の外にいるつといて外に見てたら1人の女の人が5人の

男の人に絡まれていてすごく怖がってたので近くによって女の人が
「やめてください・・・」

と言ったけど男の人は全く話を聞かずに女の子に近付けようとした
ので

「やめてあげたら？」

と言って男たちが

「ああ！俺たちにケンカをうってるのか？」

と切れながら言ったので俺は

「いやケンカより1人に対して5人はやめたほうがいいよ。」

彼女怖がつてるから。」

と言って1人の男が

「俺たちの邪魔をするじゃねー!!」

と言って男が俺の前に殴ってきて俺はきれいにかわした。

そして・・・男が

「俺たちをなめるなよ!」

と魔法を唱えて俺の前にうってきたので俺は

「はあ・・・仕方ないか・・・」

と言って誰も聞こえない声で

「リフレクター」

と言った。俺の前には見えない盾が出て魔法を打ち返して

男たちに向かって魔法と直撃をした。そして男たちが気絶をして

俺は彼女に

「大丈夫ですか?」

と言われ彼女は

「ええ・・・助けてくれてありがとうございます。もしかして・・・

あなたは・・・天魔人ですか?」

と言われ俺は

「そのことは秘密にしてくれませんか?元々俺は魔法は好き

じゃないから全く使わないだけだよ。」

と言って俺は彼女の前から離れてリオたちのところに

戻って行った。

(第21章終わり)

天界へ その2

俺は1人の彼女に自分の本当の正体をばらしてしまい俺は急いで戻って行つた。俺が戻ってきたときにちょうどリオたちが店の外に戻ってきて

「お待たせ〜待った〜?」

と言つた。俺は

「いや、大丈夫だったよ。」

と言つてリオは

「じゃあそろそろいい時間ね。また買い物は2日間あるからまた行こう!」

と言つて俺たちはコレット達の集合場所に向かった。

そしてリオの家に帰り俺たちはゆっくりしたら1人の女性が「リオ様、お客様のお茶とお菓子を持ってきました。」

と言つて入って行つた。そしてリオは

「ありがとう〜」

と言つて俺も

「ありがとうございます。」

と頭を下げたらさつき助けた彼女だった・・・。

彼女も俺を見て

「あら・・・あなたは先ほどの・・・」

と行つてリオは

「リディア山さんのことを知ってるの?」

と言つてリディアっと言う女性は

「ええ・・・私さつきこの方に助けていただいたので」

と言つて俺はあわてて

「さつき買い物をしてるときに袋から物が落ちててそれをひろっただけだよ」

と言つてリオは

「そうなんだ。あ、みんなに紹介するね。この方は
ウチのメイドさんでリディアっていうの。よろしくね。
リディアも休めるときは休んでいいからね。いつも働きすぎ
だから。」

と言ってリディアは

「私はちゃんと休みをもらってるので大丈夫です。ありがとう
ございました。」

と頭を下げ、部屋を出た。その後俺たちはリオ、コレットに
天界について話を聞いて俺たちは夜まで話を続けた。

その後俺はリディアに自分の正体をばらすことになるとは思
ってもしなかった……。 （第22章終わり）

天界へ その3

あんまり行きたくない俺は天界に来てしまいしかも・
自分の正体を気付かれてしまいすごく困った状態でリオの
家に戻ったらまさかのリオのメイドさんだったので
すごく困ってしまった・・・。そして・・・

みんなはお風呂入るので俺は

「ちよつと庭に出てくるね」

と言って俺は庭に行った。そして・・・

「ふう・・・」

とため息をついたとき

「どうしたのですか？」

と言われ振り返ったらリディアがいた。そして俺は

「確か・・リディアさんでしたよね？」

と言われリディアは

「はい。リディアです。こんなところでどうしたのですか？」

と質問をされたので俺は

「いえ・・・」

と言われリディアは

「あの・・・あなたの正体は・・・天魔人ですよね？」

と言われ俺は

「ああ・・・俺は天魔人だ」

と言ってリディアは

「そうですか・・・よかった・・・。」

と言って俺は

「なぜ？よかったの??」

と質問を返したらリディアは

「だって・・私も天魔人ですから・・・」

つと言われ俺は

「え．．．？」

と言った。リディアは

「私は．．．5年前まで私は家族で密かに暮らしてました。

父は魔界人なので正体がばれるのでいつも家において母は

買い物を行ったりして暮らしてましたが．．．そんなある日

私と母は買い物をしていて帰ってきたら父がなくなっていました．．

多分．．．私や母がいると天界人でも母は強大な魔力を持った人で

普通の天界人には負けることはないけど、しかし．．父も魔力は

高いけど天界人の魔法には勝てないのです．．だから．．

父は．．．誰かに殺されたと私と母は思ってた母は犯人捜しをして

ましたが

途中で事故にあって．．なくなってしまうました．．私は1人

になって

リ才様のお父様に助けてもらい今ではここでメイドとなって働い

てます。」

と言って俺はリディアに自分の正体を明かした。（第23章終わ

り）

天界へ その4

「そっか・・・じゃあ・・・正体を明かしてくれたお礼に俺も正体を明かすわ。」

俺は・・・天魔人つと知ったのは8年前だ。俺は元々天界には住んでなかった。

なぜなら親は天界と魔界での有名な人で天界や魔界にいたら殺されてしまう

可能性があつたからだ・・・」

と言ってリディアは

「その・・・父と母の名前は？」

と言って俺は

「俺の父と母は天界人の母は何代目か忘れたけどフィーナ女王つと言ってたな・・・」

魔界の父は10代目のダレオ・リオ大魔王つと言ってたな。」

と言ってリディアは

「知ってます・・・フィーナ女王様はこの天界の中でも魔力が高く天界人に

高く評価した方ですね。ダレオ・リオ大魔王は魔界の中でも最強つと

言わた人物ですね」

と言った。俺は

「ああ、そうだ俺が知ったのはおばあちゃんが亡くなった4年前のことだ

おばあちゃんから教えてもらったのは俺が生まれる19年前天界と魔界は

お互い助け合ってた。しかし・・・魔界人で一部は天界人と仲良くしたくない

つと言って一部の魔界人は天界に向かって攻撃を仕掛けるのを俺

の父は

止めた。しかし・・・1対100人以上を相手をして大ダメージを食らった父は

天界の城の近くに倒れたときに母に助けられ。母は父を見て惚れてしまつて

2人は天界、魔界を飛び出して違う世界に向かった。母はおばあちゃんが違う

世界にいることを知つてそこに来てそして・・・俺が生まれ俺が5年生までは

平和に暮らしてたが・・・俺が5年生になつてから天界人が母を見つけれ

総攻撃を食らつて父と母は俺を助けるためになくなつてしまつた・
。。

そして俺はおばあちゃんに助けられ俺は親が亡くなつたのを悔んで魔力が膨大になつたのでおばあちゃんが俺に魔力を封印をしてくれて

今俺は天使の羽と悪魔の羽の交互の羽にはならずにすんだよ・・・
だけど・・・おばあちゃんも年で俺が中学2年に亡くなつた。亡くなる前に

俺の魔力を抑えるために少し封印を解いてくれたので魔法は使えるけど

俺は使いたくなかつた。なぜなら・・・使つたら俺は狙われてもかまわないが

真魅先輩、加奈子、糰見には迷惑をかけたくないし、コレットやリオに

あつてから天界人だとすぐにわかつたが俺とかかわつたらリオやコレットにも

被害が合うかもしれないから・・・俺は天界にも行きたくないかつた・・・

だから・・・俺は・・・」

と言ってリディアは

「だから・・・私にばれてしまつて余計に心配をしたわけね？」

と言って俺は

「ああ・・・ばれてしまったなら俺はリオたちから離れてもいいと思つてゐる」

被害があつても困るからね・・・」

と言ってリディアは

「大丈夫です。私はあなたのことは誰にも言いません。ですから・・・

・

リオ様とコレット様。他の皆さまの悲しい顔を見せないでほしいです・・・」

と言って俺は

「今は大丈夫だと思うけど・・・しかし・・・今後いつばれるかわからない・・・」

だから高校まではなるべくばれないようにするけど俺は20歳になると

封印が解いてしまつとおばあちゃんにいわれたから・・・もし封印が

解かれたらリオやコレットには正体がばれるだろう。もし俺の正体が

ばれたら俺はみんなの前から姿を消すよ。」

と言つた。リディアは

「分かりました・・・私もサポートで来たらサポートさせていただきますね。」

と言って俺は

「まあ・・・リディアさんも迷惑かけないから・・・」

とお互いが暗くなつたときにリオが入つてきて

「山さん～お風呂どうぞ～。あれ？リディア山さんと話してたの？」と質問をしたのでリディアは

「ええ、いろいろと話を付き合つてもらいました。」

と言っ て俺は

「リディアさんお話ありがとうございます。では俺はお風呂に入りますので」

とお辞儀をして俺はお風呂場に向かった。

（第24章終わり）

天界へ その5

俺はリディアに正体を明かした。そしてその後の火曜日は

リオの家にお世話になり、水曜日はコレットの家にお世話になった。

そして木曜日にいろいろ買い物をして俺たちは自分たちの住む世界に戻る準備をした。俺はコレットの家の家族にお礼をしてリオの家に向かった。そしていたのがリディアで俺は

「2日間お世話になりました。」

と頭を下げた。リディアは

「こちらこそ楽しかったのでありがとうございます。旦那さまにはお伝えしますね。」

と言って俺は

「ありがとうございます。」

と言った。俺が去る時にリディアが

「あ、山本さんの正体は誰も話しませんので気にしないでください。それと・・・これは何かあった時に使ってください。」

と渡されたものはカードっぽい品物だった。

「これは？」

俺はリディアに質問したらリディアは

「今は何にもない普通のカードですが・・・もしあなたが

天魔の力が発揮されたときにこのカードがあなたの力になるでしょう。」

「ただ・・・カード1枚によって運命が変わるので決して危ないときに

使ってください。お願いします。」

と言って俺は

「ああ、ありがとうございます。俺はもう魔法は使わないよ。

高校までコレットやリオには迷惑かけないようにするから。」
「と言って俺はリオの家を出た。そしてみんなの場所に向かった。」

「みんな準備いい？」

とリオが言ってみんなが大丈夫そうだったのでリオとコレットが「レポート！」

と呪文をして俺たちは天界を後にした。そして俺のアパートの前についてコレットは

「みなさん楽しかったでしょうか？」

と質問をしたので真魅先輩は

「うんうん。天界は初めて行ってみたいと思ってたから本当に楽しかった。」

と大満足らしく糰見や加奈子も

「私もいろいろと経験しました。」

「私も天界に初めて行ったから本当に楽しかったよ。」

とみんな満足だった。そして解散をした後俺はアパートに戻ろうとしたときリオが

「山さん少しいいでしょうか？」

と言って俺は

「ああ、別に構わないよ。」

と言って俺はアパートの中にリオを入れた。そしてリオが

「あの・・・山さん天界は楽しかったですか？」

と言って俺は

「まあまあ・・・だったかな？どうして？」

と言ってリオは

「いえ・・・天界でも山さんあまり楽しそうになかったのだからやっぱり・・・連れてきてまずかったかな？っと思つてて・・・」

と言って俺は

「気にしないよ。みんなが楽しければ俺はいいから。」

と言ったがリオが

「でも・・・」

と言った。俺は

「俺はみんなが楽しければいいから気にしないで。」

俺はちょっときつい言葉を行ったがリオは

「そうですか・・・」

つとごく悲しそうに言っ

「まだ夏休みは始まったばかりなのでこれからもうろしくお願いします。」

リオが言っ

「よし・・・宿題をするか」

と言っ

（第25章おわり）

夏と言えば……

俺たちは天界に行った後の数日後俺はもう少しで

夏の宿題を終わるところだった。今日も勉強をしていたら

「山君ゝいるゝ？」

眞魅先輩の声がしたので俺は玄関に来てドアを開けて

「おはようございます。眞魅先輩」

と俺がいったら眞魅先輩は

「もゝ学校じゃないときは眞魅でいいのに……」

文句いいながら玄関に入って眞魅先輩は

「まあ……そんな話は置いといて山君今何してた？」

と聞かれ俺は

「んゝと……今は夏の宿題をやってましたね。」

と言って眞魅先輩は

「ほゝもうはじめてるのかゝえらいえらい。」

俺の頭をなでながら言った。俺は

「それはともかく……今日はどうしたのですか？」

と質問をしたら眞魅先輩は

「んゝまあ。1つは山君の顔を見たかったと今何してるの

かなゝつとすぐ気になってきてみたのが1つ。もう1つは

山君は多分だけどこの夏休みはどこにも行かない気でしょ？」

と言われ俺は

「予定がないからね……多分バイトや軽い運動をしてるだけ

だと思うよ……」

と言ったら眞魅先輩は

「あゝやつぱりゝだから……私が山君に誘うと思って来たのよ。

んで……来週1週間私と糰見ちゃん、加奈子ちゃん、リオちゃん

コレットちゃんと山君で旅行に行こうかと思ってるんだけど行かない？」

と言われ俺は

「いいけど・・・俺は・・・」

と言ったら真魅先輩は

「ああ、バイトね。大丈夫もう店長には私が言ってるよ～ちゃんと許可ももらってるから～大丈夫～一応海鳴島に行こうかと思ってるのよ

コレットちゃんやりオちゃんに天空に行かせてもらっていい思い出を

作らせてもらったから、そのお礼に今度は私たちがリオちゃんとコレットちゃんにきれいな場所を教えたいと思ったから～まあ海鳴島は海もすつごくきれいだし山も近いから最初は海に行き後から山に行こうかな～っと思ってるけど・・・だからかな？」

と聞かれたので俺は

「ああ・・・別にいいけど・・・ちゃんと計画を立ててよ・・・俺は計画を立てるのがとても苦手だから・・・」

俺が言ったら真魅先輩は

「うんうん。大丈夫私がいいスケジュールを作るから！

楽しみにしててね！山君も楽しむと思うよ～うわ～楽しみだな～まあ、なるべくは山君の全体の負担は減らすから～安心してね～」

と言って真魅先輩はまたね～っとかから出て行った。俺は

「また・・・大変なことにならなければいいだな・・・」

と言って勉強に向かった。（第26章終わり）

海鳴島へ その1

天界から帰ってきた俺たちは夏休みを過ごしたときに

眞魅先輩から天界のお礼に今度は俺たちがリオとコレットに

私たちのきれいな場所を案内しようつということので

きれいな海や山がみえる海鳴島に行くことになった。

そして・・・

「うわゝすごくきれいですねゝ」

とコレットが言ってるリオも

「本当だゝ天界でもこんなきれいな海ははじめてみましたゝ」

とすごく喜んでいた。眞魅先輩が海鳴島に行く前に俺のところに
来て低コストで行けるスケジュールを考えてくれた。しかも

俺はバイトがあつたのに眞魅先輩がバイトがある俺を無理やりにも
連れていくつもりだったので店長に交渉してたらしく俺も驚いてた。

店長には申し訳ないつとすごく思う俺は・・・これが終わったら
がんばって働こうつと思つた。そしてうちのアパートから出て

4時間かかってやつと海鳴島についた。そして俺たちが住む宿に
向かつて宿に着いたら

「いらしゃいませゝ」

女将さんが俺たちの前に来て挨拶をしてくれた。

「こんにちわゝこれから5日間よろしくお願いします。」

と眞魅先輩が俺たちの代表で挨拶をした。そして俺は眞魅先輩に

「俺は別室を取るよ。」

と言つたら眞魅先輩は

「えゝ山君がいないとつまらないからだゝめ」

と言われ俺は

「いやいや・・・さすがに・・・男1人で女5人はまずいでは？」
と言つただけと眞魅先輩が

「大丈夫ゝ山君は変なことをしないからゝ」

張り切って言われた……。そして俺は落ち込みながらみんなと一緒にの部屋で寝ることになった。荷物を置いた後真魅先輩がみんなに

「この後暇だから明後日山に行くことにして今日と明日は海に行かない？」

と言われ女子4人は

「……賛成」

と言われ俺たちは海に行くことになった。海ならのんびりできると自分は思いながら俺たちは海に向かって歩いた。（第27章終わり）

海鳴島 その2

「海だね」

眞魅先輩が言った。そう俺たちは今海鳴島に来ているのである。

「眞魅先輩着替えるの早いですね。」

俺が言ったら眞魅先輩は

「うん、山君を待たせてはいけないと思ってね。」

と言われた。そして

「山君天界で何かあったの？」

と言われ俺は

「なぜ？」

と返した。眞魅先輩は

「んゝゝゝ天界に来た時から帰る前まで山君あんまり

楽しそうになかったしゝゝ何かあったのかなゝ？つと

ちよつと心配をしてたんだよゝゝ」

と言われたので

「いえゝゝはじめてきたので緊張をしてたからゝゝゝ

でも楽しかったですよ。」

俺は初めて眞魅先輩に嘘をついた。

「そうなんだゝ。まあ山君が暗くなつたのがきになつたのが1つで

リオちゃんやコレットちゃんにお礼をしたかったからここを

選んだから山君も楽しんでねゝ一応ここ私の親戚の宿だったから」

眞魅先輩が言った後に

「ゝゝゝお待たせゝゝゝ」

と4人が俺たちのところに集まってきた。そして

「それじゃ俺も着替えてくるから先に遊んで」

と言つて俺は着替えに行つた。着替え終わつたら

「山様ゝビーチバレーしませんか？」

と言われみんなでビーチバレーをした。その後各自ビーチバレーや

泳ぎなどをしていて俺も少し泳いだ。

俺は疲れたから先にみんなより着替えて戻ろうとしたときに
1人の女の子が泣いていた。そして俺は気になったので

「どうしたの？」

と言って女の子が泣いてばかりだったので俺は

「もしかして・・・親とはぐれたの？」

と質問をした。女の子が

「うん・・・」

と言って俺は

「じゃあ一緒に探そうか」

と言って俺は女の子と一緒に親を探していた。10分ぐらい探して
たら

女の子の親を見つかって俺はみんなのところに戻っていたら

「やっぱり優しいね山ちゃん」

と加奈子が俺に言った。俺は

「そうか？」

つと言った。加奈子は

「山ちゃんは昔から困ってる人にはすごく優しくったからね」
「やっぱりうらやましい・・・私も・・・1回山さんに助けて
もらいたいな」

加奈子が言って俺は

「加奈子が困ってるときはいつでも言ってくれ」

恥ずかしながら俺は言って加奈子は

「ありがとう・・・山ちゃん」

と言って俺と加奈子はみんなの場所に向かった。
（第28章終わり）

海鳴島 その3

俺たちは1日目海に言っているいろいろ遊んで俺は小さい女の子を助けてみんなのところにもどった。

そして夜俺たちは夕ご飯を食べて俺はお風呂に入った。

「ふう〜。いい湯加減だ。。まあこれからどうしようかな。。。」

と言った。なぜなら俺は

「天界でまさかの天魔人のことを知られてしまった。

まあ俺はばれるのは仕方ないと思ってるけどまさか

早くばれるとは思ってもいなかった。しかし・

リディアは俺のことを秘密にしてくれた。それは

ありがたい・・だが・もし仮にリディアを助けたとき

リディア以外にも俺の正体がばれたら・・リオやコレットは・・

いや・・リオやコレットはまだ大丈夫だと思うけど・・

加奈子や糰見、真魅先輩のことが心配だ・・俺は・・

この後俺は天魔人のことをばれずにいられるか・・

もしばれたら俺はみんなから離れよう。」

と決心した。露天風呂なので俺は空を見上げて

「きれいだな。」

とつぶやいたその後俺は少し空を見上げた時に

「やつほ〜山君〜」

と言われ俺が振り返ったらみんながいた。俺は

「ここ・・たしか・・男湯だったよな？」

と言ったら真魅先輩は

「うん。そうだよ。女将さんに頼んで少しだけ貸し切りにして

もらったんだよ〜山君との思いでに〜」

と笑いながら言った。俺は

「おいおい・・それは勘弁してくれよ。。。」

と泣きそうになった・・・そして俺は早く出たいのに

5人がだぐめつといわれ俺はみんなが出るまで残されてしまった。
解放されたのが・・・1時間後・・・なぜ・・・女の子は・・・
長風呂ができるんだ・・・ありえん・・・と俺はつぶいやって
部屋に戻った。そして12時までみんなでいろいと話して
俺は端っこで寝たいのになぜか真ん中になつて俺は心の中で
「やめて・・・」

と言つて深く眠った。

（第29章終わり）

海鳴島 その4

3日目の朝俺はみんなより早く起きたので静かに部屋を出て旅館の周辺を走っていた。俺は元々小さい時から体が弱くて天魔人のことをおばあちゃんから聞いて俺は少しでも強くなるためにこうして軽い運動だが・・・トレーニングをしていた。まあ、天界では運動が厳しい状態だったのでやめてたがね・・・なぜなら1つはリディアさんに天魔人のことをばれてしまいもしかしたら他の人も気づいてるかもしれないから。2つ目はもし早く起きても家に入るのに防犯ロックがかかってしまい自分では入れない仕組みになってるから・・・まあ、ここなら勝手に旅館から出ても俺は気にしなく気楽に走れるからいいだな。

「ふう・・・」

と俺は10キロ走ったところで少し足をとめた。そして俺は「おばあちゃん俺はとうとう人にばれてしまいました・・・

これからどうしたらいいのかな・・・」

と海に向けて話した。まあ・・・おばあちゃんもお母さん、お父さんも

帰ってこないけど・・・俺は・・・俺の正体がばれるまではみんなのことを守りたい。だけど・・・ばれたらみんなはどう思うのか

俺はどうやって生きていけばいいのか・・・とか思ってた・・・。

まあ、俺は気楽で頑張っていこうじゃないか・・・これから俺よりみんなの思い出ができるように・・・といいながら旅館にもどった。

「山君遅い」

と俺が旅館に戻ると真魅先輩が言って俺は

「ごめんごめん・・・」

と誤った。真魅先輩は

「どこに行つてたの？」

と言つて俺は

「外で走つてた。」

言つて眞魅先輩は

「すご・・・今日山に登るけど大丈夫？」

と言つて俺は

「大丈夫だけど？」

言つて俺たちは朝ごはんを食べて山の準備に向かった。

山に登つて目的地に着くのが3時間後まあハードって言つたら

ハードだけど・・・俺は山登りは慣れてるけど初めて登る

リオ、コレットは仕方が・・・まさか・・・眞魅先輩も

ダウンするとは・・・俺は

「みんな少し休むか？」

言つて眞魅先輩は

「はあはあ・・・私は大丈夫だよ・・・」

と言つてたけど俺は大丈夫には見えない・・・てか加奈子なら

大丈夫そうに見えるのはいいんだけど糰見が意外に大丈夫そうなのは

びつくりした俺は

「糰見は大丈夫なのか？」

と聞いたら糰見は

「私は昔お父さんが山登りが好きだったからよく行つたの。だから

私は大丈夫だよ。」

言つて俺は

「それはすごい・・・まあ3人がきつそうだからもう10分休んで

行こうか。」

言つて10分後俺たちは出発をした。そして休みながら登って行つ

たから

普通は3時間で登れるはずなのに30分遅れて到着した。まあ初めて

だったら仕方ないかと思つてたり。そして

「うわゝすごきれいゝ」

とリオが喜んでいた。まあ、

「結構きれいな島だからね・・・そりゃきれいなはずだわ。」

俺は心の中で言った。まあみんながうれしそうに見ていたから俺はよかったな・・・っと思うまあその後降りるのも大変だなとか思いながら・・・

結局往復で5時間かかってしまった。まあ仕方ないか・・・

絶景だったからとくに3人が筋肉痛にならないといいけど大丈夫かな？

っとな俺は思った。その後俺はみんなより早くお風呂に入りまた入ってこないように

早めに出たのでみんなになぜか怒られた。。。その後みんな疲れて早めに就寝をした。 （第30章終り）

海鳴島 その5

山登りをした俺たちはここ海鳴島を後2日残りことになった。

で・・・現在俺と糰見、加奈子以外は

「いたた・・・」

3人がかなり筋肉痛だった。まあ、まさか真魅先輩も初めての

山登りだとは知らなかった・・・俺は

「まあ・・・今日1日は安静だな。まあ温泉でもゆつくり入ったほうが
いいぞ。それと終わったら加奈子と糰見はあいつらの痛いところを
ほぐしてやってあげて。」

俺は言った。なぜ俺がしないのか？つというところわかるだろ？俺は男だ
自分から女の子の体を触ることなどしたくはない・・・。

「分かった・・・そうする・・・」

と真魅先輩が言っけてりオ、コレットも一緒に温泉に向かった。

で・・・残ったのは俺と糰見と加奈子だった。俺はあとちよつとの
宿題を終わらすために宿題を出した。それを見た加奈子が

「山ちゃんやっぱり宿題持って来たんだ」

と言っけて俺は

「ああ、まあもうすぐ終わるからな。一応やれる時はやらないと。」

と言っけて俺は宿題をやるうとしたら2人も俺のところに来て

「私ももう少しで終わるので後で答え合わせしませんか？」

と糰見が言った。んで

「私も早く終わらせないといけないからやるけど・・・分からないと
ころは

教えてよね。」

加奈子が言っけて俺は

「ああ、分かったやろうか。」

と言い始めて3人が戻ってくるまで俺たちは夏休みの宿題をやり始
めた。

夏の宿題は数学、国語、英語、社会の4つしか出されなく

そのうち俺は数学、国語、社会の3つは終わらせ、英語は英会話だけ残っていた。糰見は国語、英語、社会の3つが終わり、数学の最後だけ

残っていた。お互い分からないところを教えあい間違えたところを訂正をして

俺たちの宿題は終わらせた。そして終わらないところを加奈子に教えながら

俺たちは夏休み後のテストに向けての復習をした。まあ加奈子も数学と社会以外は

すぐに問題は解けたがやっぱり数学と社会だけは苦手らしく俺と糰見で教えながら

宿題をやり始めた。そして加奈子の宿題がだいたい終わってきたとき

3人が帰ってきたので俺たちは休憩をしてのんびり過ごした。

その次の日はお土産を買う日でみんな各自のお土産に悩んでいた。

俺は店長やバイト仲間のために買って俺はすぐに戻った。そして

まだみんながお土産を買うのを悩んでるとき俺は少し砂浜まで

歩いて向かった。

（第31章終わり）

海鳴島 その6

砂浜に来た俺はずーと海を眺めていたら

「隣いい？」

糰見が言った。俺は

「別にかまわないがもうお土産買ったのか？」

と質問をしたら

「うん。私はお土産元々決まってたから。」

糰見が言って俺たちは夕日の海を眺めていた。

眺めていたら糰見が

「山さんはもう進学とか決まってるの？」

と言われ俺は

「んゝゝゝ今のところはゝゝ糰見は？」

と聞かれ糰見は

「私はねゝゝまだ決めてないけどいつかね

山さんみたいな人になりたいと思ってるの」

と恥ずかしそうに言ったので俺は

「なゝゝなんで？」

と言って糰見は

「私はね。元々人に話すのも苦手だし困ってる人に

助けたりしたことがないのゝゝ。でもね山さんは

昔から自分から話しかけないことが多いけどでもね

私は私たちがいないときに山さんが困ってる人を

見捨てなく助けるところを私は見てたのゝゝ

だからねゝゝ私もいつか山さんみたいな優しく

人に親切な人になりたいたく先生になろうかなゝ

とか思ってるのよ。」

と言った。俺は

「まあゝゝこれだけは言っとくよゝゝ

糰見は多分立派な先生になれると思う。

だが・・・俺にはなるではないぞ・・・」

とはつきり言われ糰見は

「え・・・？」

とびつくりしていた。俺は

「まあ、糰見なら大丈夫さ。さてみんな待つてるし
行こうか。」

と俺は言った。糰見は

「う・・・うん」

疑問に思いながら俺たちは旅館に戻った。帰る途中で
俺は心の中で

「ごめんな糰見。だが・・・俺のようになったらだめだ・・・

俺みたいになったら糰見もいつか・・・だから糰見は

俺より立派に頑張ってくれよ」

言った。明日で俺たちは海鳴島を出ることになり今日は
遅くまで起きて夜中1時にはみんなが就寝をした。

そして朝、朝ごはんを食べて準備をしたら

「・・・・・・ありがとうございました」・・・・・・」

と言って俺たちは旅館をでた。1日目2日目は海で遊び

3日目は山にのぼってみんな楽しかったように飛行機の中で
ぐっすりと寝て俺たちはゆっくり自分たちの家に帰った。（第32
章終わり）

海鳴島後

海鳴島に帰ってきた俺たちは各自解散となった。

俺は今日はバイトがなかったがお土産も買ってきたことだし今のうちにと言うことでバイトに向かって行った。

着いた時に俺は

「こんにちは、店長いますでしょうか？」

俺が行った時店長が現れ

「お、山本元気だったか？海鳴島は楽しかったか？」

店長が質問をしてきたので俺は

「まあ、・・・あ、これお土産です。店長とバイト仲間に渡していただいけませんでしょうか？」

と言った店長が

「ああ、ありがとうな。ちょっと今忙しくてさもし・・・

疲れてなかったら今日バイト入ってくれないか？」

店長が言ったので俺は

「構いませんよ。俺も休みすぎて店長には心配かけましたので

今日出ますね。」

俺は言った店長が

「すまん。じゃあ頼むわ」

と言った店長は厨房の中に入った。俺も急いで準備をして

仕事に入った。で・・・その日は結構繁盛してたのでアルバイトの人が3人と店長1人じゃ手が足りなくもしかしたら今日休みだったアルバイトの人に電話をかけようかと思ってたらしくちようど俺が来てよかったと言ってた。うん俺も久しぶりに仕事できて

よかった・・・が・・・まさかそれが3時間も見せっぱいなるとはみんなが思ってもいなかった。まあ、久しぶりのバイトだったから俺は気にしないがね。終わったのが10時になってしまったので

俺は帰るときに店長が

「ああ、山本今日は休みのところ悪かったね。」
と言って俺は

「いえいえ、気にしないでください。」

と言った。店長は

「山本のおかげで今日はすごく助かったよ。これはあまりものだけど
持って行け。んじゃお疲れ様〜」

店長はそう言って店の奥に入った。俺は

「お疲れ様でした〜」

と言って俺は店から出て家に向かった。そしてついでから俺は階段を
上った時1人居て俺は暗くて見えなかったから近くで見たら

「糰見？」

と言った。そう糰見がなぜかドアの前に待っていった。しかも夏は
朝昼は暑いが夜はとても寒い。なのに俺が帰ってくるまでずっと
待ってたのか？とか俺は思ってた

「どうしたんだ？こんな時間に？」

と言って糰見が

「ちよつと・・・山さんに話したいことがあって・・・」

と言われ俺は

「まあ、話は分かったから外では寒いから中に入ろうか」

と言って糰見が

「うん・・・」

と言って俺たちは家の中に入った。 （第33章終わり）

まさかの・・・

バイト後俺が帰った時なぜか糰見がいたから

一応俺は外で話すより中で話すほうがいいと思って

糰見を家の中に入れた。そして

「まあ適当に座ってくれ今お茶を入れるから」

と言って俺はお湯を沸かしてた。糰見は

「あ・・・ありがとう・・・」

と少し暗かった。俺はなんでだろう？とか思ってたけど

落ち着いたら話してみようと思ってる俺は夕ご飯をパスすることになった。まあ、こんなときにご飯を食っても申し訳ないからな。

んでお湯が沸いたからお茶を入れて糰見に

「ほい、お茶。温まるから飲んどき」

と言って俺も座った。糰見は

「ありがとう・・・」

と言って俺は

「どうしたの？」

と言って糰見が

「山さん。海鳴島で私山さんみたいな人になりたいと思ってました。

でも・・・山さんは俺みたいになやつになるなって言われ私は

ずーと考えてたけどなんで山さんみたいな人になつてはいけな
いでしょう？」

糰見が言った。俺は

「まあ・・・俺はこんな性格だから・・・糰見が俺みたいになやつを
目標にするのはもったいない。だから・・・俺を目標にするなら
俺を超えてもっと親切な人になればいいと思う。てか・・・

俺は糰見は今でも俺よりは親切で優しい人だと思ってるけどね」

俺ははつきり言った。だけど正直言ったら糰見に余計な心配かかる
から

俺が天魔人のことは秘密にしてるがね・・・それを聞いた糰見は

「私はまだ・・・山さんを超えることができません・・・」

昔から私は自分から声をかけることができないし・・・

山さんのおかげで自分が将来先生になりたいと思ったから・・・

だから・・・私は山さんみたいな人になりたいです・・・」

と言って俺は

「そうか・・・じゃあがんばって・・・俺は応援するよ。」

と言った。糰見は

「あの・・・山さん・・・」

と言って俺は

「なんだい？」

俺は言って糰見は少し整理をしてたらしくまとまって俺に

「私は・・・私は・・・昔から山さんのことが好きでした・・・」

だから・・・私と付き合い合ってくれませんか・・・？」

糰見は俺に告白をしてきた。だけど俺は

「ごめん・・・」

と言って糰見が

「そうですか・・・でも・・・私は・・・諦めません・・・」

いつか・・・山さんと恋人になりたい・・・だから

いつでも待つてるんでまずは友達からよろしくお願いします。」

と言った俺は

「ああ・・・よろしくな。糰見」

と言った。糰見は

「私はいつでも山さんを想い続けます。」

と言って私は今日は失礼します。と言って糰見は家から出た。

俺はまさかの告白されるとは思ってもいなかった。だが・・・

俺は天魔人・・・だから・・・糰見はもちろん他の人とも

付き合うことができない・・・俺はどうすればいいのかな・・・

とか思いながら夕ご飯を作った。

（第34章終わり）

夏休み終わり

海鳴島から帰ってきた俺たちはその後何も予定がなく各自夏休みを過ごしていた。俺は毎日朝のトレーニングをして夕方バイトをして充実とした夏を過ごした。・・・が

俺と糰見は元々夏休みの宿題が終わってるので何もしなくてもいいけど・・・加奈子の宿題の手伝いをしてたら電話で「宿題手伝って」

というリオの頼みコールが来てたので俺たちはまた

リオの家にお邪魔をして俺と糰見は宿題を終わらしてるので加奈子、リオ、コレットの宿題を終わらせることと夏休み後のテストがあるのでそれのための勉強会を開いた。

そして・・・夏休みが終わる前の1週間俺たちは時間がある限り勉強をしていた。だけど・・・俺たちまだ1年生だよな？

とか思いながら勉強しまくって

「そういえば・・・リオちゃんとコレットちゃんは夏祭りとか行ったことあります？」

と加奈子が質問をしたのでリオとコレットは

「夏祭り？」

「夏祭りですか？いえ・・・」

とお互い夏祭りを全く知らなかったそうだ。で・・・俺たちは夏休みが終わる前に近くの地域で夏祭りがあることを知っていたので全員で行くことになった。もちろん真魅先輩も。

リオとコレットは初めて来たらしく二人ははしゃいでいて俺たちは全員で回った。各自たこ焼き、わたあめ、リンゴ飴、焼きそばなど

いろいろ食べて、金魚すくいなど食べ物以外の屋台もやってみんな楽しんでいた。

夏休み後俺たちはテストがあつて、今回はみんな成績よかった。

真魅先輩は満点だったらしい・・・あの人は・・・とか俺は思う。

んで俺たちは学年では糰見が2位俺が4位コレットが9位加奈子が

14位

リオが16位だった。みんな夏休み中にあれだけ勉強をしていたから

頑張ったほうだと俺は思う。そして2学期では・・・体育祭や文化

祭が

ある・・・今後どうなるのだろう・・・と俺は思っていた。(第3

6章終わり)

体育祭の練習

夏休みも終わり俺たちは学校生活を過ごしていた。

そして・・・1ヶ月後俺たちは体育祭に向けてクラスでいろいろと話しあった。そして・・・俺はクラス対抗リレーで加奈子は1000m走、糰見は100m走、リオは200mリレーコレットは障害物競争に決まった。んで俺たちの学校は体育祭が始まる2週間前になると授業がなくなり各自各競技の自主トレーニングをすることになった。もちろん学校の中でのトレーニングなんだが・・・俺はクラス対抗リレーなので俺含めての5人でリレーのバトン渡しの練習をしていた。最初のほうは早すぎたり遅すぎたりして俺たちのチームはチーム全体がばらばらで10回以上やっていくうちにどんどんうまくなっていった。そして・・・

「1回全体でやってみる？」

という声があったので俺たちは一度本番のとおりでやってみた。

1人200m俺は50m走で7秒だったらしくそれで

クラス対抗リレーに選ばされたと思っている。まあ俺より

早い人はいるんだけどね。俺はなぜか知らないけどアンカー・・・

やめてほしいわ・・・とか思ってたリ・・・まあそんな感じで

1回やってみた。俺たちのチーム以外の人にタイムを計って

もらっているので実際にどれぐらいか計算をしていた。

1人目、2人目とどんどんパスを回ってきて結果が

1分50秒だった。まあまあ出来だったので俺たちは

各自トレーニングをすることになった。んで俺は回っていくうちに

糰見、リオ、コレットの姿を見て俺は

「がんばってるな」

と声をかけた。コレットは

「山様ちよつと質問が・・・」

と聞かれ俺は

「俺でよければ」

と言った。コレットは

「障害物競走はどうすれば1位になれますか？」

質問をしてきたので俺は

「完全に1位は分らないよ。まあアドバイスはできるから

あとはがんばってくれ」

と言つて俺は障害物競争から出るマット、ネット、砂袋について簡単に説明をした。それとこういうふうにすればうまくなるよ。

などやり方まで教えたがそれだけじゃ・・・1位にはなれない

なぜなら俺も昔この障害物競争に苦戦したことがある。

だから俺は

「コレット1位じゃなくてもいいからがんばれよ」

と言った。コレットは

「あ、はい。がんばります！」

元気に言った。糰見は

「山さん明日から朝のライニングにつきあってもいいですか？」

と質問をしたので俺は

「ああ、いいけど朝6時だけどいいかい？」

俺は答えて糰見は

「はい、構いません。よろしく願います。」

と言つて俺は自分のとトレーニングをするためにみんなと離れた。

「体育祭まで後2週間みんながんばってほしいかな？」

俺はつぶやいて走って行った。（第36章終わり）

体育祭

各自みんな体育祭に向けて練習をしていた。
そして・・・本番俺たちは赤チームだった。

最初のほうは糰見の100m走だった。

糰見は元々体力がないけどがんばって走って
2位だった。それでも俺はすごいと思った。

次はリオの200m走。その次はコレットの
障害物競争だった。二人は初めての体育祭で

二人とも一生懸命走ってリオは3位コレットは2位
だった。昼休みに入る前に最後の競技加奈子が

走る1000m走だった。見てるとさすが運動部

だと俺は思った。加奈子は余裕で1位を取った。

眞魅先輩はなぜかパン食い競走に出ていた・・・

そして昼ごはん俺は避けたかったけどつかまってしまい
一緒にご飯を食うことになった。リオが

「山さん昼のプログラム頑張ってください。」

と言われ俺は

「俺だけじゃなくてみんなの応援もよろしくな。

これは俺だけじゃなくてチーム戦だから。」

と言って俺たちは楽しく昼ごはんを食べていた。

そして俺がやるプログラムは最後だった。

んで今の特典は俺たち紅組が450点白組は430点で

一応リードしているがこの競技で負けると負けてしまうという

状況だった。まあ・・・俺たちチームで集まり俺が

「悔いが残らないように全員頑張ってください！」

と言って俺たちは走る順番に走った。そして第1走者

結構リード行つて第2走者が2位まで追いつめたが・・・

第3走者が走った時まさかのバトンを落としてしまいロストしてし

まった

んで第4走者が頑張ってくれて何とか2位まで追いつめてくれた。そして・・・俺が全速力で追いつめたが・・・あと一歩足りなく2位で終わってしまった。そして結果が紅組470点白組480点で逆転負けをしてしまった。そして・・・終わった後第3走者を走った人が

「ごめんなさい・・・俺が・・・バトンを落とさなければ・・・」
とすごく落ち込んでいた。だが俺は

「君はよく頑張った。こういうハプニングもよくあることさ。
気にするな。君は本当にがんばったからな。」

と俺は他の人に聞いたらみんなも納得していた。

そして俺たちの1年生の体育祭は終わった・・・。(第37章終わり)

体育祭後

俺たちの紅組は10点差で負けてしまった。

まあ、楽しかったからいいとするかつと思つて

俺たちは帰りの準備をしていてそのまま俺は家に

帰ろうとしていたら5人がいて糰見は

「山さんこれから体育祭お疲れパーティーをしたいので

一緒にいきませんか？」

と言われ俺は多分拒否権は？つと言つても駄目ですつと

言われると思つて一緒に行くことになった。そして・・・

次の日、あの・・・第3走者目の子がいじめにあうとは

俺も考えてもいなかった。最初のほうは俺も気付かなかったが

あの子がいなくなると噂で

「あいつが・・・バトンを落とさなければなら」

とか聞こえて俺は嫌味だけだろうと思つていた。まあそれは

無視すればいいと思つていたが・・・どんどんいじめのハードルが

上つて行くうちにその子が学校をよく休むことになった。

そして俺はそのクラス対抗リレーのチームだった子に聞いてみた

「あの・・・確か・・・夏季坂君だったよね？第3走者走った子」

と聞いてみたら1人の男の子が

「うん、そうだよ。どうしたの？」

と聞かれたので俺はこの頃あの子にいじめがあつたかどうか聞いてみた。

そして・・・その男の子も

「俺も気になつていた。だつてあいつ・・・元々人と話すのが好き

だったはずなのに最近俺たちもクラスの子も話さなくなった・・・

だから俺も心配している。だから今日夏季坂のところに行こうかと

おもつてな。」

と言つたので俺は

「じゃあ俺も行くよ。俺もあいつのこと心配だし・・・」
と言ってその男の子は

「さんきゅーな。んで・・・確か山本だったっけ？」

と言ったから俺は

「うん。山本であってるよ。確か・・・金崎だったよね？」
と言ったら

「おう。あってるよ。じゃあ放課後に一緒に行こう。」

金崎が言ったので

「ああ、よろしくな。」

と言って俺は屋上に行った。そして・・・放課後俺はリオ達に

「今日は金崎と一緒に帰るからみんなは帰ってて。」

と言って俺は金崎のところに行った。そして

「お待たせ」

と言って俺と金崎は夏季坂の家に向かって歩いて行った。（第38

章終わり）

夏季坂家へ

俺と金崎は夏季坂の家に向かった。そして俺が家のチャイムを押したら

「誰でしょうか？」

と女性の声がしたので俺は

「あのー夏季坂君のクラスの山本と言います。」

俺が言ったらその女性が

「あらま。あの子のクラスの子なのね。入ってどうぞ」

と言われたので俺と金崎は家の中に入って

「「おじゃまします」」

と言って入った。そしてその女性が俺たちの前に来て

「初めまして。私は勝也の母です。」

と言った。俺たちは

「夏季坂君のクラスの山本と言います。」

「同じく夏季坂君のクラスの金崎と言います。」

俺たちは頭を下げた。そして

「勝也は部屋にいるからよろしくね」

と部屋まで案内してくださって入って夏季坂の母親が

「勝也ーお友達が来てくれたよ」

と言って俺たちは中に入った。そして夏季坂は

「えーと・・・確か山本君と金崎君だったよね？」

と言って俺たちは

「「うんうん」」

と言った。そして夏季坂君の母親が部屋から出ると俺から

「この頃休んでるけど大丈夫なのか？」

俺はいきなりいじめの話をする前に一応具合悪いかもしれなかったから

聞いてみた。そして・・・

「うん・・・具合は大丈夫だけど・・・」

夏季坂が言ったから

「もしかして・・・いじめにあったのか？」

金崎が言ったら、

「多分・・・そうだと思う・・・」

と言った。俺たちは

「「やつぱり・・・」」

とつぶやいた。まあ・・・当然だろう・・・いないときでも噂はすぐく立っていたし・・・

「夏季坂は悪くないよ。だって夏季坂はバトンを落としても最後まで頑張ったからお前は悪くない。絶対にだ！」

俺が言った。そして

「そうだけど・・・でもね・・・他の人は俺が負けなければ勝ったのに・・・俺のせいで・・・」

と言った金崎は

「俺たちのチームはお前のせいで負けてはない。それならもし、仮によ。俺たちが負けて他の奴らが1位2位を取り巻くって負けたなら俺たちのせいでもある。」

だが・・・全員が1位2位とれないじゃん。もしお前がバトンを落とさなくても俺や山本がバトンを落としたかもしれなかったんだぞ・・・。だが・・・お前は最後までやったからそれでいいじゃん・・・。だからお前もくよくよしな学校に来いよ。俺や山本がお前を守ってやるからさ。」

と言った俺は

「金崎の言うとおりだ。俺もお前のことを守る。だから学校に来い。このまま休んでしまうと一生これなくなってしまうし。高校生活の大事な思い出も作れなくなる。だから絶対に来いよ。明日俺と金崎は

お前のことを待ってるから・・・。」

と言って俺たちは部屋を出ようとした時

「ありがとう・・・二人とも・・・俺頑張って明日から学校に来るよ・・・」

本当に心配してくれてありがとう・・・」
と言って俺は

「俺たちは友達だから心配するのが当たり前だ！心配しない奴なんて友達じゃないからな。」

と俺が言ったら

「山本の言うとおりだ。まあ明日絶対に来いよ」

と言って俺たちは夏季坂の家を出た。 （第39章終わり）

夏季坂 復活

俺たちは夏季坂がいじめにあつてゐることを知り俺と金崎と2人で夏季坂の家に向かつて2人で夏季坂を学校に来ることに説得した。そして翌日俺たち2人は校門の前に待つていた。もちろん夏季坂を待つていたから。そして・・・

「おはよう。山本君、金崎君」

夏季坂が挨拶をしたので、

「おはよう。まあ俺は呼び捨てでいいからじゃあ行こうか」

俺が言つたら金崎は

「そうそう俺も呼び捨てのほうが楽だから今度から君付けはよしてくれ。まあ行こうか」

と俺たち3人は一緒に学校の中に入った。そして1時間目までは良かったもののやっぱり噂がおさまらないだが俺と金崎はそんなことを気にしてなく3人で話してたが・・・昼休みになると段々と声がでなくなり誰も聞こえるぐらいに話す奴がいてとうとう俺と金崎は

「おい！お前ら！」

と切れ出した。そしてその話をでかくしたやつは

「なんだ？」

と余裕な感じで返事をした。

「それ以上夏季坂を侮辱をするなら俺がゆるさね。もうそのうわさもやめろ。」

俺が行つたがその5人のグループが

「あん？あいつのせいで俺たち紅組のチームが負けたじゃんか別にいいじゃんか。あいつが悪いだし」

と言つた俺はその言葉を聞いてむかついたからその男に一殴りを

した。その男が

「てめえ！何をするんだ。」

と言って俺は

「お前らの噂のせいでどんだけ夏季坂を苦しめたのか分かってるのか！

夏季坂がバトンを落としても最後まで走った姿お前らは見たか？！
あいつの頑張りで俺たちは1位には取れなかったが俺たちのチームは

満足をしている。負けたんて何だ。1人が負けたらお前らはずーとその人をずーと苦しめるつもりか？！」

と俺は切れながら言った。

「そつだ。山本の言うとおりで。お前ら夏季坂に謝れ」
金崎が言ったが

「誰があいつを謝るか。」

と言った。俺たちはそろそろ保つのが限界になるころ

「私も山さんの言ってることが正しいと思ってます。」

と糺見が言ってくれた。そして他の人も

「そつだそつだ〜謝れ〜」

と言ってそのグループが反論ができないのでそのまま教室を出た。

「山本、神崎、みんなありがとう・・・」

夏季坂が言ったので

「気にするな。まあもうあいつらから噂はないと思うがまたあったら言ってくれよ。」

俺が言ったら糺見は

「私たちも助けるから何かあったら言つてね。」
と言つてら加奈子が

「でも・・・さすがに・・・山ちゃんの殴るのはちょっとね・・・」

と言われた・・・まあ。そうだろうね・・・後から先生から厳しく怒られた。

まあ、俺は気にしなかったけどね・・・さて・・・体育祭が終わった

から

次は文化祭だ・・・楽しむのかな？

（墮お40章終わり）

夏季坂 復活後

体育祭で俺はプログラムでクラス対抗リレーになってそのメンバーの中で夏季坂と金崎とチームになった。

だが・・・緊張してしまつた夏季坂はまさかのバトンを落してしまった。だけど最後まで頑張つて次の金崎が3位を追い越し俺にバトンを渡してくれたので俺が全速力（まあ天魔人のパワーは使つてないよもちろん）走つたが一歩及ばず2位になった。しかし俺らは

夏季坂をだれも責めたりはしなかったが・・・

クラスの他の連中が夏季坂をいじめをしてとうとう

夏季坂が学校を休んでしまった。それを見て俺は金崎と相談をして俺と金崎は夏季坂の家に行つて

2人で説得をした。そして何とか夏季坂は来るようになったがまたしても噂がどんどんでかくなりとうとう俺が

限界を達してしまつてそのグループの1人に殴ってしまった。

だが・・・俺は気にしていない。なぜなら俺より

夏季坂はもつと辛いのに来てくれたから俺は

あいつを守らないとい行けないと思つたからだ。

そして・・・俺はその後先生にかなり叱られた。

まあ当然だ。一応後から聞いたがああ噂をしたグループは

俺よりかなり厳しい罰が受けられたとか・・・

もし・・・俺が一発じゃなく何回も殴つてたら謹慎処分で

1週間学校にこれない状態だったそうだ。その日

「山本ごめんな。俺のせいだ」

夏季坂が言つたが

「気にするな。お前は悪くない。俺が勝手にしたことだから。」

俺が言つたら

「山本の言つとおりだ。本当は俺も殴りたかつたが・・・」

俺がなくなる前にあいつらが消えていったから・殴れなかった。
すまんな山本お前だけ怒られるのが住まないと思っっている。」

と言った。俺は

「気にするな。」

と言った。俺と夏季坂と金崎で3人でご飯を食うのが普通になった。
まあ・・前までは俺1人かりオ、コレット、加奈子、糰見が来る
ことも

あり、時々真魅先輩も入ってくるようになって俺は離れたいと思っ
たから

すぐく助かっている。今日もそのつもりだ。そして話題が

「確かもうすぐ学園祭だよな？」

金崎が言った。

「そうだな・・早いもんだ。」

俺が言ったら

「学園祭の出し物アイデア決まってるのか？」

金崎が俺たちに質問したので

「いや・・決まってるない。」

「僕も・・決まってるないよ・・。」

と俺たちが言った。金崎は

「だよな・・俺も決まってるないわ・・まあ俺たちが決めても
決まるか分からないしね。」

と言った。まあそうだろう・・多分お化け屋敷などが一般だから
俺たちが楽なものがあれば・・いいかな？とか・・思ってる。
そう・・俺たちが昼ごはんが終わった後・・学園祭の出し物を
決まるのだ・・。（第41章終わり）

学園祭の出し物

俺たちは学園祭の出し物を決まらないまま・・・

次の授業が始まった。次は総合で今回は

学園祭の出し物についてきめるらしい。そして

「はいーみんなーあと1ヶ月後に学園祭があります。

私たちのクラスも出し物を出そうかと思いますが・・・

みなさん出したい物決まってますか？」

先生が言っているいろいろな意見がでた。やっぱり

お化け屋敷、喫茶店、フリーマーケットなど多くの

出し物が決まり多数決で絞り込まれ残ったものが

お化け屋敷、フリーマーケット、劇が残った。

そして3つを1つにするためにまた多数決が行われた。

そして・・・決まったのが劇になった。まあ・・・

劇になったのは・・・いいが・・・俺はサブキャラのほうが

すぐ助かるだが・・・主役だめんどくさい・・・。

そして・・・劇を推薦したのは糰見だった。まあ・・・

そうだろう・・・糰見元々本が好きだし・・・ね。

「劇の推薦をしました。赤崎糰見です。タイトル〇〇です。

どうぞよろしくお願いします。」

糰見が頭を下げた。劇はそれでいいものの実際に

主役とヒロインを決めないといけなかった。誰も

主役やヒロインをやりたいと言う人が全くなかったので

結局多数決・・・しかし・・・誰も微妙な数だったので

多数決じゃ時間がかかる・・・なので結局・・・

くじ引きを引くことになった。夏季坂と金崎は劇じゃなく

裏方に決定した。俺が引いたときは・・・まさかの主役つという

紙をひいてしまった・・・そして・・・ヒロインは・・・

「わ・・・わたし・・・」

コレットが言った。そして全部が決まり夏季坂と金崎は裏方で

コレットがヒロイン、俺が主役、リオが照明、加奈子がアナウス

もちろん糺見は脚本作りと全体の監督となった。俺は

「これから大変だ・・・」

すぐく落ち込みながら・・・考えていた・・・

（第42章終わり）

学園祭の出し物（後書き）

こんにちは・・お久しぶりです。

毎回文章が短い山です。

がんばって長く書きたいのですが・・

時間がなくて・・・いつも短くなります・・・

本当にすいません・・・

途中で劇のタイトルが○○なんでタイトルは

皆さんの創造でお任せします・・・。

学園祭の出し物 その1

「はあ・・・なぜ俺が・・・主役をしないといけないんだ・・・」

俺はすごくシヨックを受けていた。今いるのは屋上

もちろん俺と夏季坂と金崎の3人で食べていた。なぜなら

俺がただ単にあの人たちから避けたいからだ。

「まあ・・・でもくじ引きだから・・・しかないよ」

夏季坂が言った。

「まあ・・・仕方ないか・・・」

俺がすごく落ち込んだ。

「まあ・・・全員平等だから文句言えないから・・・俺たちも手伝うことがあれば手伝うからがんばれよ。山本」

金崎が苦笑言いながら言った。

「まあ・・・仕方ない・・・選ばれたのは仕方ないから・・・がんばるか・・・」

俺は落ち込みながらご飯を食べていた。そして・・・

全部の役割が決まったので学園祭の1週間前から

体育祭と同じで授業がないのだ・・・てか・・・俺たちの学校は

全体の1割はそれで授業が亡くなるけど・・・

今後勉強など大丈夫なのか？とか思ってた・・・

そして・・・俺は家に帰っていつも通りの日常のことをして何日か俺は過ごしていた。そして数日後糺見から

「山さんこれ。」

と渡されたのが台本だった。

「ありがとう・・・。」

と俺が言った・・・本当はこんなものほしくないけどね・・・とか思ってた。

「山さん主役がんばってね。何かあったら私も手伝うから」
糺見は優しく言うてくれた。

「ありがとう。糰見」

俺が言つて糰見は少し赤くなって下を向いた。まあ・・

俺は早く帰って台本で練習しないとイケないとやばいと思ったから早く家に帰った。
(第43章終わり)

学園祭の出し物 その2

俺は糰見から台本を貰って家に帰って台本の中身を呼んでみた。内容はまあまあ・だった。

まあ・・ありがたいのは女の子って自分が作るときに最後にキスシーンがあることが多くあり・・すごく困ったが・・さすが・糰見キスシーンがなく

感動させるタイトルでよかった・・本当に・・

そして・・俺は台本の中身を何回か呼んでみて

実際に声を出しながら読んでみた。もちろん小声で

なぜなら・・ここはアパート大声をしてしまったら

お隣さんからの迷惑もあるしな・・。そして・・

大体内容が入った・・。なぜだ・・なぜすぐに入るんだ？

とか自分が思ってたなら電話が鳴った。俺はでた

「はい。山本ですが・・」

俺が電話を出たら

「コレットです。今大丈夫でしょうか？」

コレットからの電話だった。

「ん？どうした？コレット」

俺は一応どうしたのかな？と心配したので質問をした。

「えーと・・山様はもう台本とか覚えましたか？」

コレットが言ったので

「ああ、まあ・・。大体はもう覚えたよ・・自分もびっくり

糰見が長いセリフをなるべく少なくしてくれたおかげで

俺はすごく助かってるだけだね。」

俺が言ったら

「あの・・もしよかったら劇の練習お手伝いできませんか？」

コレットが言った。俺は多分覚えるのに苦労してると思って

「ああ・・いいよ？」

俺は返事をした。それを聞いてコレットは

「ありがとうございます！」

と元気よくって俺は

「でも俺のところでは練習できないから公園でもするか？」
と言ったらコレットが

「いえ・・私の家でやりませんか？」

と言った。そして俺とコレットは一緒に劇の練習を
することになった。（第44章終わり）

学園祭の練習 その1

俺はコレットの家に行き二人で劇の練習をすることになった。

「まず・・俺から行くね。」

俺が言っただけのシーンをまずお手本として自分が言うところを台本見なくてやってみた。まあ・・大体は覚えてしまっただけでセリフも難しくなくすごく助かったんだけどね・・。

「すごい・・。」

コレットが言っただけ

「じゃあ次はコレットだ。無理して台本を見なくてやることはしないでいいから。まず台本を見てやってみ」

俺が言っただけ。そしてコレットが台本を読んでみてセリフが終わると「いいじゃない？じゃ合わせてみようか。」

俺が言っただけコレットが

「お、お願いします・・。」

と言っただけ。そして俺とコレットは自分のセリフを言っただけ自分たちでないとこのセリフを俺が言いながら練習をした。1日目はまあ見合わせっただけのところかな？とか思い。何時間か練習をした。

「今日はここまでにしよう。まあまだ時間はあるし。俺が

時間があるときに一緒に練習をしよう。」

俺が言っただけ今日はお開きになった。そして次の日の午後からコレットの家に行き2人で一緒に練習をすることになった。

段々とコレットが自分が言うところのセリフは台本を見なくても

セリフが言えるようになり乗り込みが早かった。そして・・

数日後俺たち2人じゃ練習しても意味なく舞台に出る人だけ時間があるやつみんな少し劇の練習をしてみんな最初は会わせるのに台本を見ながらやっていき段々と台本を見なくてもセリフが言えるようになって言った。まあ俺は糺見が作った台本はセリフが長いところがあまりないからすごく助かったと思う。

もしセリフが多いと間違えるところが多いから・・・やりにくい・・・
糺見が作ったのが正解だと俺はすごく関心をした。

まだ完全に学園祭の準備は始まってないけども少しでも早く
練習していて俺は

「何とかなるかな？」

と少し安心をしていた。あと1週間で劇の練習が本番になっていく
から

がんばらないとっとな俺は早く学園祭なんて終わってくれっと思
いながら練習をした・・・。
(第45章終わり)

学園祭の練習 その2

まさかの俺が・・・主役をやることになって・・・
もう2週間がたった・・・。まあ・・・俺は

「本当は主役変わりたい・・・」

と今でも思う・・・だが・・・なってしまったものは
仕方ないと夏季坂と金崎に言われ・・・学園祭で

俺がやる気ないとみんなのテンションが上がらないと
思うから俺ががんばって成功するように糺見からもらった
台本を一生懸命暗記をした。その時にヒロインになった
コレットと一緒に練習をしませんか？つと言われたので
最初のほうは2人でコレットの家で練習をして学園祭の
2週間前からあいてる放課後に舞台に出る人を集めて
軽く劇の練習をした。まだ完全ではないが・・・大体は
つかめてきた。そして・・・残り学園祭が始まる1週間前
になるころ・・・昼休み

「もうすぐ学園祭だな。」

金崎が言って夏季坂が

「そうだねー成功すればいいねー劇」

と2人が俺を見つめたので・・・

「大丈夫・・・がんばるから・・・」

俺が・・・かなり落ち込みながら言った。そう・・・この2人と
体育祭が終わってからすごく仲良くなった。男友達なんて

初めてじゃないかな？元々友達を作ることすら興味を持たなかった
俺にはあまり関係なかったが・・・

「おばあちゃん・・・俺・・・初めてまともな友達ができたよ・・・
今まで女の子が・・・俺に来るのを・・・俺は嫌がってたけど・・・
本当によかったよ・・・ありがとうおばあちゃん」

と俺は意味もないことを心で言った。

「まあ．．あともう少しだからがんばれよ山本」

金崎が言った。俺は本当に前がなかったらこの学園を去りたかったよ．．本当に。前がいてありがたい．．
とか思ってた．．

「何かあったら僕たちが手伝うよ。」

夏季坂が言った。

「ありがとう2人ともがんばるよ．．俺．．」

俺はそう言っであと1週間をがんばるっという熱心を2人からもらった。そして放課後糰見が

「もうすぐで学園祭があります。1週間前までは使えなかった
体育館が使えるようになりますので。劇を出す方は放課後だけです
が

ぜひ使ってくださいね。」

と言ってくれた。そして．．放課後から本格的に体育館で

練習を初めた．．（第46章終わり）

学園祭 その1

本格的に劇が始まったのは学園祭の1週間前で監督の糰見はあまり厳しくしなくみんながより良い劇になるようにアドバイスをしていた。

まあ・・俺とコレットは台本を貰ってからだいぶ練習をしたから・・多分大丈夫だろう・・

普通なら夜8時ごろまで劇の練習をするはずが

糰見はそんなことをしなくみんなの体調を気をつけて早めに終わることが多かった。リハーサルは学園祭の前日で一発本番でやって、糰見もかなり満足してたからそのまま解散をした。俺は早く終わったのでぶらぶらしていたらいまだに体育館の中で糰見が1人で立っていた。俺は近くの自動販売機に

向かって暖かい飲み物を買って糰見のところに行った。

「糰見。ほら。」

俺は暖かい紅茶を渡した。糰見は

「あ、ありがとう。」

と受け取り2人ですこし体育館を眺めた。そして

「明日だね。」

と糰見が言った。俺は

「そうだな・・もう明日で終わりか」

と俺はつぶやいた。糰見は

「山さんは本当は主役やりたくなかったんでしょ？」

といい出し俺は

「まあな・・元々俺は主役向いてなかったし。」

と言って糰見は

「山さんは主役に向いてるよ・・・実際に山さんが主役でよかった・・。」

と顔が赤くなった。まあ。そうだろうなんか告白っぽい
言い方になってるしな・・・

「まあ糰見が満足してるなら俺は別にかまわない。

明日が本番だ・・・。糰見監督のために失敗はしないように
しないとな。あはは・・・」

と言った。糰見は

「いえ・・・誰だって失敗はよくあるものですよ。山さんも
他の人も失敗しても・・・最後までやれば私は満足です。

頑張ってください。」

と言った。俺は

「おう・・・がんばる」

と言って俺たちは一緒に途中まで帰った。そして翌日
俺たちの劇は一番はじめらしくここが終わってから学園祭が
始まることなので体育館の中はすごくいっぱい。まあ・・・

みんな緊張しているが・・・糰見が

「今まで私の台本についてきてくださってありがとうございます。

みなさん緊張しなく楽しく行きましょう。失敗しても気にせず

楽しくやれば会場みなさんにも答えてくれると思うので

頑張りましたよう」

と言って劇は始まった。やっぱり最初の場面をやるやつらは結構

緊張をしていて失敗はしなかったが頑張っていて途中からは

みんな練習通りにできていて劇が終わり周りの拍手が拍手をして

劇は成功したのであった。（第47章終わり）

学園祭 その2（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしく願います。
いつもながら短くすいません・・・
これからも見守ってください・・・

学園祭 その2

学園祭の劇が終わり俺たちの学園祭が今始まった。

まあ俺たちの劇の片づけがあり俺たちは一歩遅いけどね
俺と夏季坂と金崎の3人がいて

「さて・・・3人でぶらぶらするか？」

俺が言ったら、夏季坂は

「うん。そうだねどこに行く？」

と言って金崎は

「そうだな～まあ・・・今日1日は屋台中心だし

明日もイベントなどがあり本番は明日だからの

ゆっくり回って行こうか。」

と言って俺たち3人が適当に歩いていこうとしたとき

「ちよつと待った～～～!!」

と言われ俺たちはびっくりして後ろを向いた。そして

俺の腕に抱きついた眞魅先輩がいた。

「な・・・なんですか・・・眞魅先輩・・・」

俺がすぐく落ち込みながら眞魅先輩に言った。

「山君、今日と明日は・・・私たちと一緒に回らない？」

眞魅先輩は突然言い出し、

「はあ・・・別にいいですけど・・・てか私たちって？」

俺が言ったら後ろを見てわかったのはコレット、リオ、

加奈子、糰見の4人がいたのであった。

「まあ、あの遊園地のように交代制のデートで」

眞魅先輩はのりのりで言った。それを聞いた夏季坂と金崎は

「あ、僕たちは2人で回るから」

夏季坂が言って

「そ・・・そうだな・・・まあ山本また学園祭後に祝おう!」

2人が言って俺を置いてさっさと逃げて行った。それを見て

「あの2人やさしいじゃん」

と真魅先輩は言った。

「いや・・多分・・2人は真魅先輩の気迫で逃げて行ったと・・
そう・・おれたちの学校で真魅先輩は有名人であり、ふつうなら
気楽で話せるけどなんか俺以外の人に聞くと俺がいるときとない
ときで

オーラが違うらしい・・恐るべし・・真魅先輩・・。

「で・・今回はどうするのですか？」

と言って真魅先輩は

「んゝ前見たいに遊園地で1人ずつデートは難しいかも。時間ない
し」

と言ったけど。あのときも時間なかったような・・。っと俺は思っ
た。

「で・・今日と明日はみんなと一緒に回ろう」

と言って俺たちは全員で回って行った。まあ、学園祭だから
お好み焼き、焼き鳥、たこ焼きなど定番が多かった。みんないろい
ろな

食べ物にひかれていったので俺が1人ずつおごってあげたのであっ
た。

学園祭1日が終わってみんなが満足して俺はみんなに気付かれずに
さっさと家に帰った。その帰る途中にリディアさんを見えたけど
声をかけずにさっさと家に帰ったのであった。（第48章終わり）

学園祭 その3

1日目さつさと帰った俺はその次の日にみんなに怒られてしまった。まあ、そうだろう・早く帰ったし・・・いまだに女の子にすごく弱いな・・おれ・・・んで2日目も一緒に回るようになった。夏季坂と金崎は俺のことを思ってくれたと思って2人は俺と別に行動することになった。だけど・・おれは・・お前らと一緒に回リたかつたぜ・・・1人で5人はきついぞ・・これは・・・と言いながらみんなで回っているときに2日目はいろいろなイベントがあり、カラオケ大会、早飲み大会、早食い大会、モノマネ大会などたくさんイベントが2日目に一気にやるらしいどんだけ・・金を使うんだ・・この学校と思いみんなが俺と1人でデートをかけるらしくカラオケ大会で決着するために5人がエントリーを

したのであった。その時に俺の前にリディアさんがいたので「お久しぶりです。」

俺は頭を下げた。

「あら、山本さんお久しぶりです。」

リディアは頭を下げた。俺は

「今日はコレットさんのために来たのですか？」

俺が言ったらリディアさんが

「まあ・・体育祭のときは見に行けなかったので旦那さまも学園祭のときは

ゆっくりしてきてもいいから行きなさい。っと言われたもので・・

コレットさんを見に行っていたけど楽しそうだなによりです。

でも・・本当の目的は山本さんあなたに大事な話があつて

今日はここに来ました。」

と言って俺は

「そうですね．．．だけどここじゃ．．．さすがに無理ですね．．．。終わったら古いアパートですが．．．うちに来ます？」

と言ってリディアさんは

「ええ．．．お願いします。場所教えてくれませんか？コレットお嬢様には

あまり聞かれたくないので．．．」

と言ったので俺は住所を教えた。それを聞いてリディアは何か機械を出して

何かを打ってそれを俺に渡した。

「では．．．夜１１時ぐらいには学園祭が終わるはずですので家に帰ったら

このボタンを押してください。」

と渡された。俺は

「分かりました。リディアさんも今日学園祭を楽しんでください。

後でコレットさんがカラオケ大会に出ますので。」

と言ってリディアさんは

「あらまゝそれは楽しみですですねゝありがとうございます。」

と言って俺たちはカラオケ大会を待った。（第４９章おわり）

学園祭 その4

俺とリディアさんはコレット達がカラオケ大会の受付中に

いろいろなことを話してた。まあ本命は夜になりそうだが・

そして待った時にカラオケ大会が始まった。何人かの参加者が

歌って点数が出たりしていて、今回は結構ハードな戦いになりそう。

とか自分は思ってた・。てか戦争に行くのではないんだが・。

w

そして一番最初に出ていたのはリオだった。ドラマに出てきた曲で
そして

きれいな歌声で終わった。結構いい評価だった。

「まさか・・リオがこちらが知ってそうな曲を選ぶとは・。

さすが・。しかもきれいな声だな」

俺はそう思いながら見ていた。次は・。加奈子だった。まさか・。

加奈子が・。演歌の曲を歌うとわ思ってもいなかった・。しかも

高評価

凄すぎだろう・。・。糺見とコレットは俺たちがよく聞く曲を2人で
歌っていた。

これも高評価だった・。・。さすが・。毎回の打ち上げにカラオケ
くっと言う

5人ではまいった・。本当に・。んで・。最後の眞魅先輩歌うとき
にまさかの

アニメ曲・。これは・。さすがにないだろう・。この場面で・。

しかし・。

男性が・。歌うならまだしも女性がね・。・。と俺が呆れていてた
だ・。

啞然してたら周りの雰囲気・。1つにまとまってる・。

「みんな行くよー！」

眞魅先輩が声を出したら周りのみんなも・。

「いえーい!!」

と全員がノリノリだった・・・まあ・・・多分うちは・・・テレビがないからね・・・

あんまりテレビの中身までは知らないが・・・まあ・・・新聞は取ってるよ・・・

一応・・・今のアニメ曲ってこんなに・・・凄いのか???とか自分は思っていたら

歌が終わっていた・・・そして結果真魅先輩が優勝・・・あなたはどれだけ恐ろしい人

なんですか・・・先輩・・・と自分は・・・心から真魅先輩を恐ろしい人だと思い

呆れていた・・・。その後リディアさんを含めていろいろなイベント会場に行って

参加したり屋台もあったのでまたおごったりしてみんな楽しんでいった。

「まあ・・・こんな日でもいいか・・・みんな楽しんでるし・・・。

俺が楽しまないとみんな悲しむしな」

俺がそう思いながらみんなと一緒に楽しみました。途中でリディアさんは

「では私はそろそろ戻らないといけないので失礼します。」

と頭を下げて俺は

「楽しんで良かったです。こちらこそありがとうございました。」

と俺は礼を言つてリディアさんが小さい声で

「では・・・また後で。」

と言つてリディアさんは俺たちから去って行った。その後俺は彼女らに・・・

いろいろ連れまわされ、結局解放が10時ごろであった。家に帰ったのは

11時ぐらいだったのでリディアさんから渡されたこの機械を襲うと俺は

したのであった。

（第50章終わり）

リディアからの・・・真実？

俺はリディアさんからもらった？この機械を押してみた。

そして俺の部屋に魔方陣が現れ数秒後リディアさんともう1人が現れた。2人は俺の部屋にテレポートされたみたいで

「あら・・・中に入ってしまった・・・失礼しました。」

とリディアさんともう1人の方が玄関に靴を置いた。

そしてリディアさんともう1人は

「失礼します。」

と部屋に入った。まあ元々部屋に入ったから気にしてないだが・・・

「小さくこんな家ですいません。」

と俺は謝って2人にお茶を出した。

「いえいえ、お構いなく。」

とリディアさんが言ってもう1人の方が

「そうですよ。気にされなく山本様も座ってください。」

と言った。そして俺も座った。そして

「山本さんにはこの方を紹介してませんね。」

とリディアさんが言ってもう1人の人が

「挨拶は私がしよう。改めまして。私は天界の王のラファエルと

申します。多分会ったのはこれが初めてですが、緊張なさに」

と言った俺は

「いえ・・・では・・・なぜ・・・その天界の王のラファエル様が・・・

うちに・・・？なにかあったのですか？」

俺が言っただけでラファエルが

「様はよしてくれ。普通にラファエルと呼んでもよい。えーと

リディアから話は聞いた。あなたは天魔人ですね。」

と言われリディアは

「あ、気にしないでください。この方は天界の王でもありコレットの父親でもあるし、私を拾ってくださったお方ですので大丈夫です。」

「
と言われ俺はちょっとびくつとした。ラファエルは
「ああ、だから安心してくれたまえ。もちろんコレットには秘密を
している。」

ちよつと・山本様に質問がありまして・。」

と言ってきたんで俺は

「何でしょうか？」

と言った。ラファエルは厳しい目をして俺にこれから起こることそ
して俺の未来

について話してくれた。（第51章終わり）

リディアからの・・・真実？ その2

ラファエルさんは厳しい目で俺を見つけて言った。

「実は今天界は問題はないだが・・・魔界が全世界を征服しようと考えてるのだ。そしてまず君たちの世界を征服してそれから俺たち天界を攻めようという計画を情報を得て、それを阻止するために君の手を借りたい。」

とラファエルさんが言った。俺は少し考えて

「なぜ、魔界は全世界を征服しようと考えたのですか？」

と俺がラファエルさんに質問をすると、

「その理由は私と山本さんの天魔人をもう二度と作らないことが1つの理由。もう1つの理由は正体はばれてはいないので・・・山本さんがうちから助けたときの魔力を感知してしまい・・・、天界に天魔人がいることを知ってしまい、不公平など言い争いになりそうで・・・今現在軍を強化をしているらしく・・・いつ攻めてくるか

私たちも想像ができなくなりました。」

とリディアさんが言ったら

「そこで・・・こちらは天界と君たちの世界を魔界から来るところを結界を

貼ろうとしているのだが・・・だがしかし・・・もし失敗した場合のための

軍の強化もしていく、そこで元々魔力が高い私とリディアが結界を作る

役目をした。だが・・・こちらでは・・・魔力で結界を何年かで破られてしまう。

そこで・・・3人で結界を作ると当分は結界を破れないけど・・・その素質が

うちらで魔力が高いのはコレットと山本様のどちらかにお願いし

ようとしてな

山本様がよければ……。お手伝いしたいのだが……」

とラファエルさんが少し言葉を置いたので

「そのことはコレットには伝えたのですか？」

俺が言ったら

「いや、コレットにはまだ伝えてないが……」

ラファエルさんが答えて

「うちがよければお願いします。」

と頭を下げた。それを聞いたラファエルさんが

「これだけ伝えたい。もし仮に山本様と私とリディアの3人で結界が成功しても

リディアと山本様の天魔人の魔力が無くなり普通の人間になってしまいます。」

まだ・・推定ですが・・それでもいいでしょうか？」

と聞かれたので俺はリディアに

「リディアはそれを理解をして協力をしたのか？」

と聞かれたのでリディアは

「私は困ってる方を置いてはいけません。私の天魔人の魔力は親が私を守るために

なくなつて私は1人だったけど・・ご主人様が私を助けていたのだので私は

1人でも多くの人を助けたい。だからそのために今の私がいると思いますので」

と答えた。それを聞いて俺は2人に言った。 （第52章終わり）

俺の未来？

俺はリディアの一言で決心はついた。そして

「分かりました。うちでよければお願いします。」

と俺は頭を下げた。

「ありがたい・・・何とお礼をすればいいことやら。」

ラファエルさんが言って

「だけど・・・ちょっとお願いがあります。」

俺がそう言ったらラファエルさんが

「ああ、条件はのむつもりだったんだ。私にできることなら

条件を言ってください。」

と言った。それを聞いて俺は

「簡単なことです。そのことをコレット、リオ、真魅、糰見、

加奈子には秘密にしてください。俺があいつらを心配させると

俺は集中が無くなるから・・・今日のことも秘密にしてくださいと

ありがたいです。もう1つは今のおれでは多分魔力の制御が

うまく使えません。リディアさんを守るときはうまく成功をした

けども

元々天魔人の魔法を使ったのがあの時は初めてだったので・・・

うちを鍛えてください。お願いします。」

俺は頭を下げた。それを聞いたラファエルさんが

「ああ・・・分かった今日の件と今後のことはあの人たちには

秘密にしよう。それは守る。山本様が暇な時間があればいつでも

天魔人の魔力を鍛え制御できるようにはなるでしょう。それは問

題はない

だが・・・しかし・・・今のうちが予想しているのはあと2年後つ

まり・・・

もしかしたら・・・山本様の学校で卒業式が出れない可能性も高い
だが・・・」

とラファエルさんが言って俺は

「大丈夫です。それよりみんなの今後の幸せを願うのが先です。うち

もう・・・自分での無力差をなくしたい・・・もちろん大学にも行かない

つもりなので気にしないでください。まあ。。それを真魅先輩に気付かれると怖いですがね・・・あはは・・・」

と俺は答えた。ラファエルさんが

「そうか・・・それはすまないことをした・・・山本様今後もしっかりお願いします。」

一応鍛える件はまた今後お伝えしますのでよろしくお願いします。

「
と言ってリディアさんとラファエルさんがレポートで天界に帰った。」

俺は重大なことをしてしまったな・・・と思いながら

ご飯を作った。（第53章終わり）

学園祭後

学園祭で俺はリディアさんから大事な話があります。と

聞いたので夜にリディアさんを呼んだら。もう1人の方がいた。

しかもその方はリディアを助けた方であり、コレットの父親しかも天界の王様だとその時に初めて知った。そしてラファエルさんが

俺に早くて2年後に魔界から全世界を征服しようと考えてるらしく

それをラファエルさんが魔界での結界をするためにラファエルさんと

リディアさんが俺に手伝ってくれないか？と頼んできた。俺は

別にかまわないけど・・・とか思いながら考えてたけどもし俺が

手伝わなかったら俺の代わりに魔力が高いコレットが結界を

することになっていて、俺はもし仮にラファエルさん達が

結界を失敗したら・・・真魅先輩たちが・・・危ないかも

と自分は思い手伝う代わりにコレット達には秘密にしてもらうことを

お願いをした。そして結界をするのに強大な魔力が消費するらしく

ラファエルさんは問題はないらしいけど俺やリディアさんは

天魔人の力が無くなるらしく、普通の人間になるだそうだ。

リディアはいつものようにラファエルさんの家の使いとしてくれる

らしく

俺は・・・元々魔界人には恨みがないし、もし・・・全世界が平和のために

この力が消えるなら、お母さん、お父さん、おばあちゃんはずっと許してくれる

と俺は思う。そして・・・俺はそのためにもラファエルさんにあいてる時間で

鍛えてくれることを約束してくださって、2人は一旦天界に帰って行った。

その2日後・・・学園祭が終わって2日休講だったので俺はのんびりして

学校に行った。そして教室に入ってから夏季坂と金崎にあつて
「おはよう」

俺はいつも通りに2人に挨拶をして、

「おう、おはよう山本」

「おはよう山本」

夏季坂と金崎が言った。そしていつも通りの学校の授業などあり昼
休みに

「そついえば・・・もうすぐテストだったな」

金崎が言つて

「あ、そついえばそうだね」

夏季坂が言つてのんびり会話をしている

「ところで2人は勉強得意なのか？」

俺が気になっていたことを2人に聞いた。

「いや。全く・・・」

金崎がはつきり言われ、

「んゝ基礎ぐらいなら大丈夫かな」

夏季坂が言つて俺が

「じゃあテスト期間前に図書室で勉強会でもするか？」
と2人に言つたら

「まあ・・・前のテストの点数はかなりひどかったしな・・・
確か・・・山本結構成績がよかったし・・・分からないところ
教えてくれよ」頼む」

「いいですねゝもし・・・自分が分からないところがあつたら
教えてください。」

2人はそう言つて来週からテスト期間が始まるので俺たちは
勉強会のことは置いといて楽しい昼休みを過ごすのであつた。
(第54章終わり)

勉強会　その1

その後俺は2人に学園祭のときに一緒に回れなかったんで3人で学園祭成功の祝杯でファミレスでお祝をした。

もちろん、俺が2人に一緒に回らなかったことの許しをもらい2人にはおごりとしてファミレスになった。そしていつも通りの生活をしていて。テスト1週間前になり、放課後俺たちは

図書室があいてる時間までに3人で勉強をしていたが・・・

途中で糰見に見られてしまったらしく・・・結局・・・

糰見と加奈子、コレット、リオの4人も参加することになった。

「ごめんな・・・」

俺は夏季坂と金崎に小さい声で謝った。でも

「気にするな。元々こそそしてやってはないし・・・」

「気にしないで俺たちも参加してもいいって言われたから

助かってるぐらいだよ」

2人が俺に言ってくれたので

「ありがとう・・・2人とも」

俺は2人にお礼を言った。そして・・・俺、夏季坂と金崎。

糰見、加奈子、コレット、リオの7人でやることになり一応

男グループと女グループで勉強をすることになり、

俺と糰見は毎回のごとく大体の試験範囲は知っていたので

一応一通りはできていて分らないところを教えていった。

そして・・・夏季坂は元々基礎はできていて応用が結構できないところ

が多いが・・・時々糰見が見てくれて応用のところでアドバイスなどして夏季坂は何とかできるようになり、金崎は自分は全くつと言つても

全く勉強ができないつというわけでもなく、できるところとできないところが

分かれていてすごく助かっていた。それを俺が簡単に教えていき段々と

できるようになっていった・・・。

「本当に助かるよ・・・2人とも・・・結構できていて・・・おれはすごく助かる・・・」

俺は心の中でそう思った。まあ・・・後のメンバーは・・・いつもの同じように

俺と糺見のアドバイスがないときついらしく・・・

毎のごとく・・・教えていた。 （第55章終わり）

勉強会　その2

学園祭後に2学期最後のテストがあるので俺は夏季坂と金崎と2人でやるつもりだったが・

まさか糰見に見つかるとは思ってもしなかったので結局全員でやることになった。まあ・一応

俺と糰見が大体勉強ができてしかも夏季坂と金崎も基礎はだいたいできるから本当に助かった。

学校の場合は放課後使って図書室が閉まるまで

俺たちは毎日勉強会をして土日は夏季坂と金崎も一緒にリオの家で勉強会をしていた。

「でも・夏季坂と金崎は理解が早くて助かったよ」俺はそう言った。2人は

「いや・元々基礎ができていただけだし・糰見さんや山本の教え方がとてもよかったんだよ」

夏季坂が言って

「そうそう。俺も全く勉強とかすぐに投げ出すし・ただけど今回は最後まで勉強ができるなんて俺はすごくびっくりしてるよ・糰見さんや山本のおかげで少しだけでもできるようになるとは

正直びっくりしてるさ・あはは」

金崎が言った。まあ今日で土日の休日は勉強はできないけど後はテスト前日まで図書室を借りて勉強をしようつとみんなで相談をして終わったのが18時ごろになった。

そして・おれは家に帰った時にリディアさんとラファエルさんが家の前に立っていたので

「こんばんわ」

俺が2人に挨拶をして家の中に入れた。そして・

「前に山本様が言っていた訓練のことですが・

「一応訓練場はできましたのでいつから使いますでしょうか？」

ラファエルさんが言ったので

「そうですね・・・来週はテストがあるので終わったら

お願いします・・・」

俺はそう言って

「分かった。じゃあ山本様にはこれを」

リディアが俺にカードっぽいものを渡した。

「これは訓練所に移動できる機械です。まあ・・・鍛えられれば

これは必要なく自分で移動できますが・・・最初のほうは

これで来てください。」

リディアさんが言ってくれた。

「ありがとうございます。これからお願いします」

俺がそう言って2人は忙しいので失礼しますね。っということでは

天界に帰って。俺は

「よし・・・がんばるか・・・」

と言って夕ご飯を作った。

（第56章終わり）

テストとその結果

テスト前日まで俺たちは授業で先生からの

テストに出る場所などをメモしてそこを

覚えたりそれ以外でも一応少しでもできるように

勉強をした。そしてテスト当日俺は普通に教室に入って

「おはよう」

俺は2人に挨拶をして

「おはよう」山本

夏季坂が言って

「おう、おはよう」

金坂が言った。2人は教科書を見てたので

「今日はテストだ。がんばろうぜ」

俺が言って

「ああ、そうだな。分からないところ教えて食えてさんきゅーな
すごく助かった。山本」

金崎が俺にお礼を言って

「うんうん。僕も基礎しかできてなかったし、山本と糰見さんのお
かげで・・・少し応用もできたから・・・テストには悔いがない
ように頑張るよ。」

夏季坂が言った。俺も自分の机に座ってテストまでに少しでも
教科書を見直して復習をした。そしてテスト。俺と糰見は
楽々と分かる問題から埋めていってテストは終わった。

あとからみんなに聞いてみると、糰見は間違ってるかもしれない
けど全部埋めたそう。夏季坂は基礎問題は完璧だったらしく
応用はできるところは埋めてできなかったところは少しでも

解いたらしく夏季坂は満足をしていた。金崎も前までは

半分ぐらいしか埋められなく今回は会ってるかわからなかったけど
全部埋まってすごくうれしそうだった。他は・・・なんか悔いがあっ

たらしく

もう少し時間を・・・っていう声が・・・そして・・・

テスト後・・・まあ・・・大体は上ったらしくクラスでは1位が糰見

3位が俺、6位が夏季坂、10位がコレット、11位が金崎、

15位が加奈子、16位がリオでしたが・・・噂によると

真魅先輩が3年学年で1位だったらしい・・・どんだけ

勉強ができるんだあの人は・・・とか思ってた・・・（第57章終わり）

クリスマスについて

テスト後みんな忙しかった。なぜなら

「そろそろクリスマスだね」

夏季坂が言った。そう・・もうすぐクリスマス

まあ俺はクリスマスは店が繁盛するのでバイトで

いつもクリスマスという気分がなくそのまま過ごしてるけどね
今回もそうだと思ってたんだが・・テスト後店長が

「山本今年はバイト入らなくてもいいぞ？」

店長から言われたので

「なぜですか？他の人も・・クリスマスは

休みたい人多いでは？」

俺がそうだったんだけど・・

「山本・・お前は・・4年ここで働いたけど

4年間お前はクリスマスのときいつもお前は

他の人のためにシフト入れてくれるじゃないか

今年はみんなも山本の気持ちを考えて今年は

お前は真魅ちゃんや他の子などで楽しいクリスマスを

迎えてくれ。だから店のことは気にするな。な」

と言われた。うれしいけど・・正直言って申し訳ない・・
そういうことで

「夏季坂と金崎はもうクリスマスの予定とか入ってるのか？」

俺は2人に聞いてみた。

「いや・・ないけどどうして？」

夏季坂が言って

「いやあ・・元々バイトがあっただけどその日だけ店長が
休めって言われてて・・1人じゃ・・暇だからの・・」

俺はつぶやいたら

「そっかーじゃあ一緒にやるか？クリスマスの日に何か」

金崎が言ったので

「ん〜じゃあ僕の家に来る？2人にはいつもお世話になってるから」
夏季坂が言った。

「でもいいのか？」

俺がそう言ったら

「うん。別にかまわないよ？お母さんもまた2人を呼んでほしいと言ってたから。多分大歓迎だと思う」

夏季坂が言ったら

「その話ちよつとまった〜」

声がして俺らはみんなで後ろ見たら・・・そこにいたのは真魅先輩がいて

「な〜に男3人でクリスマスイブを過ごそうなんて〜私も話入れてよ〜」

と真魅先輩が言って結局・・・真魅先輩が強制的にクリスマスの計画を

作られたのを知ったのは2日後だった・・・（第58章終わり）

クリスマスの準備

んで・・・結局眞魅先輩が勝手に決められ俺たちは困っていた。

「本当に・・・ごめん・・・」

俺が2人に謝った。

「気にするな。」

「大丈夫だよ」

2人はそう言ってくれた。眞魅先輩は

「だって～山君私たちを置いて男だけでクリスマスってひどいよ」クリスマスはみんなでわいわいしないよね」

とのりのりだった。んで俺を含め6、7人で夏季坂の家に
お世話になるのは行けないと思い話した結果俺は・・・

おばあちゃんの家でクリスマスをすることになった。

ずーと使ってなかったので俺はクリスマス前に1回

おばあちゃんの家に行った。そして家の中に入って

和室におばあちゃんの写真があり

「お久しぶりです。おばあちゃんずーと家にこれなくってごめんね
また少しだけどいなくなるけどクリスマスだけ使わしてください。」

と言つて俺は和室から出てリビングなど自分達が使うところを
先にきれいにしておいて後は使っていない所をきれいにしていた。

そして・・・知らない手紙を見つけた。そうおばあちゃんが

俺宛に書いた最後の手紙だった。俺はそれを見つけるけど

これと呼んだら遅くなると思い。先に家全体をきれいにした。

そして・・・手紙を開けてみた。

「連暮へ

多分知ってるけどお前は天魔人だよ。だけどね・・・

天魔人とか関係なく連暮は連暮らしく自分で未来を

選んでね。自分が思ったことをすれば、誰もあなたのことを

憎んだりはしないでしょ。だけどね・・・これだけ覚えててね
何も言わずにあなたが自分なりに行動をすると悲しむことを・・・
おばあちゃんは天国に行ってもあなたのことを見守ってることを
この先辛いこともあるでしょう。だけどそれを逃げずにがんばって
未来へ・・・がんばってね連暮

おばあちゃんより」

手紙を読み切った俺は

「ありがとう。おばあちゃん」

と言って今日はアパートに帰って行った。

（第59章終わり）

クリスマス

「メリークリスマス〜！」

と女性陣がノリノリだった。まあ、仕方ない。

俺たち男3人は微妙な感じだったが・・

空気を悪くなると真魅先輩が・・まあ俺だけならいいだが2人には特に・・迷惑かけないようにしないとな・・うん。

まあ、今回はいつもはリオの家が多いだが・・

さすがに毎回リオの家にお世話になるとは行けなかったの
今回はおばあちゃんの家を使ってクリスマスを過ごすことになった。
俺も前に掃除する前までは4年以上この家に来なくなつて
久しぶりに来てみて良かったと思う。だけどあまりにも1人で
使うのはもったいないと思う・・。けどいつか俺が1人前になつたとき

おばあちゃんの家に住むことにするよ。ついつも心で言っていた。

「それにしても、久しぶりに来たわね〜ここ」

真魅先輩が言つて

「そうだね〜山ちゃんのおばあちゃんの家かなり広いね〜」

リオが言ってくれた。まあだが・・リオやコレットの家には負けるがね・・。と思いつつみんなで夕ご飯を食べた。

「それにしても今日は豪華だね〜」

夏季坂が言つた。本当にそうだな・・おれもこんな食事初めてだ。
何せ元々クリスマスとかはいつもの食事をしながら何も考えずに
クリスマスを過ごしてたからの・・。

「まあ・・・店長にはお礼をしとくよ。」

俺が言つた。そうこれ全部店長からの贈り物だった・・。
さすがに食事だけでは森足りないか思い自分でケーキを作ったけど
店で買ったつと言つことでみんなに出した。女性陣が盛り上がつて
るうちに

「そういえば・・・山本っていつもみんな一緒にいるんだ？」

夏季坂が言った。

「そういえばそうだな・・・いつも山本の周りには・・・」

金崎も言いたそうだが・・・これ以上言ったらもしかしたら・・・聞こえてしまう

から言葉を止めたけど

「そうだな・・・俺が嫌だと言ってるけどやっぱりついてくるだ・・・

もうあきらめたよ・・・」

と言った。まあ俺たち3人はのんびりクリスマスを過ごし女性陣はノリノリでクリスマスを過ごすのであった。（第60章終わり）

訓練

クリスマス後俺はみんなが帰った後に1人で

おばあちゃんの家の中をきれいにして家に帰った。

そして、次の日に俺は何もなかったので前にリディアさんからもらった機械を使って俺は天界に向かった。ついたところは

トレーニング室みたいなものだった。そこにいたのは

ラファエルさんとリディアさんがいて

「お待ちしてました。山本様」

ラファエルさんが挨拶をした。

「では・・すぐに天魔人の力をコントロール・・っと言うわけにも
いかなので天魔人の力はかなりの消費をするので今の山本様の
魔力と体力のバランスが鳴っていません。このままコントロールの
訓練をしていたら山本様の体力がもちません。ですのですは
基礎体力を十分に私の判断で大丈夫ならば天魔人の魔力の
コントロールをしましょう。その後3人で小さい結界の訓練を
して、対魔界人の対応の戦い片を練習しましょう。いいでしょう
か？」

山本様」

ラファエルさんが言って、

「はい、大丈夫です。まだ役には立たないけどこちらこそお願いします。」

俺は頭を下げた。そうしてまずは体力作りをした。いつもは軽いランニング

だけをしていたが・・腹筋などの筋肉を鍛える人と同じように
トレーニングをしていた。そして休みながらやっていて気がつかな
いうちに

まさかの3時間ぐらいトレーニングをしていた。自分もはつきり言
って

そんなにするのではなくびっくりをしていた。ラファエルさんに聞いてみると

ラファエルさんはトレーニングをするときは4時間は軽く超えるらしい

だけど毎日すると無理があるので時々でいいらしい。まあ俺は朝のランニングをしてるといったら、それもいいらしい・・・。うん

やっぱり毎日欠かせないかもな・・・ランニングはなのでランニング以外のトレーニングは3日に1度最低1時間多くて3、4時間で

やることを約束になって俺はアパートに飛んだ。(第61章おわり)

お正月　その1

クリスマス後うちはラファエルさんとリディアさんに頼んだ天魔人であるうちを鍛えてほしいということと言ってクリスマス後の数日後に俺は訓練をした。

まずは魔力をコントロールするより体力つまり精神力を鍛えよ？っということになり今自分は

スポーツジムに行くことがあまりできなく

ラファエルさんとリディアさんのおかげで

いつでも天界にあるトレーニング室？を借りることが

できるようになった。しかし毎日は無理なのであいてる時間は朝のランニングをすることにしてリディアさんからの

お勧め料理を幾つか教えてもらった。まあ、つまり

いつでも健康状態であることで自分で独自で鍛えることができるっと言う自分の理論。まあすごく助かるけどね

んで正月前に俺は夏季坂と金崎に電話をして

真魅先輩たちにはれないように一緒に初詣に行こうっという

約束をしていたが・・・

「…………あけましておめでとうございます……………」

女性陣が元気よく俺に挨拶をしていた。

「本当にすまん。山本……」

金崎が言った。なぜばれてしまったのかというと元々俺は

近くの神社に行くで見つかってしまったのであえて1時間ぐらいい

かかる神社に行こうと言って2人にもOKもらっていたんだけど

真魅先輩が……夏季坂と金崎を駅の前に見えたので

こっそりと追跡したらしく……そのときに他の人を携帯メールで

伝えたらしく俺たちが集合した1時間後に再開したわけなのだ……

「真魅先輩おそろべし」

俺が……落ち込みながら言った。

「山君私たちから逃げたらだめよ、特に私はね。」

眞魅先輩が言われた。まあ・・・結局俺はいつになったら

男3人で一緒に遊べる日が来るのか・・・とか思ってたんだけど・・・

その後俺たちはおみくじを引くのであった。(第62章終わり)

お正月　その2

その後俺たちは真魅先輩を先頭にいろいろ回っていた。

「おみくじ引こうよ」

真魅先輩が言って全員でおみくじを買った。

そしてみんなおみくじを買って言ってまず最初に男性陣

「中吉かまあまあか」

俺が言った。次に開けたのは

「凶か　仕方ないか・・・」

金坂が言った。最後に

「お、大吉だ」

夏季坂が言った。まあ、大体そんなものと俺は思った。

次に女性陣があけることになって、まず開けたのは

「うわ　ん大凶だ」

リオが大凶を引いてショックを受けていた。

「まあまあ。大凶は今悪くても後からどんどんよくなるから

気にしないでリオちゃん」

真魅先輩が言ってそのまま開けたら

「あら、私も大凶だわ　リオちゃん私たち頑張りましょう。」

真魅先輩が言って

「ですね・・・真魅先輩」

とリオが言った。そして次に開けたのは

「私は吉ですね。」

コレットが言ってその次を上げたのは

「私も・・・吉ですね。」

加奈子も言って最後に

「私は大吉でした。」

糰見が言って結局

大吉は糰見、夏季坂

中吉は俺、

吉は加奈子、コレット

凶は金崎

大凶はリオ、真魅先輩になった。その後帰りに雑煮を食べて
全員解散になったが真魅先輩がまだいたので俺も仕方なく
家に帰ったのであった。
(第63章終わり)

今までの思い

俺が何にもなかった1年を過ごそうと思ったんだが・・もついろんなことでもうすぐ1年になるうとしてた・・それは・・まず、この学校に行くのは俺と眞魅先輩だけだと思い何にもない生活を過ごそうかと思いつながらまず、小学校の同級生、糰見と加奈子に会ってしまった。その後困っているところを助けてしまい・・リオとコレットその後リオとコレットが俺の過去を知りたいと言つて眞魅先輩に聞いたらしく、俺の過去を知って知ってしまった。まあ、天魔人までのことは眞魅先輩も知らなくそこまでは知ることはなかった。それでも友達になりたいという2人の意思があり結局友達になつてしまった。その後の夏休みにはコレットとリオが俺たちに天界を見せたいと言つて天界に旅行に行くことになった。だが・・俺は天魔人なので正直あまり行きたくなかった。そして1日目の買い物中に1人の女性が5人の男に声をかけられたみたいですごく困っていたところを俺が話で解決できればよかったものの結局男達は俺に魔法で攻撃をして俺は天魔人である魔法を唱えてしまった。そしてその女性にもばれてしまった。その後その女性はリディアさんと言う俺とおんなじ天魔人だったと後から知ることになった。お互いの昔の過去を話しあいリディアさんは俺の天魔人のことを秘密にしてくれるらしい。本当に助かりました。その後眞魅先輩が俺たちのところで海鳴島に行くつと言つてみんなで言つてその後テストがあり、体育祭があつて、そこで初めて夏季坂と金崎と友達になった。あの2人は俺に力をくれた。元々俺は自分からの行動はあまり好きではなくあの2人のおかげで自分から少しでも向き合うことができああの2人には

すごく感謝をしている。今後どうなっていくんだろうか・
俺は・・・（第64章終わり）

三学期

正月が終わって、正月っと言っても俺はバイトをしてたり、1、2学期の勉強の復習をしていた。まあ、あいてる時間は自分でランニングしたり、リディアさんからもらった。特製？料理を作ったり、トレーニング室を借りて自分で鍛えたりしていた。まあ、時々真魅先輩やリオ達からつかまりカラオケなどに行くこともあったが……。いつになったら俺を自由にしてくれるんだ……。真魅先輩。俺は……。そう思いながら……。三学期を迎えた。三学期はテストも1回しかないので大丈夫だと思うが……。問題はどうか。うん。」

俺は夏季坂と金崎と3人で遊べる日が来るのだろうか。」「今度3人で計画を立てようか……。うん。」俺は心の中で言った。最近思っていたんだが前までは軽いランニングしかしてないから自分の魔力があまりにも感じなかったんだが定期的にランニング、トレーニング室で体を鍛えてるから少しずつ自分の魔力を感じていて自分も

「これが魔力なのかな？」

とか思ってたりにしていた。だが……。問題が1つある俺だけ感じればいいけどいつかコレットやリオにも俺が天魔人のことをばれてしまうだろう。それはいいけど俺のせいでリオとコレットに迷惑だけはかけたくないそう思いながら俺は今度ラファエルさんに魔力のことを聞いてみようと思う。今後忙しくなるけど俺は

「がんばるか……」

と思いつつ・・・少し落ち込んでいた。

（第65章終わり）

キャラクター紹介（前書き）

テストなどがありまして・・・更新が遅れてしまい・・・
本当に申し訳ありませんでした・・・

こういう場合もありますが・・・なるべく更新できるように
がんばります。今回はキャラも増えてきたので
少し紹介を

キャラクター紹介

まずは

かきさかともき

夏季坂智樹

山本と同じクラスで自分からあまり声を

かけれない性格。だが・山本と金崎には

夏季坂がいての仲間らしく今でも仲良くしてる

勉強はまあまあできるほうだが、応用が苦手

運動はあまり得意ではない。今後山本の

学校生活はどういくのか？

かなざきまこと

金崎真

夏季坂と同じで山本と同じクラス

勉強は特に苦手だが・運動は抜群

なぜか運動部には入ってない。山本が聞いたところ

「何で？つてそりゃ〜めんどい」

だそうです。性格はのんびり。だけど

人が困ったりするとすぐに助けてしまう所

自分で直したいところはいつか自分で勉強を

とか・wまあ俺たち3人でのムードメーカーですね。

今後山本が困った時などに役に立つだろう人物。

リディア

山本と同じ天魔人。だけど山本との魔力は低いけど

コントロールは優れている。実際山本の前で魔法を

使ったことがないが・2年後の魔界から軍勢を

防ぐため結界をはるために山本とラファエルそして

リディアの3人で結界をはることになり今後重要な人物で

ある。性格はおっとりでいろいろな世話をしてくれる

優しい人。魔力は天界人の中で上にあたるかな？

ラファエル

現在天界での最強と呼ばれる人。しかもコレットの父親
山本とリディアの前で魔法を使ったことがないけど

使ったら町ひとつ破壊できるぐらいの持ち主。

今後山本の強化をしてくれる優しい王様だ。

性格まじめ。だけど教え方は優しいらしい。

魔力はまあ、もちろん天界の中で1番、しかたないね。
今後重要な人物だ。

さて短い紹介ですが今後山本はどうなっていくのだろうか？

ば・・ばれた？

正月になりまさかの眞魅先輩から尾行され

一緒に正月を迎え、そのまま3学期になった

俺たちはただ単に普通に生活を送り

何もない学校生活を送っていた。まあ俺は

朝5時に起きて5時30分から1時間かけて

ランニングをし、7時ごろにリディアさんから

もらった料理のレシピを参考にして料理を作って

ご飯を食べ8時に学校に行き16時まで学校で

その後バイトがあればバイトでなければトレーニング室で

体力作りをしていた。体力作りをしてもう1カ月

「山本様そろそろ体力もついてきて魔力も上がってきてますので

そろそろコントロールの訓練を少しずつしてきますね」

ラファエルさんが言って

「お願いします」

俺が言った。コントロールって言うてもただ魔力を練るだけの

ことですが・・それがないと結界を作る精神がいらしくこれも

重要なことだとラファエルさんが言っていた。精神を鍛えるのは

正座をして魔力を出せるトレーニングらしい。簡単にいえば

お寺のようなことか？まあ仕方ないことだ。まあ初めてだから

やり方だけ教わりこれも時間が空いてるときにやればいいって

ラファエルさんが言って俺は時間があるときはトレーニングと

会わせてやっていくつもりだ。まあ、ラファエルさんが

アドバイスでもし早くコントロールをするなら攻撃型の魔法じゃなく

援護の魔法を連続して魔力を消費してその後トレーニングしたほうが

魔力上げにもいいし、精神を鍛えるのにもいいらしい。しかも

それじゃ・・コントロールとは言わないじゃないかな？とか・・

思ってたりするが・・一応やる前にラファエルさんに魔力使った後に

よく羽が出てしまう恐れがあり見えないやり方も教えてもらった。

まあばれなければ自分のところでもやってもいいとラファエルさんが
言ってくれたので夜中に人がいないところに行っていたら

「や・山本？」

金崎がこんな夜中でまさか俺の特訓を見ててびっくりしてしまった。

「ああ、やつぱりここでやるじゃなかった」

俺はつぶやいてしまった。 （第66章終わり）

俺の正直

「なるほど」

金崎が言った。そう俺は天魔人であることを

金崎に伝えた。まあ、ばらしてもいいしその時は

俺はここを離ればコレット達には迷惑をかけないだろう
とか思いつつも

「まあ、山本俺はお前を友達と思っている。

夏季坂のことも助けてもらったしお前には

いろいろお世話になったんだけど誰だって

秘密は1つ2つあるさ。だから俺はお前の

天魔人のことを他の人にはいわねえ。

だから安心しろ。だけど天魔人のことは

俺以外に知ってるのか？」

金崎から聞かれたので

「いや。知ってるのはコレットの父親の

ラファエルさんとコレットの家にお世話になってる

リディアさんの2人だけは知ってる。もちろん

俺が自分から言っていないが金崎見たいに自分の

ちよつとした理由でばれてしまった。」

俺がそう言って

「そつかゝじゃあ最後だけ1つ教えてほしいんだけど」

金崎が言って

「俺が答えれる質問なら」

俺は言った。

「なぜ、そのことをコレットさん達には言わないのだ？

俺と夏季坂は体育祭のときに初めて山本と話した。

が・・・しかしコレットさん達は前から友達だったから
教えてもよかったんだじゃないかな？特に真魅先輩は

山本を昔からよく知ってる人だから相談には乗ってくれるはずだけどな」

金崎が言って、俺は少し考えて

「金崎が言ってるのは間違っではない。普通はそうだ。

だけどね・まず、この世に天界人と魔界人そして

人間の3種の人類がいるんだ。そこに俺やリディアさんの

天魔人がいてはいけないのだ。それを知った天界人と魔界人は

それを排除するそうだ。けどラファエルさんは天界で

それを止めるように言ってくれたらしい。けど魔界人は

そう言っても聞いてくれない。そして俺が天魔人のことを知って

後1年ぐらいで魔界がこっちに攻めてくる。それを知った真魅先

輩や

コレット達に知ったらどう思う？守りたいけどコレットやリオは

天界人だから戦いに出すかもしれない。それなら教えないほうが

いいではないかと俺は思う。」

俺は金崎に少し強めに行った。

「そっかーじゃあ俺は何にもいわね。だけど何かあったら

相談だけでもいいから何かあったら相談してくれ」

金崎が言って俺の前に消えた。

（第67章終わり）

眞魅先輩のお別れの準備

3学期になって眞魅先輩につかまり
初詣は男3人で行くつもりだったが
結局いつものメンバーで行くことになった。
その後俺はラファエルさんから借りた
トレーニング室で筋肉（魔力）の強化に
向けて特訓を行いあいてる時間では
朝のトレーニングやリディアさんから
もらった健康レシピなどもらい自分なりに
オリジナル料理を作ったり普通の日常生活を
送っていた。1月の中旬で次のステップで
魔力のコントロールの訓練に入り時間が空いてて
夜中だと人がいなかったたので軽い練習をしていたら
金崎が偶然に見つかり俺は自分のことをすべて話した。
金崎はそれを聞いて誰にも話さないって言って家に帰った。
それはよかったと思うている。その後俺は毎日朝の
トレーニングをして学校に行きバイトがある日はバイトで
無い日はトレーニング室で体力作りとコントロールの訓練を
していた。その後何にもない毎日が続いた。まあ3学期なので
もちろんテストもあった。今回は各自で勉強になったが
結果はいい人もいれば駄目だった人もいる。それは仕方ない。
そして眞魅先輩が3年生だったのでもう少しで卒業になった。
俺は眞魅先輩には秘密でお礼のプレゼントを探して
眞魅先輩を驚かそうとしていろいろ探して準備をしていた。
そして・・・3月眞魅先輩が卒業する前に眞魅先輩を
俺の家に招待をした。（第68章終わり）

眞魅先輩のお別れ　その1

「山君から誘ってもらうの初めてだ」

眞魅先輩が言った。今現在俺の家だ。

誘ったのはいいが、どこに行けばいいのか

分からず・・・結局眞魅先輩に似合うネックレスと自分で作った料理で眞魅先輩を家に呼んだ。

「でもうれしかったな」いつもは私が山君を誘って

たから・・・まさか山君からお誘いはびっくりしたよ」

眞魅先輩はそう言った。

「まあ・・・いつもはうちより眞魅先輩から誘うことが多いじゃないですか・・・今回はもうそろそろ

卒業になるから・・・そのお礼といつも感謝の気持ちで

呼びました。」

俺はそう言った。そして

「でもうれしかった。本当にありがとう」

眞魅先輩はうれしそうに俺が買ったネックレスと料理に満足しながら俺たちは2人で黙々と食べていた。

「眞魅先輩は大学に行くんですよね？」

俺が質問をしたら

「うん、そうだね」まあ・・・私だけならかなり上の

学校は狙えたけどね」けどそんなのはつまらないからね普通の大学に行って自分が将来のこと考えてみようかな」

それともちろん山君を私が通う大学に連れていくよ」

眞魅先輩はのりのりで言ったので

「あはは・・・やっぱり強制ですか・・・」

俺が言ったら

「もちろん」まあ山君だけじゃなくみんな一緒に大学に行ければいいな」っと思うよ。」

眞魅先輩が言つて

「そうですか・・・だけど他の人も将来考へてる人も
いるからな・・・全員は無理では？」

俺が言つて俺たちは笑いながら夜遅くまで過ごした。
（第69章終わり）

眞魅先輩のお別れ　その2

眞魅先輩にプレゼントを渡して数日後

3年生は卒業式まで学校に行くのは自由になった。

それでも眞魅先輩は時々自分の部活の様子を見たり

俺たちが帰るときに捕まえて一緒に帰ることもあった。

そして・・・卒業式。この学校は1学年10クラスもあり

全学年でホールに入るのは無理なので毎回俺たち後輩は

卒業式には参加ができないのであった。なので俺は

外で卒業式が終わるまで待つつもりだったんだが・・・

それはみんなも同じで俺たちは眞魅先輩が門に来るまで

ずーと待っていた。そして12時ぐらいに眞魅先輩が

門のところに来て

「あらゝみんなゝ」

ノリノリで言ったので

「・・・卒業おめでとうございます。眞魅先輩」「・・・」

女性陣が言っ

「・・・眞魅先輩今までお世話になりました。卒業おめでとう

ございます。」

金崎と夏季坂が言った。夏季坂達は体育祭後だけど眞魅先輩と付き合ひがあり、おめでとうを言いたくてきたそうだ。

「お疲れ様でした。眞魅先輩。今までありがとうございました」

俺が最後に行って花束を眞魅先輩に渡した

「みんなゝありがとうゝでも大学に行っても時間があつたら

ちよくちよく来るからねゝその時は一緒に帰ろうゝもちろん

土日も遊びに行くなら誘ってよゝ」

ノリノリで言った。眞魅先輩は涙をあんまりしなく

うれしそうに俺たちに行つて一緒に途中までだけど

帰った。そして・・・みんながお別れした後俺と眞魅先輩の2人に

なつたとき俺が見たのは泣いている眞魅先輩だった。

「眞魅先輩・・・」

俺が言ったら

「あ・・・ごめんね・・・こんな顔を見せちゃって・・・

だけどね・・・お別れは辛いね・・・みんなの前は我慢したけど・・・

山君の前まではだめだった・・・ごめんね・・・」

眞魅先輩が泣きながら言つて

「気にしないでいいよ・・・おれの前だけ泣いてもいいですから・・・」

俺がいつて眞魅先輩は

「ありがとう・・・」

俺の前で別れるまで眞魅先輩は泣いていたのであった。（第70章
終わり）

終業式

眞魅先輩が卒業した後俺たちはいつも通りに学校生活を送っていた。変わったことは・・・

そうだな・・・金崎と夏季坂がコレット達と話すことが多くなったかな？まあ・・・初めは

お互いに接してなかったし話すきっかけもなかった

訳ですが・・・俺と一緒にいるときに毎回眞魅先輩につかまり俺たち3人は一緒に行動が少なかったわけでコレット達と何回か行動したのでだんだんと

会話ができるようになったわけだ。まあ、俺は

いまだに・・・逃げているがね・・・

眞魅先輩が卒業した後でも俺たちが終業式までは

1週間に2回ほど学校に遊びに来ていた。

それはいいが・・・眞魅先輩・・・学校の準備は大丈夫なのか？

とか思ってたなり・・・それと別件になるが・・・

俺は毎日のトレーニングを休まずにやっていて

1週間に1回ラファエルさんに魔力のチェックをしていただき

結界の練習を手伝ってもらった。大きい結界は3人じゃないと

無理ですが・・・リング程度なら自分にもできるっと言われたので

リングの周りに結界をはる特訓をしていた。だが・・・

「山本様いい出来ですね」

ラファエルさんが言ったんだけど

「ありがとうございます。ですが・・・正直に言ってください

たぶん・・・まだちゃんとした結界にはなってますんよね？」

俺が言った。それを聞いて

「そうですね・・・まだこれだと少しの反動で結界が壊されて

しまいますね・・・」

ラファエルさんが言って、少し小さい魔法を結界にぶつけたら

結界が壊れてしまった。

「だけど、ここを練習する前は魔力をあまり感じなかったしその時にやってみたら結界など作れませんでしたよ？」

「だけど・・・まだ始めたばかりだし・・・時間もありません。」

「あと1年ですが・・・今後山本様はこの結界を完璧に完成できるでしょう。私はできると信じてますから」

「ラファエルさんが言ってくれた」

「ありがとうございます。がんばってみます。」

「俺が言っただけ、時間があるまでリングの周りに結界の練習をしていた。そして・・・数日後俺たちは2年生になった。」（第71章終り）

2年生

眞魅先輩が卒業してから俺たちも2年生になった。

1年生が終わるまで眞魅先輩はちよくちよく来てて俺たちは何も無い普通の生活を送っていた。そして2年生のうち高校生なので毎年各学年クラス編成でクラス替えがあり俺は結果が出たのでその日は早く学校に行った。そして自分のクラスを見ると

「1組か」

俺はつぶやいた。まあ、俺以外は全く興味がなかったのだから俺はすぐさまに1組の教室に入った。しかし・・早すぎたので誰もいなく俺は自分の席に着いてのんびりとしていたら、

「山本おはよう」

夏季坂が言った。

「おう。おはよう夏季坂お前も1組か？」

俺がそういうと

「うん。今年もよろしくね」だけど金崎は2組だったよ。」

夏季坂が言って

「そっか」あいつは2組か。仕方ないなクラス多いから・・」

そう・・この学校は各学年10組もある学校だった。同じクラスの人と一緒にになれるのは珍しいのだ。

「だが・・今年もよろしくな夏季坂」

俺は言った。そして後からどんどん人が入って行つて

俺が見た感じは1組は俺と夏季坂だけかと思いきや

「山さんも1組なんだね。今年もよろしくね」

糰見が挨拶をした。

「今年もよろしく。ということは糰見も1組なのか？」

俺が言ったら

「うん。そうだね。」

糰見が言った。その後俺と糰見と夏季坂は1組で
金崎とリオが2組、コレットが4組、加奈子が10組となったので
あった。

その後俺は新たな出会いが・・・？
(第72章終わり)

まさかの・・・？ その1

2年生になった俺たちは何にもない1日を
始まると思いきや・・・

そうそれは・・・2年生になってから1週間後であった。
俺と夏季坂は金崎が2組になったので昼休み以外では
こうして2人で話すことが多く時々糺見も入り会話をしていた。
その後俺はバイトや魔力の訓練などをして
いつも通りの生活をしていたのであった。その日も
バイトは無く早く帰ろうかと思ったら

「あの・・・すみません」

1人の女性が俺に声をかけてきた。

「俺でしょうか？」

俺はその女性に言った。

「あ・・・はい・・・あの・・・山本さんでよかったでしょうか？」

その女性は少しそわそわしてたので

「そうだけど・・・？」

俺が言ったら

「あの・・・私^{たかはらはつゆ}高原初優と言います。

今年から・・・山本さんと同じクラスになりました。」

高原さんが緊張して言ったので

「ああ、確か学級委員長だったよね？」

俺が思い出したように言っ

「あ、はい！覚えててくれたんですね。」

高原さんが少しすっきりしたように見せたので

「そりゃ・・・さすがに・・・学級委員長とかは・・・覚えてないとね」

俺が言うと

「それはそうですね・・・あはは。」

高原さんが苦笑してたんで本題に入りたかったので

「ところで高原さん俺に何か用ですか？」

俺が言ったので

「えーと・・・あの・・・私は・・・1年生の体育祭のときに

山本さんを見てから・・・好きになりました・・・だから・・・

私と付き合ってもらえませんか？」

高原さんが恥ずかしそうにして走って逃げて行った。

それを見て・・・おれは・・・

「はあ・・・やっぱり・・・体育祭でリレーやるんじゃなかった・・・。」

つぶやいて・・・おれは明日からどう答えていいかわからないまま

家に帰ったのであった。

（第73章終わり）

まさかの・・・？その2

私^{たかはらはつゆ}高原初優に告白された俺は

その日は何にもせず少し考えてた。その次の日

俺は普通に学校に行き教室に入って夏季坂に

「おはよう」

俺が言っただけ

「山本おはよう」

返事をした。そして席に着くと

「山本さんおはようございます。」

高原が挨拶をしたので

「おはよう。高原さん」

俺が返事をするとう高原さんは顔が赤くなり自分の席に

急いで戻った。俺はあまり反応できなくそのままに

していたが・・・やっぱり昨日の告白はちょっと

びっくりしたし周りにも聞こえたらしく今日は・・・

ちよつと俺と高原さんの話でいっぱいだった。

昼休み俺は1人でご飯を食うことにすると思い

学校の中庭に行った。そしてご飯を食べてる途中で

「あの・・・隣いいですか？」

糰見が俺に声をかけてくれた。

「ああ、どうぞ」

俺は言っただけ糰見は俺の隣に座った。

「今日は加奈子たちは？」

俺は糰見に質問をして糰見は

「今日は山さんと話したくて断ってきたんです。」

と言っただけ

「高原さんのこと？」

俺が言っただけ

「うん・・・。私も帰ろうとしたときに聞こえたから・・・」

糰見が答えると

「そっか・・・。だけど・・・俺は高原さんとは付き合えない」

俺がそういうと

「そうなの？」

糰見が質問をした。

「元々俺は・・・付き合う資格もない。昔みたいな失敗もしたくない
そして高原さんと話したのも機能が初めて、付き合っても
彼女がかわいそうだ・・・こんな俺と付き合うなんて・・・」

俺はそういった。だけど

「そうなのかな・・・。だけど私は山さんと初めて会ったときに
あ、この人といつか付き合ってみたいな。とか思ってたよ。

だけどね・・・山さん私も今もあなたのことが好き。だけど

山さんと付き合う資格がないのは私も同じだよ。山さんだけじゃ

ない

誰も付き合う自信がない。だけど好きだっていう気持ちは変わら
ない

だから・・・山さんもし・・・断るなら・・・ちゃんといってあげてね
高原さんも自分の気持ちを伝えたら分かってくれると思うから・・・

┐

糰見が言ってくれた。

「ありがとう・・・糰見。」

俺が行った時昼休みのチャイムが鳴った。

（第74章終わり）

返事

糲見に質問をされて俺は糲見には正直に答えた。

そして・・・放課後俺は高原さんに

「ちよつといいかな？」

俺がそういうと

「はい、何でしょう？」

高原さんが言ったので

「えーと・・・ここじゃちよつと・・・だから屋上で話すね。」

俺が言つて俺と高原さんは屋上に向かった。

「えーと・・・」

俺が言いだすと

「昨日はいきなりですいませんでした・・・」

高原さんがいきなり言ったので

「え・・・？」

俺が言う前に高原さんが言いだしたのでびっくりした。

「私も・・・あの後失敗したな〜っと思つてました。

初めて会った人にいきなり告白すると山本さんも

驚いたですよね・・・。本当にごめんなさい」

高原さんが頭を下げた

「いや・・・うちは別に・・・」

俺も啞然したので・・・一応返事はした・・・。

「私は元々人との話すのは好きじゃなかったのです・・・

あと自分が好きだ。っていう人は自分が言う前に・・・

他の人からどんどん採られて言つて・・・いつの間にか

自分が好きだつていう人が・・・いなくなると思ひまして・・・

今回の山本さんも赤崎さんや岡崎先輩を見ていると・・・

なんか自分が・・・早く自分が伝えたい気持ちをぶつけないと

と思い・・・いきなり話したのに・・・告白されると
いやですよ・・・本当にごめんなさい・・・。」

高原さんが言ったので

「そっか。だけどねそれだけではうちは高原さんのことは
嫌いにはならないよ。だけどね・・・うちも・・・もう一応

付き合ってくださいとは言われたことはあるけど断ったんだ。

それは・・・自分には男性とする俺は付き合って行けないんだ。

昔ある人を傷つけたから・・・。だから高原さんと付き合えない。」

俺は自分の意見を言った。

「そうですね・・・分かりました。」

高原さんも納得したので

「だけどね・・・付き合うことはできないがこんな俺でもいいなら
友達に歓迎するよ。だけど・・・うちも女性と話すのがあまり
好きではなくいつも糺見達には逃げてるんだ・・・。」

俺は言った。それを聞いて

「そうですね・・・私はその言葉でもとてもうれしいです。なので
私から友達になってももらえませんか？」

高原さんが言ったので

「そりゃもちろんこちらからお願いします。」

俺の答えを伝えてそのことを聞いた高原さんが

「ありがとうございます。」

泣きながら俺に何回も何回もありがとうつと
言ったのであった。（第75章終わり）

返事後

高原さんから告白を受けた俺は

屋上に行つて俺は自分自身での答えを

高原さんに伝えた。高原さんは涙を流したけど

俺が言つてゐることを分かつてくれたのはいいけど

そのままじゃかわいそうだと思つたので・

友達ならいいですよ。っと自分は答えたが

彼女もうれしそうに答えてくれた。

その後高原さんは昼休みに俺と一緒にいることが楽しく

毎日俺と居ることが多くなつたのはいいけど・

やっぱり女子は苦手なうちには・ちよつとね・

だけどそのことを高原さんは分かつていてくれて

ただ単に俺の隣にいてだけで満足をしていたそうだと

けど・このことを見ていて・このまま終わるわけにも

行かずに・もう噂では俺と高原さんは付き合つてゐるつとい

いやがらせを受けていたけど俺はもう無視で、高原さんは

何も言わずにしてくれていた。だけどね・

「ねえねえ・」

加奈子が俺に言つてきて

「やつぱり山ちゃんとは高原さんと付き合つてゐるの？」

いきなり言われたので・

「いや・前にも言つたけど俺は誰とも付き合う資格はないんだ。

だけどね・それでも高原さんがいって言ってくれたから・

もう高原さんが気が済むまでそのまま・何にもしてないから

ね」

俺はそういう理由でリオやコレット達にも説明して・

俺は少し疲れきつた顔で家に帰つたのであつた・。(第76章終わり)

VS魔界人 その1

俺は高原さんとなぜかいつも隣にいるけど
気にしなくのんびり生活をしていた。

「さてと帰るか」

俺はいつも通りに早く帰ろうとしていたら

「山本、今日一緒に帰らない？」

夏季坂が言ってきたので

「お、珍しいな。お前から誘ってくれるなんて」

俺がそう言ったら

「そうだね〜だって・・・このごろ高原さんと一緒に
いるから・・・あんまり話してないじゃん・・・。」

夏季坂が言ったので

「あ・・・そりやすまん。じゃあいつしよに帰ろうか」
俺が行って一緒に帰ることになった。そして下駄箱に
行ったときに

「お〜い一緒に帰ろうぜ〜」

金崎が言ってきたので

「ああ、いいぜ。」

俺が行って一緒に帰ることになった。しかし・・・

「このメンツで帰るのは初めてだな」

俺が言ったら2人は

「そうだね〜」

「そうだね〜いつもはね・・・他の人につかまったりして
一緒に帰ることがなかったし、山本帰るの早いから」

2人から言われ

「すまんすまん。」

俺が2人に謝っていた。帰り道に3人で楽しい会話をしたとき
前にいたのはコレットと知らない男が5人もいた。俺は一瞬で

魔界人だと気づきテレパシーでラファエルさんに

「今大丈夫ですか？」

俺が言つてラファエルさんが

「大丈夫だけど、どうしたんだ？」

質問を帰ってきたので

「魔界人がコレットの前に5人います。」

俺が伝えると

「わかった。私がこちらに向かうよ」

ラファエルさんが言つたので

「いえ、うちに任せてもらえませんか？一応一般には迷惑かけれないので

場所を変更しますけど・・・」

俺が言つたら

「わかった。だが念のために私も行こう。場所は実戦室があるから

そちらにレポートで飛ばせばいいよ。大丈夫か？」

ラファエルさんが言つたので

「やってみます。必ずコレットは傷を付けずにしますので。」

俺が言つて一旦テレパシーを切つた。そして金崎に

「コレットと夏季坂を頼む」

俺が言つたら金崎が

「ああ、わかったけど無理はするなよ。」

つとだったので俺はコレットのところに向かつた。

（第77章終

り）

VS魔界人 その2

俺はコレットがいるところに急いで走った。

そして魔界人とコレットの所に着いた俺は

「コレット大丈夫か？」

俺が言ったら魔界人は

「お前誰だ！普通の人間が俺たちの話の邪魔をするな」と言っただので俺は

「コレットここは俺に任しといて」

俺が言ったら

「え・・・でも・・・山さんが危険が・・・」

コレットが言っただので

「大丈夫。すぐ終わるから」

俺が言っただけは呪文で

「俺から半径3m以内にいる人全員を実戦室にテレポート！」

俺が呪文を唱え俺と魔界人5人は実戦室に移動した。

それを見たコレットは

「山さん・・・」

心配そうに言っただので金崎と夏季坂がコレットに近づき

「大丈夫だよ。山本ならね」

金崎が言っただ。そして俺と魔界人は実戦室に移動され

「お前は何者だ！」

魔界人は切れ出したので

「俺の名前は山本連暮っと言う。お前たちはコレットに

何をしようと考えてたのか。」

俺が聞いてみたので1人の男が

「お前には教えるか！」

威張ってたので

「そっかーじゃあお前らはここから逃がすことはできないな」

俺が言つて魔界人が

「はあ？お前が俺たち5人に勝てると思うのか？」
そう言ったので

「勝てる勝てないより俺はお前らに勝たないといけないからの
本気で行かせてもらう。」

俺はラファエルさんからもらった魔力制御リングを外して
今まで見えなかった白黒の羽を出して、それを見た魔界人は

「お・・・お前・・・まさか・・・天魔人か」

驚いた顔をしてたから

「ああ、そうだ。俺は天魔人。だから俺はお前らをコレットに
何をしようとしたのか聞きたいが・・・走にもいかなかったな
だから俺はお前ら全員を相手してやる」

俺はそう言った。

「たかが・・・天魔人1人の相手で俺たちが負けることはねえ・・・
俺たちは天魔人でもエリートクラスだからな。」

そうだったので

「そっかゝじゃあいい相手になるな」

俺はそう言つて魔力を練つて魔界人に向かった。
（第78章終わり）

VS魔界人 その3

さて・・・問題は俺1人相手は魔界人5人しかも魔力は俺より上が何人かおるが・・・どうするか・・・俺はそう思い。まず・・・魔力が低い魔界人から狙って行つた。走りながら魔力を高め1人に

「弾空波動拳」

俺は1人の腹に拳をぶつけて1人を吹っ飛ばした。そして1人がダウンをしたのであつた。それを見て「貴様〜！」

男たちは切れ出したので1人の男が魔力が高まり「ダークサンダー！」

呪文を唱え俺は少しかすつたけど大きなダメージでは無かつた。しかし・・・

「おらおらどうしたどうした〜」

4人はどんどん魔力を高め

「ダークサンダー！」

「ダークウインド！」

「ダークブリザード！」

「ダークバースト！」

4人が合体攻撃を仕掛けて逃げる事ができなく「つち・・・マジックシールド！」

俺は魔法盾を使つたけど威力に負け大ダメージを食らつた。ただどこで倒れるわけにもいかずに少し離れながら呪文を唱え

「メテオバースト！」

俺は隕石を出して男たちに攻撃をした。2人に直撃して気絶をしたが・・・2人は回避をしたのであつた。だけど・・・メテオバーストを使つた俺はほとんどの魔力を

使い切りやばいと思い始めたけどまだ行けると思い

近距離攻撃を仕掛けた。だけど魔力をほとんど使い切り

相手に買わされることが多くなり

「つく・・・やっぱりだめか・・・だけどこれで・・・」

俺は1回止め、魔力を高めた。そうこれで最後の一発にしようと思い
「被空残弾空拳！」

俺は一瞬で1人の魔界人に近づき拳に魔力をためてそれを相手に
ぶつけ1人の魔界人は吹っ飛び気絶をした。けどもう1人いて
俺はもう魔力を使いきった。

「お真21人で俺たち5人に相手によく頑張ったな。だけど」

もうお前は魔力を尽きた。お前を魔王様のところに連れていく」

1人の魔界人は俺のところに向かい俺をつかもうとしたとき

「お前山本様をどこに連れ出そうとしているのか？あん？」

俺はその声を聞いて倒れてしまった。その後聞いた話では

俺が倒れる前にラファエルさんが来て魔界人5人は天界の

牢屋に入れられ、ラファエルさんから魔界の情報を聞いている

らしいが・・・俺は魔力を使い果たししかも無理に魔法を使っただけ

2日間起きられなかったそうだ。

（第79章終わり）

魔界人戦闘後

「う．．．ここは．．？俺の部屋？」

俺はコレットを助けるために俺は魔界人5人と

戦いを挑んだ。だが．．3人目で魔力をかなり

使い果たしてしまい．．4人目で全魔力を振り絞って

4人まで倒したのはいいが．．5人目のときに自分は

魔力切れで何にもできなく．．倒れてしまった。

俺が起きたときには自分の家だとすぐに分かった。

そして俺は起きるときに．．

「山さん大丈夫ですか？」

コレットが俺に声をかけてくれて

「コレットお前は無事なのか？」

俺はコレットに質問をして

「私なら大丈夫ですが．．山さん．．もしかして．．」

コレットが何か言いたそうだったのでコレットの

隣にいるラファエルさんが

「そうだ。お前が見えると思うが山本様は天魔人だ。」

そう答えた。それを聞いてた俺は

「すまん。コレット俺は誰にも俺が天魔人のことを

秘密にしてくれつと俺から頼んだ。」

そう、俺は最初にリディアさんに気付かれてしまい

その後リディアさんがラファエルさんに伝えてラファエルさんも

秘密にしてくれると言ってくれた。しかし途中で金崎も

気付かれてしまった。いや、正直に言うとはれてしまったと

言ってもいい、だけど金崎も俺のことを秘密にしてくれると

約束してくれた。しかし．．今回はそうもいかない。なぜなら

コレットが5人の魔界人と接触したから．．．ばれるのを

覚悟してまで守らないといけない俺は．．．

「山本様はコレットの護衛を頼んだのだ。だからお前には
気付かれずにしてたからの。山本様には悪くない。」
ラファエルさんは言ってくれた。今日はそういうことで
みんな帰ったけども夏季坂とコレットは今度改めて自分の
正体について話そうかと思っている。 （第80章終わり）

俺の決意 その1

俺は魔界人の対戦後魔力を使いすぎたせいで

あまり体が動けなく3日間学校を休むことになった

家でのんびりしていたら

「山本〱いるか？」

人の声がしたので

「はいはい〱今開けます」

俺はドアを開けたら金崎がいて

「よ。体は大丈夫か？」

金崎が心配してくれたので

「ああ、だいぶ良くなったよ。心配掛けてすまん。

まあ、ここで話すのもなんだし家に入ってくれ」

俺は金崎を家に入れた。そして金崎は周りを見ていて

「とうとうばれてしまったな・・・」

金崎が残念そうにしていたので

「まあ・・・あの状態は仕方ないよ。金崎あときは

ありがとうな。だけど大丈夫だったか？質問攻めなど

食らってないか？」

俺は金崎に質問をしたら

「ああ・・・2人ともとことん質問されたよ・・・

だけどコレットはラファエルさんだっけ？あの方が

教えてくれたらしく夏季坂は俺から事情を話して

納得したそうだ。」

金崎が言ったら

「そうか・・・ありがとう。すまん」

俺が言った。それを聞いて

「構わんさ。だけど山本これからどうするつもりなんだ？」

金崎が言ったので

「前にも話したように魔界人はもうコレットは狙わないと思う
だけど・・元々原因はうちだから・・だから・・」

俺は言おうとしたら

「だからお前は・・おれたちの前からいなくなるのか？」

金崎が言ったので・・俺は金崎に俺のこれからの

ことを伝えた。

（第81章終わり）

俺の決意 その2

「ああ、俺はここから離れると思う。」

俺は金崎に言った。それを聞いて

「やつぱりか・・だけど・・俺は山本

お前がいなくなると全員が悲しくなるぞ・・

それでもいいのか？」

金崎が言ったので

「ああ、それは分かっている。だけど、もし仮に

俺がここにまだいたらまた魔界人が現れても

おかしくない。前は魔界人のエリート集団だったらしく

俺もぎりぎりで負けた。けどな天魔人は元々

存在してはいけないんだ。俺がいたらお前からまで

迷惑かける。俺はそれはいやだ。だから俺は

ここから去るつもりだ。けど勝手には消えない

前に1回したことがあつてな。糺見や加奈子との

間に傷をつけてしまった。だから今回は俺は

みんなに伝えてここから去ろうと思う。手伝ってくれるか？」

俺が言ったら

「ああ、それは大丈夫なんだが・・前にも言ったが

魔界人と決着がつくのは来年の卒業式ごろだったか？」

金崎がちよつとした質問をしたので

「ああ、まだわからないがそのころ攻めてくるつという

情報は流れてるみたいだ。だから俺はそれを阻止しないと

いけない。まあ、そのときに俺は天魔人つという存在は

消えるかもしれないがな。」

俺が答えたら

「そっか。じゃあ俺はお前と約束をしたい。」

金崎が真剣な顔で言ったので

「分かった。俺は金崎が決めた約束を守ろう。」

俺が言った。それを聞いて

「さんきゅな。まあ2つあるけどいいか？」

金崎が言ったので

「大丈夫」

俺が言った。そして・

「じゃあまず1つ目は山本絶対にまた俺たちの前に現わせ。俺もそうだけど、多分みんなもお前がいなくなったらやっぱり楽しみが無くなる。だから・お前は無事に帰って俺たちの前に顔を出してくれ・。これが1つ目だ。2つ目はそうだな・。時々でいいからメールを送ってくれないか？俺もお前とないと悲しむ。だけどお前が忙しくないならメールでもいいから送ってくれないか？頼む」

金崎が言ったので

「1つ目は分かりました。無事で帰ってきますので・。その時はみんながいるときに現れますね。2つ目はそうですね・。俺携帯電話持ってないからね・。手紙・。？んー多分俺は天界とかそっち方面に行くから手紙遅れるのかな？まあ・。それも後から考えるとしてこの2つは約束しますよ。」

俺が言って金崎は

「さんきゅ。お前も元気でがんばれよ！」

って言って金崎は外を出た。俺は数日後にみんなに俺の事実をすべて話そうかと思った。
(第82章終わり)

別れ．．．．だ

数日後俺はみんなを屋上に呼んだ

「いきなり集まってもらってすまん。」

俺はみんなにまず謝った。

「山君からお話って久しぶり」

眞魅先輩が言った。みんなも眞魅先輩にうんうんとうなずいてたのでまず話す前に金崎に

「金崎これで一応．．．」

俺が言いだったので

「ああ、さんきゅーな山本」

金崎が言って俺はみんなの周りに結界をはった。それを見て

「山さんこれは何なの？」

コレットがいち早く俺に質問をした。

「こうでもしないとコレットやリオに止められるかもしれないから強力な結界をはった。コレット、リオ決して結界を破壊しようとするなよ。大丈夫後で結界は消えるから。」

俺は言って一旦呼吸をして

「みんなに話したいのは俺はここから離れることにしたから

みんなに挨拶を．．．」

俺が言ったら

「山さんまたいなくなるの．．いやだよ．．」

糰見が泣きながら俺に言った。それを聞いて

「すまん。どうしても俺はここから離れないといけなくなった。」

俺は糰見に言った。それを聞いて

「何で．．何で．．山ちゃんはまだ私たちの前からいなくなるのよ．．」

加奈子が俺に言って俺は．．

「加奈子本当にすまん．．だけどな．．俺がここにいたらまた

お前らの迷惑にも掛かる。今はまだ安心だけど今後俺がもしこの学校にいたら加奈子達いや・・・この学校のみんなが被害にあうかもしれない。だから・・・俺は・・・その前にここを離れることに

決心をした。だから俺はみんなにお礼を言いたい。金崎と夏季坂。男友達で最初の仲間だ。今までありがとうな。加奈子、糰見。お前たちは

小さい頃から俺に優しくしてくれてありがとう。でも・・・勝手にいなくなつて

すまんだつた。しかし・・・この学校に来てまた会えてよかったよ。高原さん

告白されたのはびっくりしたけど断つてごめんね・・・だけど俺は誰とも

付き合う資格はないんだ。だけどそれでもいいつと云つてくれてちよつと

うれしかったかな。そして・・・眞魅先輩今まで俺のお世話をありがとう

ございました。眞魅先輩がいなかったら俺は前に進めなかった。だけど・・・

もう一緒の学校には行けないと思う。ごめんな・・・」

俺は言ってみんなの前で自分の正体を明かした。（第83章終わり）

新たな旅たち

俺は魔力を少し抑えたものを開放してみんなに見せた。それを見てみんな驚いたのであった。

「そう・俺は天界人と魔界人の血を持った。」

天魔人っていったらリオとコレットは分かるかな？

前にコレットお前が連れ去られそうだった原因は

俺にあつたんだ・元々は俺が天界に行ったときに

魔法を使わなければ、コレットお前に被害が起こらなかった

だから・俺のせいで・被害にあつた・だけで

もう魔界人には知られてしまった。だから・いつ

この学校に攻められてもおかしくない状態だ。

だから俺はここから去ります。」

俺は言ったら、ある声がして

「いえ・山様は天界のときに私を助けてくれましたね。」

リディアさんが俺に言った。それを聞いて

「リディアさん・ですが・」

俺が言ったら、

「いえ・私は元々魔力がなく危ないところを

助けてもらいましたので・その原因は私にも

あります・本当にすいませんでした・」

リディアさんは頭を下げた。そして

「ラファエル様が山本様にこれを・」

リディアさんが俺にメモ書きを渡して俺はそれを見て

「リディアさんありがとう・」

俺がリディアさんにお礼を言つて

「いえ・私はラファエル様に従っただけですから」

リディアさんが言った。そして

「さて・そろそろお別れの時間かな？みんな今まで

ありがとう……。俺は……。今までの思い出を大切にするよ
俺がいなくても、元気でな。じゃあ！また！」

俺はメモに書いてあった場所に飛んだ。そして俺が言った後
結界は消滅して……。金崎と夏季坂は

「山本。頑張れよ」

と言った。だが……。女性陣は俺がいなくなった後で
かなり泣いてたそうだった。（第84章終わり）

新たなる挑戦

俺はみんなの前から去りある場所の前にいた。
そう・・・父、母、おばあちゃんの墓であった。

そして・・・俺はお墓の前に

「んじゃ行つてきますね」

俺は言つてラファエルさんから教えてもらった
場所に行った。そこは遺跡っぽいところだった。

俺は中に入つて奥のところに行つたら

「お待ちしてました。山本様」

俺の前にいたのは小さな妖精だった。

「あなたは・・・？」

俺が質問をしたら

「申し訳ない。私はここの管理人？と言つべきかな？

まあ、ここは私しかいないですがね・・・

えーと私の名前はミーフアーと呼んでください。

あなたは今から魔界人が攻めてくる前に結界を

3人でやるんでしょう？マスターは・・・どんだけ

無茶をするのかな・・・。普通は10人いないと

安全に結界ができないつというのに・・・」

ミーフアさんは名前を言つてからぶつぶつと

言つてから俺に

「まあ・・・マスターから言われたようだけど

山本様はここでぎりぎりの時間まで私と

修行をしてもらいます。いいですか？」

ミーフアさんは俺に言つたら

「はい！そのつもりで来ました。ですが・・・

マスターって・・・？」

俺は質問をしたら

「ああ・・・すまんすまん俺のマスターは
山本様も知ってると思うけどラファエル様だよ。
あの方は俺が出会う前はんーそうだな・・・
山本様と同じ？ぐらいだったかな？魔力がね
だけど俺は元々契約つというのが嫌いだな
俺に勝ったら契約してやるよ。つと言った。
結局ラファエル様は100回以上まけ1000回目に
やっと勝てたのかな？まあ、勝ったときには
今のラファエル様は現在の魔力に達してて
しかも王様になるとはね・・・俺もびつくり
帰っちゃったよ。すごいよな・・・だから
今回はあいつからお願いされて俺も天魔人と
修行ができるから楽しみだわ。よろしくな。」
ミーフアさんが言っただけ俺はこれからここで修行を
することになった。

訓練・

「はぁ．．．はぁ．．．」

俺はミーファさんとの特訓をしていた。

「さすが．．天魔人ですね．．ラファエル様と

最初に出会ったときやりあったのですが．．

それ以上の魔力．．しかも．．私も本気をださないと

いけなかったですよ．．」

ミーファさんは俺にほめてくれた。だが．．

「ですが．．やっぱり山本様は魔力の使い過ぎが激しいです

いくら魔力を上げていても．．魔力の消費がかかる魔法を

連続に出すとすぐに魔力切れで何にもできなくなります。

しかも．．メテオストライクは戦ってみて魔力の消費が

激しくしかも唱えるにも時間がかかりすぎですね。だから

山本様メテオストライクは封印しときませんか？

私から見て今後エリート軍団が来てもよけられるだけです。

だから今後の課題は早くそして威力がある魔法を身につけること

そして．．戦いながら結界をはるつという修行もしていきましょ

う」

ミーファさんは笑顔で言った。

「ありがとうございます。ミーファさん頑張ります。」

俺が言うともミーファさんは

「いえいえ、多分私の予想ですが．．あなたはこの修行を

頑張ればラファエル様と．．いやそれ以上の魔力を手

入れることができると思います。ですので．．頑張ってください。

」

ミーファさんは言った。

「では今日は修行は終わりましたよ。一応これだけは伝えときます。

この修行は毎日やると山本様の体力と魔力がもちません。

ですので2日に1回をやるペースでやります。あいてる日は山本様の自由とします。休んでもいいし、運動などしても構いませんがなるべく・魔力を使わないでください。」

ミーファさんが言った。それを聞いて

「分かりました。ですが・これは・魔力を使わないといけないのですが」

俺がミーファさんに見せたら

「ああ、通信機ですか〜これならそんなに魔力の消費も激しくないから」

大丈夫ですよ。だけど使い過ぎないようにね〜」

ミーファさんが言っただけで解散となった。そして少し休んで俺は金崎に連絡することになった。 (第86章終わり)

休憩中のこと その1

俺は金崎に通信機を使った。

「金崎出てくれるかな？」

俺は考えていて少したったら

「よゝ山本元気が？」

神埼が返事をしてくれて

「ああ、元気さいきなりかけてすまんだっ たな」

俺が言うつと笑いながら

「いいさいいさ、だって俺が無理に山本に頼んだしな
気にすることはないさ」

金崎が気楽にかけてきて

「そつかゝてか・今こつちの時間はいつだ？」

俺が金崎に質問をすると

「んゝとね夜中2時」

はつきり答えた金崎に

「え・・・すまん・・・」

俺が謝ったら

「気にするなつて言つたよ？まあゝ大体2時まで俺は起きてるさ
しかも山本から連絡来るときに寝てたら申し訳ない。

忙しいのに・まあ俺の場合は明日寝ればいいしゝあははゝ」

金崎の笑い声が聞こえて

「そつか・なるべく次からは早めに電話するよ。」

俺が言ったら

「まあゝ山本が忙しくなければね。しかし、今大丈夫なのか？
そつちは・激しい特訓じゃないのか？」

金崎が言つたので

「ああ、大変だけど何とかなってるよ。俺をもつと特訓を
してくれる人は結構厳しいけど元々優しい方だから

なんとかね・・・」

俺は反応をしたんだけど金崎は元気だけど他の人が気になったので俺は振り切って金崎に質問をした。

（第87章終わり）

休憩中のこと その2

「ところで・・・他のやつは・・・どうしてる？」

俺が言いにくそうに金崎に質問をした。

「ああ、言ってもい行けど山本落ち込むなよ。」

金崎が俺に言ったので

「ああ、分かってる俺が原因だから・・・やっぱり

心配だ・・・みんなに裏切ったから」

俺はみんなを守るために俺はここに逃げたことには
変わりがなかった。しかし

「じゃあ言うぞ。まず、やっぱり今でも落ち込みが
激しいのはコレットさん、糰見さん、加奈子さんの3人だ。

山本お前が昔糰見と加奈子との関係を眞魅先輩に
聞いたから気持ちが悪くなるけどまたいなくなると
すごく悲しんでいた。今でもな。そして夏季坂は
俺の説明で俺と夏季坂はお前を信じるって言った。

だからお前が帰って来た時はみんなに恨まれても
俺と夏季坂はお前を迎えてやる。まあ、そんな

心配はしないだろう。だって俺と夏季坂以外にも
リオさん、眞魅先輩、高原さんは山本を待ってる

言ってた。山本がいなくなったら後リディアさんと
俺がみんなに説明をした。もちろん結界のことは

秘密としてな。それを聞いてみんなはやっぱり

驚いたけど、高原さんが最初に私は山本さんが
帰ってくるまで待ってますので。って言ったそう

それを聞いて眞魅先輩とリオさんも待ってるよ。

と言った。だからお前も全部が終わった時、

絶対にみんなの前に姿を出せよ。俺はお前と

友達になって本当にうれしいんだ。いつでもいいから

この通信機でまた連絡しろよ。今度は他の人の声も

聞かせてやる。何か伝えたいことがあったら

遠慮なく言ってくれ。」

金崎は俺に言ってくれて

「ありがとう金崎。何かあったらまた連絡する」

俺は言って通信機をしまった。そして俺はミーファさんの所に戻って行った。（第88章終わり）

そろそろ・・・

俺は金崎からもらった勇気でミーファさんとの
魔力&実戦などで自分のミスを埋めていた。

そして・・・特訓してから三か月

「山本様大分よくなりましたね」

ミーファさんがとても喜んでいた。

「ありがとうございます。指導がよかったもので」

そう、指導つというかただ単にお互いに全力で

戦ってただけなんだけどね・・・最初はミーファさんが
全体の10%しか出してなくいつも自分がぼろぼろで
訓練が終わっていたが、段々とミーファさんの本気を
出してきて今ではほぼ100%の力でぶつかり

だけど・・・未だに勝ってはいない。

「しかし・・・ラファエル様るときもこんな感じで

やってたな」

ミーファさんが言って

「そうなんですか・・・。ラファエルさんも同じ特訓を？」

俺が質問をすると

「特訓っていうかラファエル様は俺と契約したいっと言う

情熱で頑張ってたからな」特訓つと言うか争いに近いかな？

だけど結局あいつは俺とやって1回ぐらいしか勝ってなかったよ。

山本様もこの調子でいけばいつか俺に勝てるよ。だけど

俺も手加減はしない。今度から本気で行くから頑張ってくれよ。」

ミーファさんが言って

「はい！ありがとうございます。これからよろしくお願いします。」

俺が言ったらミーファさんが

「ん」これからは無理かな・・・だって後1カ月でこの修行は終わ

るから」

突然ミーフアさんが言って

「え．．．どういう意味ですか？」

俺は質問をして

「えーとねー応俺はラファエルから4ヶ月間だけ頼むつと言われたんだ

多分その後3人で結界の特訓に入るからそれまでは俺が山本様に鍛えるつと言うことだ。」

突然に言われ俺はびっくりしたのであった。 （第89章終わり）

これから課題

簡単にまとめれば魔界人が攻めてくるまでに後

1年半（18か月）それまでにまず4カ月は自分での

基礎を慣れるための修行。そして4か月はその基礎を

鍛えて実戦までいけることつまり今の魔力では

結界を作るときで魔力を尽きるからだ。それを

補うためにミーファさんと一緒に特訓をして

魔力と精神力そして自分の基礎能力を高めることが

目標そして・それができたら次は3人での結界を

作らなくてはいけない。その時にコンビネーションが

ないとうまく結界が作れない。もし仮にできたとしても

すぐに壊れるだろう。だから残りの時間は結界を作ること

メインとしてやるつというのを俺はミーファさんが言うてから

初めて知ったのであった。

「だから・まあ俺は山本様と一緒にいることは後1カ月

それまでは俺がお前をラファエル様以上に仕上げてやる

だからお前も頑張つて俺に勝てよ。だが、俺もそう簡単に

負けられないからね。いいね？」

ミーファさんが言うて

「分かりました。後1カ月よろしくお願いします。」

俺は頭を下げた。そう、後1カ月俺は終わるまでに

自分を鍛えないといけない。そしてみんなを安全に

生活できるようにしていきたい。だから・俺は

辛いときでもがんばるしかない。

「そういえば・山本様は契約とかはしないのか？」

いきなりミーファさんが言うて

「そうですね、元々自分は1人だったので・

精霊などの契約は向いてないと思いますけど・」

俺が言ったらミーファさんが

「そっか。まあもしね、山本様が精霊とか契約したいとか

俺と戦いたいとかあったら遠慮なく言ってくれ。

まあ、後1カ月あるけど一応先に言っとく。」

ミーファさんが言って、

「ありがとうございます。」

俺は言った。ミーファさんが

「では、今日は休め明日から忙しいからね」

ミーファさんが言って、自分の部屋に戻った。

（第90章終わり）

4か月間終了

「ふう〜よく頑張ったな山本」

ミーファさんがかなり喜んでいた。

「ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。それを見て

「いやいや、気にするな。俺もかなり満足をした。

こんなに楽しかったのはラファエルが来た時以来

そうだな・・もう10年は何にもしなかったからの

うちにとつてはすごく楽しい思いでさ〜。

しかし〜まさか・・山本に2回負けるとわ・・

いやいや、天魔人の能力より俺は山本がすごい

行きよいで成長したのがびつくりしたさ〜

まあ、俺の修行はこれで終わりだがこれからが

大変だぞ〜あと約半年結界の修行だ。

今までみたいに自分の魔力でぶつけることはない

次の修行は1人では何にもできない3人での

コンビネーションが必要だ。しかも精神を使うことが

多いからがんばれよ。だけど、暇なときにはまた

修行手伝うから気楽にこい。」

ミーファさんが言ったので

「はい！ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。それを見て

「元気がいいな〜だけど今日はもう休め。元気がいいのは

いいのだが・・これから過酷が多いから早めに休んで

明日への体力を温存するだね〜。んじゃ俺も眠りに

着くかな。多分俺は明日から魔力を回復するために

起きないから俺と会うのは今日で最後だ。だけど

また会いに行きたかったら来てくれな。んじゃ

「元気でな！山本」

ミーファさんが言って自分の部屋に戻った。明日から俺はラファエルさんのところに一旦戻つて結界の修行に励むのであった。
(第91章終わり)

最終訓練前に・・ その1

俺は朝起きてミーファさんの所に行った。
しかし・・ミーファさんは眠っていた。

自分から相手の魔力を見れるようになり
修行する前は魔力は膨大だったが・・

今となれば魔力が小さく感じる。それは・・

最後の特訓でお互いに全力でぶつかった。

お互いに魔力を全力でぶつかり俺はぎりぎりに

勝ったが・・さすがに・・昨日はしんどかったので

早く眠った。その後一晩寝たら俺は魔力をほとんど

回復していた。しかしミーファさんは精霊なのに

魔力回復するのに時間がかかると言っていた。

しかも・・普通は魔力を使ったら全回復するのは

2日間にかかるらしい。しかし・・ある特定の人

は5、6時間で回復すると聞いた。俺もその1人だった。

天魔人だけど元々はその親が魔力が高いほど回復量と

魔力量の差が普通の人と魔界人とは大きく違うらしい。

今俺は訓練後すぐに寝たけどそれでも6時間。もう俺は

回復をしていた。だけどミーファさんは寝ていたから

俺は準備をしてミーファさんに向かった

「今までありがとうございました！ミーファさんの

おかげで俺は成長できました。またいつかきますので

その時はよろしく願います。」

俺は言つてミーファさんの前から去った。俺は次の特訓

そして・・最後。そう、3人での結界を作ることだった。

元々それをするために俺は第1段階から8か月間魔力を

上げたり、戦闘のときの対応などの訓練をしていた。

俺はラファエルさんの所に向かった。

（第92章終わり）

最終訓練前に・・・その2

俺はミーファさんをお別れ後トレーニング室に行った。

そして・・・少し待っていたら

「山本様お疲れ様でした。」

ラファエルさんとリディアさんが来て

「ありがとうございます。今日からまたお世話になります。」

俺は頭を下げた。それを聞くと

「ああ、こちらこそよろしく願います。ですが・・・」

ラファエルさんが少し困った顔をしてたので

「どうしたのですか？」

俺はラファエルさんに質問をした。

「ん〜とね・・・後から山本様に会いたいっていう人がいるのですが」

ラファエルさんが言ったので

「自分にですか？分かりました。」

俺は言った。

「まあ〜あったことがない人ではないからね・・・あはは」

ラファエルさんが言った。

「それはどういう意味ですか・・・？」

俺は疑問に思ったので聞いてみたら

「まあ・・・会えば分かるよ・・・まあ・・・後からの楽しみかな

一応今後の課題を言うね。」

ラファエルさんが言ったので

「はい！お願いします」

俺は言った。それを聞いて

「じゃあ今後の課題。簡単なことは私とリディアと山本様

3人で結界を作ります。それは大丈夫なんですが・・・

もしかしたらその結界を作る間に敵が襲いかかる可能性も

低くはないなので結界を作りながら戦う訓練をします。

しかし結界を作るのにも精神と魔力がいります。そして戦うときも魔力を使うのですが・・リディアは元々魔力が低いので私と山本様でその特訓をします。結界も1重だけじゃいつ壊れるかわからないので壊れないためにも結界を強化の訓練もしますので・・大変ですが・・頑張っていきましょう」

ラファエルさんが言って

「はい！よろしく願います。」

俺は言った。そして後から俺に会いたい人との出会いが待っていたのであった。

（第93章終わり）

最終訓練前に・・・その3

「一応説明は以上だけど・・・できますか？山本様」

ラファエルさんが言った。

「はい！頑張ります！」

俺が言ったら

「ありがたい・・・今日からずっとというわけにはいかないが

明日から本格的に行くぞ。しかし・・・ミーファから聞いてたけど
ずいぶん魔力が上がっていつか私とたたかってほしい。まあ

今はそういうことではなく山本様に会いたいっと言う人と

話したらいい。」

ラファエルさんに聞いた俺は

「分かりました。ですが・・・誰でしょうか？」

俺は名前を聞いてなかったので

「ああ、まああったらわかるさ。もう話が終わったから入ってどう
ぞ。」

ラファエルさんが言ったらドアから出てきたのが

「よ。山本久しぶり。」

金崎がいてその後リオ、高原さん、真魅先輩が入ってきて

「これは言いたい・・・。」

俺は疑問に思ってた。そうしたら

「山本すまん・・・。お前が言った後にラファエルさんに

すべてのことを話してもらい俺はそのあとにこっそりと

ラファエルさんに通信機のことを聞いて山本とラファエルさんとの

通信機でいろいろ情報を交換してたわけ、だけど・・・」

金崎がちよっと苦笑して

「それはね。私が4日前にラファエルさんと金崎さんが2人で

話してるところを見つけちよっと追いつめてみたの。」

ノリノリで真魅先輩が言って

「なるほど・・・それは仕方ない・・・すいません・・・ラファエルさん
本当にすいません・・・」

俺が謝ったら

「いえ・・・大丈夫ですよ。皆さんも山本様に心配だったし・・・
さすがにコレットが来たら・・・止められるでしょう・・・」

それだけは守ってくれるって言ってくれましたし・・・

では・・・明日からお願いますね。では。」

ラファエルさんとリディアさんは頭を下げてトレーニング室から

出て俺はこの後みんなと話していた。（第94章終わり）

金崎、真魅先輩の思い

ラファエルさんリディアさんが部屋を出たとき

「本当にすまん・山本」

金崎が言って

「気にしないよ。だけど・他の人も今日会うこと知っているよね？」

そう・今日はいない夏季坂、加奈子、糰見の3人がいないことについて聞いてみた。

「まあ・ちょっとね・さすがに俺は真魅先輩と元々2人で行くつもりだったんだ・。行く時間を聞かれてしまって・行けなかったらね・後から何をされるか・あはは・。」

金崎が言ってそれを聞いて

「それはひどい。誰だって山君を会いたがつてるじゃんそれを・こそこそして。まあ私も会いたかったしいいだけどさすがに糰見と加奈子、コレットの3人に言うとな・山君の修行を止めるかもしれない・。」

山君がいなくなった後みんなかなり泣いたけど

私は山君が必ず帰ってくると思い前向きに頑張っていたそれは後から問い詰めた金崎君から聞いて、しかも私より先だったのは高原さんだよ。一応私が卒業した後ずーと隣にいたからいなくなるのは気付いてたんだってだけどいつか戻ってくるって信じてたから泣いたけどすぐに立ち直ってたよ。すごいと思うよ・リオも私の後にいつか帰ってくるって思わずーと山君を待ってたから私が2人だけに伝えた。」

真魅先輩が言って

「まあ、夏季坂にも言いたかったんだが・あいつに

話すとね・・糺見達にも聞こえてしまう・・だつて
同じクラスだから・・。だから今回は伝えてない。」

金崎が言つて

「そうか・・。助かったさんきゅ俺も金崎達に

会えてうれしかったけど・・今こんな格好ですまない。」

俺がそういうと

「気にしないよ？あ、それと山君店長に辞めるつと言ったらしいけど
山君がいつか帰ってくるかもしれないから店長からまた戻ってき
たら

いつでも戻つてこい！つと言つてたよ。」

眞魅先輩が言つて

「ありがとうございます。」

俺が言つてリオと高原さんに話しかけたのであつた。 （第95章
終わり）

リオ、高原の思い

金崎、眞魅先輩からいろいろ話を聞いたところで

俺はリオ、高原さんに声をかけた

「2人ともありがとうね・・・」

俺は言ったらリオが

「私は山さんのことを信じてました。しかし・・・

あのときまで私は山さんが天魔人っていうことを

初めて知りました・・・。それは・・・私が気づいて

なかったのがちよつと悔しいかな・・・。ですが・・・

前に私とコレットが困つてるときに山さんが助けて

もらい本当にうれしかった。いきなりの別れでしたが

私は山さんを信じてました。だから・・・今あえて本当に

うれしかったよ・・・。ラファエル様に聞きましたが

山さんこれから大変な修行に入るでしょ？私は

山さんのお役には立てませんが・・・、ですが・・・

山さん無理しないでください・・・。私も他のみなさんも

心配しています。ですから・・・元気な姿で帰ってきてください。

私はいつでも山さんのことを待ってますから」

リオは笑って俺に言った。

「ありがとう。リオ。いつか俺も元気な姿で帰ってくるよ

それまでに待っていてくれないかな？」

俺が言ったら笑顔で

「うん！もちろん！まあ、多分コレット達に殴られるかもよ？

すぐくつらかったから・・・覚悟してね」

リオが言ったら

「ああ、分かつてるよ・・・」

俺は苦笑しながら高原さんに話しかけた。

「高原さんもうありがとうね。」

俺が言ったら

「いいえ、私は山本さんにすぐ会いたかったです。

金崎さんや眞魅先輩が声をかけてもらったので

私はすぐ会いたかった。山本さんと突然のお別れは

辛かった。ですが・・私もいろいろ山本さんを見て

いつか戻ってくると思ってました。だから・・今会えて

本当にうれしく思います。リオさんと一緒にこれから

山本さんが無理をなされると聞きました。ですが・・

私は本当は止めたい・・ですが・・私は元気な山本さんを

また見たいと思います。ですから・・無理だけはしないように

無事に帰ってきてくださいね・・。」

高原さんが俺に言ってくれたので

「ありがとう。高原さん。」

俺は2人にも迷惑かけたなあ・・と思った。 (第96章終わり)

4人の思い後

俺は4人の話を聞いてすこしみんなの顔が見れて本当によかったと思う。そして・

「そういえば・山君これから修行なの？」

眞魅先輩が俺に質問をしたので

「いや・ラファエルさんが今日は休みで

明日から修行だと言ってたね。」

俺が言ったら眞魅先輩が企みがあり

「じゃあさ〜今日はこの後暇だね？山君は

泊る所決まってるの？」

眞魅先輩が聞いてきたら

「ん〜・泊まる場所は・ないから

トレーニング室で寝るかなっと思うけど」

俺は言ったらそれを聞いて

「じゃあさ〜今日はリオの家泊まらない？」

リオがいきなり言いだしそれを聞いて

「そりゃいいな〜」

「お〜リオちゃんいい！」

「私も今日は山君さんと居たいです・・。」

3人が言っただけど・・リオは

「もちろんみんな泊って〜大歓迎だよ〜」

リオはノリノリだったので

「俺の拒否権は？」

俺がいつも通りに聞いてみると

「〜・・・駄目です！」「〜・・・」

4人が同時に言われたので俺はそのままリオの家に向かった。リオは俺のことを気遣ってくれて今回は天界にあるリオの家にお世話になった。その後俺と金崎は

リオの部屋に待たされ後からリオ、真魅先輩、高原さんが
夕ご飯を作ってくれみんなで食べみんなが寝るまで大部屋で
いろいろ話したのであった。その次の日真魅先輩達は

学校があるので俺と別れ俺はトレーニング室に向かった。(第97
章終わり)

結界・・・

「では、今からまずは結界の訓練をします。」

ラファエルさんが言っただけでラファエルさんそしてリディアさんの3人で結界を作る訓練を始めた。

元々1人で結界を作るのだが・・・今回はかりでは

1人ではすぐに壊されてしまうらしく強力な魔力が

3人以上じゃないと今回の目的が達成できないらしい。

しかもそれを完成できるのは早くて3カ月。だけど

俺は結界など2度しかしてないので3人でのコンビネーションがいいか、悪いかは別として最低4カ月はかかる。その間に

魔力上げと結界を作る途中の戦闘などしていかないといけない。

俺にはそれができるだろうか・・・と今でも不安でもあった。

「では山本様まず今までの修行を見てみたいのであそこにあるリングを結界で囲ってください。」

ラファエルさんが言って

「はい、分かりました。」

俺は返事したらリングに向かって結界を作った。なるべくは大きめにしないでリングの大きさに合わせて結界を作った。

「うん。結界の大きさはいいでしょう。では」

ラファエルさんは結界で囲まれている、リングを手にとって

「うん。結界の強さ。これもよしとしましょう。」

ラファエルさんは満足そうにしていた。だけど・・・

「ですが・・・やっぱり結界を作る速度がちょっと遅いですね。

まあ、山本様はあまり経験がないから仕方ないでしょう。

今後の課題に入れますね。ですが・・・すぐになれるでしょう。

」

ラファエルさんが言って

「はい、分かりました。」

俺は返事をした。それを聞いて

「まあ、慣れっというものもあるしじゃありディア1回やってみて」
ラファエルさんが言ってるディアさんが

「はい、分かりました。」

と言って、俺の結界の周りにもう1つ結界を作り上げた。しかも
うちが作るのに10秒かかったのにリディアさんは5秒もかからな
かった。

その後うちはラファエルさんから重大なことを聞かされた。（第9
章終わり）

結界・・・（後書き）

お久しぶりです・・・この頃忙しく・・・
書けない日があったり・・・今思えば・・・
文章短すぎ・・・とか思う・・・。

さてさて・・・次はある人物が現れます。
多分知ってる名前かな？

新たな仲間？その1

「まあ、見ての通りリディアは戦闘型じゃなく援護型だから早いのは仕方ない。ですが・山本様も練習があれば早く作ることができますよ。」

ラファエルさんが言って俺は

「ありがとうございます。がんばります！」

俺は言ってラファエルさんが

「そうそう、今のうちら3人では辛いと思い助っ人を呼んだから。」

ラファエルさんが言って

「それは・・・？」

俺が質問をしたら2人の男女が現れラファエルさんが

「紹介をしよう。この2人は前にうちが王様をする前にお世話になった

魔法世界から来た。フラユンス・メディアさんと川崎 励さんだ。

」

ラファエルさんが紹介されたので2人は

「魔法世界から来ました。フラユンス・メディアと申します。

ラファエルさんから事情は聞きました。私でよければ

これからもよろしく願います。」

フラユンス・メディアさんは頭を下げて

「私は川崎 励と言います。フラユンス・メディアの妻です。

元々私も山本さんと同じ住人ですのでよろしく願います。」

2人は頭を下げた。それを聞いて

「自分の名前は山本連暮と申します。よろしく願います。」

俺は頭を下げた。それを見て

「山本さん硬くならないでいいですよ。私たちもあまり硬くならないほうが

楽ですし、それとあまり年齢が変わらないから普通に話しかけて

ね。」

川崎さんが言ってくれて

「ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。それを見て

「あ、一応山本様のことはラファエルさんにすべて話してもらいました。」

まあ、まだラファエルさんが知らないこともありますし、聞いたことが

あったら質問しますね。」

フラユンス・メディアさんが言って

「もう1つ忘れていました……。私のことは川崎と言わずに励と呼んでください。」

こっちのほうが気楽でいいので。」

川崎さんが言ったのでそれに付け加え

「じゃうちもフラユンス・メディアと言いにくいでしょう？だから呼びやすい名前で

いいよ。まあ励はユン君と今でもいいけどね。」

2人は結構話題が立っていたけどラファエルさんは俺に2人の過去を少し話してくれた。（第99章終わり）

新たな仲間？その2

「この2人は最初に私と会ったのはこの天界にある伝説の武器を取り返してくださいました。その時は私はまだ王様じゃなく2人には会ってません。2人は魔王クンドンを倒してくださいだった中での2人です。

まずユン王様は格闘魔法の使い手で励王女様は全世界での援護型での最強と呼ばれる方で

今回は2人をお願いを申し出たら手伝ってくださいると言ってくれました。」

ラファエルさんが言って励さんが

「ラファエルさん。私は王女様って呼ばれたくないよ。

私は今の暮らしがすごく幸せ。だってユン君に出会ってそして、最初のほうはユン君も天界を許さなかったけども最終的には魔法世界と天界を協力し合うつと言うことになりラファエルさんと仲良くなりました。しかも前は私たち魔法世界に大変な時天界の皆さまが私たち魔法世界を救ってくださいました。だから今度は私たち魔法世界の住人を代表として私とユン君がお手伝いします。もし・・2人ではきついのであれば護衛としてキトさんティオさんことりさんをお呼びしますが。今では私たちで何とかします。」

励さんが言ってフラユンスさんも

「そうですよ。うちは父から王様に変わっただけだけどいまだに王様っていう感じが持てない・・だから普通に接して構わないよ。うちも魔王クンドンを倒せたのは励のおかげでもあるし天界の方々も手伝ってくれた。だから俺たちは天界を守りたい。そして励が住んでいた世界も救いたい。だから俺たちは自分の意思で手伝う。それだけだ。あ、そうだ山本さんも天魔人だからつと言うわけじゃないけども

ラファエルさんが言ってたんだけど山本さんは格闘が主にメイン？」

フラユンスさんが言ったので

「はい、自分は元々魔法が嫌いで格闘でなるべく魔法を使わずにやっていきたいと思いましたが・・・今では・・・魔法がないと守れなく・・・」

俺は少し落ち込んでいたら

「そうか」だけどねうちも魔法は嫌いよ。魔法の使い方を間違えれば

人に傷つけてしまうからね。けどうちは励とあつて改めて魔法があつた

からこそ俺は格闘魔法になろうと思ってた。だから山本さんも格闘魔法で

いくならうちが教えてあげますよ？」

フラユンスさんが言ってくれたので

「はい！ありがとうございます。」

俺が言ったらラファエルさんが

「んーじゃあ1回やってみようか。」

いきなりお互いがびっくりするような言葉をラファエルさんが平気で言ったのであつた。（第100章終わり）

訓練中

ラファエルさんから助っ人として呼ばれた魔法世界から来た川崎さんとフラユンスさんが来てお互いに自己紹介をした。その後うちはラファエルさんリディアさんと一緒に3人での特訓を始め最初のほうは自分がリディアさんの足をひっぱってなかなか最初のほうは進まなく後から段々と3人のコントロールが行きまداولまうまう行けないけども大分よくなったらしい。しかし・・・これをもっと大きくそして作りながらの戦闘をしないといけないらしい。まあ、ラファエルさんからは「大分よくなりました。さすがです。これを維持しながら戦えるようにしていきましょう。」

言われたので俺は

「はい！分かりました！」

俺は言った。その後5時間ほどかかってようやく

ラファエルさんが自分の理想するような結果ができて満足したので

「じゃあ今日は終わりましたようか」

ラファエルさんが言って今日は解散をした。その後俺はトレーニング室でのんびりしてきたら

「あら、山本さんちよつと隣いいですか？」

川崎さんが言って

「ええ、いいですよ？」

俺は言った。それを聞いて

「ありがとう。山本さんは今回のこと早く終わりたい？」

いきなり突然に言われたので

「そうですね・・・早く終わりたいですね。川崎さん」

俺は言ったらちよつと不機嫌そうに

「励って呼んでゝまあ・・・いまだに・・・キトさんとテイオさんも

川崎様って言われるけど・・・励って呼んでほしい・・・」

川崎さんが言っただんで

「分かりました。励さん」

俺は言ったら笑顔で

「ありがとう。山本さんには謝らないといけないね。」

川崎さんが俺に真実を話してくれた。 (101章終わり)

過去話（真実編）

いきなり川崎さんから謝れたので

「どうしたのですか？突然」

俺はびつくりしたので川崎さんに聞いてみた。

「最初はね山本さんが天魔人っていうことを知らなかった場合ね本当はユン君が山本さんの代わりに結界を作ることになったのだけだね……。さっきのラファエルさんから聞いたと思うけど昔私は普通の女の子だったのよ。そして小さいころにユン君と出会って私たちはお互い好きだったんだけど……。8年後かなユン君が魔王クンドンにつかまって私はユン君を助けるために魔法世界に行って旅をしたの。いろいろなことが起きたけどその間にいろいろな人と出会い何とかユン君を助けたの。」

だけどね……。もうその時ユン君はほとんど魔力をすわれてしまってたね

魔力を完全に戻すのに結構かかったの。だけど……。魔王クンドンを次元に封じ込めたのはいいけど……。魔界人によってまた封印を解かれてしまってたね。結局私たちは魔法世界のエリートクラスキトさんとティオさん途中で仲間になったことりさんティオさんの師匠さん

そして天界人のエリートだったパージアスさんそして天界人からエリートクラスで何とか戦ったんだけど歯が立たなかったの……。そして……。ユン君が完全に回復してない魔力をまた無茶をして全魔力を使って魔王クンドンを倒したの……。だけど今現在まだ完全に治ってない魔力でまた戦うのがもう……

いやなのよ……。見てるのが……。ユン君がいろいろな人を助けたいという気持ちはわかるけど……。私はユン君をしなさせたくない……。その時に山本さんがいてくれたから……。何とかユン君は結界のメンバーには

参加しない方向でラファエルさんから言ってくれたからホットしてたけど

ユン君はその敵の邪魔を防ぐつと言ってたから・・・なんとかするけども

もしね・・・またユン君が危険なことをしようとしたときは・・・

「

川崎さんがちょっと悲しそうな顔をしたので

「分かりました。そのときは絶対に自分が止めますから。」

俺が言ったら

「お願いします・・・ごめんね・・・」

川崎さんから少し涙を見た俺は川崎さんに質問をした。(第10

2章終わり)

過去話（川崎編）

「励さん少し聞いてもいいですか？」

俺が質問をしていたら

「私に分かるならどうぞ。」

泣きながら答えてくれて

「ありがとうございます。では・・・川崎さんは

俺と同じ世界にいてなぜ魔法が使えるようになったのですか？」

俺はちよつと不思議そうに思ったので聞いてみた。

「そうですね・・・。まず・・・魔王クンドンを倒す前の話を

します。山本さんが言う通りに私は正式には今も魔法は使えませんが・・・。

ですが・・・普通の人間が魔法世界に行つて旅をするつと言つのは無茶がありますね。私の父親は元々魔法世界の住人で母親は普通の人間

私が生まれ1回だけ魔法が使えるつと父が言っていました。その後ユン君と

出会い私はユン君が好きでした。ですが・・・魔王クンドンがユン君を捕まる前に

ユン君には婚約者がいたんです。その婚約者が私に助けてくださいと泣きながら言われ私に10回分の魔力が入っている杖をいただきました。

しかもその杖は他の杖よりも強力な魔力が入ってたらしく私は危険と感じたときのみ杖の力を使って旅を続けました。

ですが・・・その杖をいただいた方はもう杖に全魔力を使ったそうです

私と別れた後に亡くなったそうです・・・それを知らずに私は知らずのまま

旅をしていきいろいろな人を助け新しい仲間が増えなんとか魔界

に行け

魔王クンドンに挑みながら私はユン君を助けに行きました。

ユン君を助けた後私は残り回数がない杖の力で何とか魔王クンドンを

次元に封印することができたんですが・・最後にクンドンが私に向かつて

魔法で攻撃をして私を守るためにユン君は・・なくなってしまったの

それを見た私は悲しくなりました。だって・・好きだった人がいなくなるのは

どれだけ悲しいかわからないじゃないですか・・だから私はユン君を助けてほしい

っという願いをしたら私の中にある全魔力のおかげでユン君が復活したのです。

多分聞いたことがあると思いますがリザレクションと言えいいでしょうか？

死者を復活する魔法は禁断の魔法と言われるのを私は使いました。その後

私はティオさんやキトさんに魔法を教えてもらうためにがんばって特訓を

したのよ。」

ちよっと恥ずかしそうに言った川崎さんを見たのであった。（第

103章終わり）

過去話（フラユンス編）

俺は川崎さんから話を聞いていた。

「私はキトさんやテイオさんに魔法を教えてもらおうと思ってたの
ずーとユン君に迷惑かけたくないから・・・。ただね

キトさんは魔法剣士。テイオさんは魔法使いでのエリートクラスの人だから・・・魔王クンドン後でもかなり忙しいときの合間に私のお手伝いをしてくれたんだけど・・・やっぱり・・・普通の人間だから・・・。

私はその時はまだ魔法を1つも使えなかったの・・・。そのことは

ユン君も知っていたんだけどね・・・。私はユン君に内緒でやってたから、

そしたら、ユン君からリングをもらったの。これは励が魔法を使えるように

なりますようにっと。私に渡してくれたのが原因だった・・・。それはね

後からキトさんとテイオさんから聞いた話だけどユン君が自分の魔力を

削ってこのリングを作り始めたことを・・・それを聞いて私はユン君に

私のために・・・こんなことしないでいいのに・・・。と私は泣きながら

ユン君に謝ったの。だけどユン君が励が毎日特訓をしていて俺は何にも励にはできなかった。だから・・・あまりいい魔法は使えないかも

しれないけどもせめて援護魔法だけでも。つと言ってくれた。

そして2年がたって今魔界が天界や私がいた世界を攻めてくると
いう情報が

流れた。私は自分の世界を守りたいと思ったんだけど・・・ユン君がまた

無茶をすると思うから・・・そのことを私個人でラファエルさんに伝えたんだけどね

でもユン君がそれを知って自分が出ると言い出したのはすごくシヨックだった。

もう、ユン君の倒れる姿は見たくないの・・・だけど山本さんが天魔人だと

知った時は私からお願いをしたかったの同じ世界の住民としてね・・・。

だけどラファエルさんがもう山本さんに会ってるということをお願いしたっという

ことで・・・無茶なお願いですが・・・私からも言わせてもらいます。山本さん私の世界を守ってくれませんか？」

川崎さんがお願いを申したので

「励さん。大丈夫ですよ。自分はもともと天界や俺がいた世界を守りたいと思う

けど俺も仲間を裏切った。しかも2回だけどねそれはみんなを守るために

そうしたのです。ですからラファエルさんからお願いされた時は俺は自分から

頼みたかった。人さまで世界を救うより自分からっとな。だから俺はまだ

未熟だけどがんばります。」

俺は川崎さんに自分の気持ちを伝えたのであった。(104章終わり)

目標！

「じゃあ俺は励さんにお願ひがあります。」

俺は川崎さんにお願ひをした。それを聞いて

「私でよければ・・・。」

川崎さんが答えたので

「ありがとうございます。俺はフラユンスさんを止めることは

多分できないでしょう。だけど励さんなら止めれると思うので

励さんがフラユンスさんを止めてください。もし自分が見て

励さんが危なかった場合は止めます。だけどね自分は励さんに止

められたほうが

安心するのですよ？自分も昔ちよつといらいらして人様に迷惑を
かけた

ことがあります。ですが・・・普通なら親が止めるはずなのにうちを
止めたのは親戚の先輩でした。しかも、その後うちをよく見て
遊んでくれたり勉強を教えてくれたりしてうちは邪魔だと思った
んだけど

今と思えばそれがなければ今の自分がありません。だから一番
近くににいる人しかもずーと一緒にいられる人が止めたほうが自分は
安心すると思います。だからお願ひします。」

俺は川崎さんに頭を下げた。それを見て

「わかった。私が止めるよ。だけど駄目だった場合はお願ひね。山
本さん

今後結界を作りながらの戦いはつらいと思う。だから多分山本さ
んの相手は

ユン君になると思うのよね。私はそれは仕方ないと思う。だけど
ユン君が

無理をしたら絶対に止める。その時はごめんなさい。」

川崎さんが俺に頭を下げたので

「わかりました。自分も気をつけますのでお互いに頑張りましょう。
あ・・・すごく時間が過ぎてしまいましたね・・・すいません。
もう遅いから励さんは早くお休みになられたほうがいいでしょう。
自分はもう少しここにいますので。」

俺は言った。それを聞いて

「そうですね。じゃあ・・・私はこれで。また明日から大変だと思いますが

頑張っていきましょう。」

川崎さんが言って去って行った。俺は明日からも頑張ろうと空に向かって

言ったのであった。 （第105章終わり）

ラファエルから突然

俺は川崎さんからいろいろ過去のことを聞いた。

俺は川崎さんは魔法世界の住人だと思ってた

俺と同じ世界の住民だった。それははつきり言っ

てびつくりしたのであった。だけど川崎さんは自分

が生まれた世界を守りたいという熱心は俺にも伝わる。

だって・・・それは・・・自分の世界を捨てる人なんて

居ないだろうから。だから俺は協力をした。だけど

本当は俺よりフラونسさんのほうが適してるのに

川崎さんはラファエルさんを頼んで俺になったそう

だ。それは・・・川崎さんは自分生まれた場所を守るために

フラونسさんが無理をしてまた倒れてしまったり

大怪我をしてしまうじゃないかとすごく不安だったそう

だから俺に頼んでしまい、申し訳ないと思ったから

昨日俺に謝ってきたのであった。だけど俺は

全く考えてなかった。俺が川崎さんなら同じことをしてた

と思ったから。だから川崎さんからフラونسさんが無理をしてたら

止めてくださいという言葉聞いて、俺はどうしても危ないときは

止めます。という言葉をかけて昨日は就寝をした。そして朝

いつも通り3人での結界作りをしていて大分型になってきた。

「山本様大分よくなりました。では今から結界を作りながら

あそこにある的を狙ってください。」

ラファエルさんが言ったので

「はい、分かりました。」

俺は言っただけで片方に魔力をたために狙ってみた。しかし・・・

的の少し左に当たった。それを見て

「気にしないでください。最初はだれも当てるとは言ってませんの
で」

ラファエルさんが言ったので何回化やってみたらようやく当たったのであった。

そして・・・ラファエルさんから

「今日はここまでにしましょう。あ、明日は山本さん私と戦ってもらえませんか？」

いきなり言われ

「え・・・」

俺はびっくりした。普通は戦うつと言う言葉をラファエルさんから言われることがなかったから。

「あ、いきなりですいません・・・。まあ全力で狙ってください。ですが

ただし、私も同じ条件ですが片方だけで戦ってもらいます。いいですね？」

ラファエルさんが言われたので

「はい・・・。分かりました。」

俺は明日ラファエルさんと戦うことになったのであった。

（第1

06章終わり）

ミーファさんからの提案

訓練終了後俺は外に出ていた。それは・・・

明日ラファエルさんと戦うということだ。

俺はラファエルさんに勝てるだろうか？と
今でも思う。その時に現れたのが

「山本様お久しぶりです。」

俺の前に現れたのはミーファさんだった。

「お久しぶりです。」

俺は挨拶をした。それを見て

「あれから順調か？」

ミーファさんから言われたので

「まあ、そこそこ」

俺は苦笑しながら言った。

「なんだなんだ。元気がないぞ？どうした？俺に話せる
ことなら行ってみよう」

ミーファさんから言われたので俺は明日のことを

伝えた。それを聞いて

「そうか、同じ意見での戦いか、俺も見てみたいかな。

まあ、多分ラファエルは本気で行くと思う。あいつなら

片手でも行けるからの。だけど山本様は片手では経験がないから
多分満足できる戦いはできないだろうな。多分ラファエルのこと
だから

明日結界作りながら対戦だろう。」

ミーファさんから言われ

「そうですね・・・。」

俺は少し落ち込んだ。それを見て

「まあ・・・。だからなんだ今から山本様にあることを
覚えてほしい。」

ミーファさんから言われ

「それは？」

俺が質問を返した。

「それはね。山本様精霊と契約しないか？」

ミーファさんから突然言われ

「俺に・・・？」

俺は言った。

「そうだ、お前は素質がある。だけどやりすぎると魔力が持たんだけど精霊は1回出せば当分魔力は持つ。しかも自分から戦わずにいけるからな。だけど精霊は最初から出すと山本さんが戦わなくなるのが

大きな欠点となるから使うとしたら魔力が無くなりかけ。つまり結界を作る魔力になった時に精霊は来てくれるさ。だから精霊契約を

してみないか？」

ミーファさんから言われ俺はミーファさんに自分の意思を伝えたのであった。（第107章終わり）

精霊契約

「自分は精霊契約できますか？」

俺はミーファに質問をした。

「ああ、1回だけ精霊契約をして1回出せばあとは

自分が精霊に命令をすれば精霊は山本さんに

答えてくれるさ。まあ、大丈夫だろう。」

ミーファさんから言われ

「じゃあ・・・お願いします。」

俺は言った。それを聞いて

「そかそか。じゃあ山本様の属性に会う精霊を

呼んだんだ。」

何か俺が精霊との契約を待ってた。という状態だった。

しかし・・・戦うということはそうなるのだろう。

俺の前に現れたのは

「私の名前はシャドウと言います。山本様はダーク魔法を

使いになると聞いたのでぜひ私と契約をお願いします。」

シャドウという精霊が俺に契約したいと言った。

「ああ、シャドウはねダーク魔法使いにすごく興味があるけど

元々精霊契約つと言うのは人が魔法を使うときの技が多いほど

属性に合った精霊との組み合わせがよくなるのよ。実際精霊を

呼ばなくても威力は上がるし、魔力の消費も少ない。だから

精霊契約は本当はいいんだけどいろいろな魔法を使う方や

魔力が膨大な人は契約をしても意味なくなるからの。他の精霊は

自分達が合う属性の人間との契約は結構しているがシャドウだけ

は・・・

なかなか契約を結んでくれる人がいないのよ。あ、それと

精霊は契約ができないと段々魔力が下がるということもあるからの

俺の場合は特別だから契約しなくてもかまわないけどシャドウな

どは

「ダーク魔法使いが数人しかいないからなかなか組めないから山本さんは

「ダーク魔法が結構使うからもしよかったら契約してあげて。」

ミーファさんから言われ

「じゃあお願いします。シャドウ。俺の力になってくれませんか？」
俺が言う

「ぜひ！お願いします。マスター」

シャドウが言っ

「じゃあ契約となるものはこのリングに精霊の部屋つと言うものがあるだけ

そこに入っ

大怪我をした場合でもこの中に入れば1時間程度で全回復するよ。ただど山本様の魔力は少しすわれるけどね。」

ミーファさん

シャドウが俺の精霊になっ

わり)

(第108章終

ラファエルとの戦い その1

俺はシャドウとの精霊契約が終わりその次の日

ラファエルさんとの戦いが今……。

「え」と今回はお互いに片手のみで。しかも

お互いに結界を作るといふ訓練と思ってください。

時間は無制限つと言いたいところですがそれだと

ラファエルさんが有利になるので今回は制限時間を

5分間にします。2人ともいいですね？」

川崎さんが言ったので

「わかりました。」

「うむ。問題はない。」

俺とラファエルさんは答え俺とラファエルさんとリディアさんは結界を作り川崎さんが

「では。はじめ！」

という合図があり俺とラファエルさんとの戦いが始まった。

俺から攻めた。俺は魔法を唱え

「ダーク真空拳」

俺はラファエルさんの前に近づき拳で腹に当てた。

しかし……。あんまりダメージがなかった。それを見て

俺はちよつとヤバいなつと思ひ一旦後ろに下がった。

それを見てラファエルさんが一気に上級魔法を唱え

「ジャツチメント！」

唱え、俺の上に光の刃が降っていき俺は直撃を食らってしまった。

食らった俺はヤバいと思ひ。最後の賭けに出た。

それは少し魔力を残し自分のステータスを大幅上げ

シャドウの精霊召喚に賭けようと思つた。俺はリングの中にいる

シャドウに声をかけてみた。

「シャドウ。お前の力を借りたい。」

俺はシャドウに伝えたら

「承知。我がシャドウは山本様に力を貸します。」

シャドウが言ってくれたので俺は

「ありがとう。シャドウ」

とお礼をしたのであった。そして・・・

「ラファエルさんそろそろ全力で攻めますね。」

俺はラファエルさんに伝え、

「わかりました。では私は全力で山本様と戦います。」

と帰ってきたので俺は最後の賭けに出た。 （第109章終わり）

ラファエルとの戦い その2

俺は最後の賭けに出るために一旦後ろに下がった。

そして魔法を唱え

「ダークバースト！」

俺は唱え少量の魔力を残し全魔力を使つて俺は

「闇を制す者我が力を貸してくれたまえ、その精霊は

シャドウ。さあ・・目覚めよ！」

俺は呪文を唱えシャドウを出した。それを見て

「精霊か・・」

ラファエルさんがつぶやいた。それを見てラファエルさんも

呪文を唱えようとしたときに俺は

「ダークコーリング」

と唱えラファエルさんの動きを少し止めた。そう俺が使った

ダークコーリングは相手の魔法を3分間のみ限定だけど

使えなくなるつという魔法であつた。そしてシャドウは

「ダークグラビティ」

唱えラファエルさんの周り半径1メートル以内に重力をかけて

「そこまで！」

という川崎さんの声を聞いて俺はシャドウに

「ありがとう。」

といった。そしてその言葉を聞いたシャドウは呪文を説いて

俺のリングの中に戻った。

「まさか・・山本様が精霊との契約とは・・驚いた。」

ラファエルさんが言つて

「まあラファエル様にまともに戦えるのがこれぐらいしかなかった

からね」

ミーファさんが現れラファエルさんが

「やっぱり・・お前か・・」

と言いつつミーファさんが

「まあ、ねこのままじゃ山本様が負けるのがわかってるからの。

だからもともと精霊契約を勧めただけど・・・まあ良いパートナー
ーが

いて私もよかったよ。」

ミーファさんが言って

「はあはあ・・・ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。だが・・・

「まあ・・・山本様もう少しダークバーストの威力を落としたほうが
いいかも

あれじゃ・・・無制限だと魔力が持たない。それと・・・無制限だと
ラファエル様は

おそらくオリジンを出してシャドウが負けるだろう。今回は良か
ったけど

今後の課題にはつなかつたね。」

ミーファさんが言ったので俺は

「はい！ありがとうございます！」

お礼を言ったのであった。（第110章終わり）

反省・・・そして

時間制限マッチで何とか勝てた俺は

ミーファさんと励さんと呼んだ。

「2人に頼みたいことがあるんだ・・・。」

俺は2人に言ってみた。

「私でよければ。」

「私に力になれば協力しますよ。」

2人は答えてくれて俺は

「2人ともありがとう・・・。」

俺は答えた。そして・・・

「まず・・・今日の反省で俺はやっぱり魔力を使い過ぎるつという1つ問題がある。

それを克服するために俺はもう1回魔力なしの特訓をしようと思っている。そこで・・・2人に手伝ってほしいことは・・・まず・・・2人に魔力を吸い込んだりその魔力を使って魔力を他の人でも使えるリングとかできないかな？」

俺は突発に2人に質問をした。答えは

「んゝそれはできますけど・・・。」

励さんが少し不安そうになった。ミーファさんは「できると思うけど俺の力ではそれを作ることはできない。だけど魔法世界の住民は魔力を高めるために魔力を抑えるリングをつけてるつと言う情報はあるね。だから魔力を保存するなら作れると思うよ？」

ミーファさんが言って、

「できるだけだね・・・山本さんもしかして・・・魔力をすべてリングにため込むつもり？」

励さんが言ったので俺は

「ああ・・・。それしか方法がない。俺は半日するとかなり魔力が戻るけど魔力を使わないことを条件にするとこれが手っ取り早いかな・・・。っと」

俺は言った。それを聞いて

「分かりました・・・。では私は一旦戻りますが・・・。

山本さん無理だけはしないでください。」

川崎さんが言って姿を消した。俺はミーファさんに

「さて・・・これからミーファさんに頼みがある」

俺はこれからのことをすべて話した。（第111章終わり）

これからのこと

「俺に何か伝えたいことでも？」

ミーファさんが俺に疑問をもったので

「えーと……。多分俺はこの戦いで天魔人の能力を消えるかも知れない。だからミーファさんにある

魔法のことを聞きたい……。」

俺はミーファさんに聞いてみた。

「俺がわかる魔法なら。」

ミーファさんが言って

「それは……。天魔人は異次元の魔法は使えるのでしょうか？」

俺は1つ気になったことがあった。それはテレポートは

一瞬で飛べる魔法だけど異次元を次元に移動することができるのか俺はわからないからミーファさんに聞いてみた。

「ああ、多分できると思うが……。俺も見たことはない。

多分禁断の魔法だろう……。」

ミーファさんが言ったので

「ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。ミーファさんが

「どうしてそんなことを聞くんだ？」

疑問に思ったミーファさんが俺に質問をして

「多分今回の戦いではフラユンスさんが無理をすと思う。」

川崎さんはフラユンスさんを大事に思っている。だから

もしかしたら結界を閉じるまでにフラユンスさんは1人で多くの魔界人と戦うだろう。最悪結界の中に残ってしまうかもしれないだから俺は異次元魔法を使えるようにしたい。

だけど……。それは魔力が大幅にいることや今の俺じゃ力不足だから……。俺は……。さっきの言っていたリングに全魔力を吸ってそれを励さんに使ってほしく俺は思っている。だけど

俺は今日やっていて結界を作りながら対戦をしていくと

魔力が持たない。だから途中で俺と川崎さんがチェンジして

俺がフラونسさんを入れ替わりして戦ったほうが早いと思う。

だから・・・ミーファさんに手伝ってほしかったんだ・・・。」

俺はすべてのことを言つとミーファさんが

「そつか・・・。だけでもしたらお前は結界の中に入ってしまうぞ？」

もし入ってしまったらお前はもうお前を待ってる人と会えなくなつて

しまふ。それでもいいのか？」

ミーファさんが言つたので

「ああ、俺は会えないのは俺が責任だ。けどね。俺は・・・

みんなが被害にあうよりは俺が・・・被害にあうのが一番いい。」

俺は答えた。それを聞いて

「そつか・・・じゃあ・・・俺は何にも言わない。俺は最後まで

お前の力になるうじゃないか！」

ミーファさんが笑顔で俺の気持ちを答えてくれたので

「最後までお世話になります・・・。」

俺は頭を下げたのであつた。

（１１２章終わり）

再特訓

俺はミーファさんにすべて話して俺たちは

魔力の特訓を始めた。リングができるまでに

俺は無駄な消費をしてシャドウを召喚をして

シャドウとたたかっていた。数日後川崎さんから

「一応頼まれたものは作って置いたけど・・・

無理だけはしないでね・・・」

川崎さんが心配そうにしてたので

「ああ、大丈夫さ。それより励さんはフラونسさんを
守ってあげて・・・俺のことは心配しないでいいから
必ず・・・。フラونسさんを無理はさせないように
するから・・・。」

俺は川崎さんに伝えた。それを聞いて

「うん・・・。ありがとう。けどね・・・

私は山本さんにも無茶はしたくないの・・・。

だから・・・無理だけはしないでね。山本さんの帰りを
待つてる人がいるから・・・。」

川崎さんが言ったので

「ありがとうございます。無理だけはしないように
努力をします。」

俺はそう言ってリングをはめ現在俺の魔力をすべて

吸い込んで魔力をリングにためて魔力が亡くなった俺は

再びシャドウと魔力がないけどたたかった・・・。

まあ・・・最初のほうは俺は力不足だったので

シャドウにぼこぼこにされたんだけどね・・・アハハ・・・。

その後何とか戦えるようになったけど・・・いまだに

勝てなくなり俺は魔力が高くなり始めたときにリングに
魔力を吸収してもらいながら特訓を始めた。

そして・・・朝、昼は結界の練習をし、夜は魔力なしの特訓をして数か月俺たちは最後の調整を始めた。（第113章終わり）

最終段階

ミーファさんに頼んでいて数日後

川崎さんから魔力を吸う（ためる）&魔力解放する
リングを受け取った。

「ありがとうございます。励さん」

俺は川崎さんにお礼を言った。

「いえいえ……。ですが・・無理だけはしないで
ください……。」

川崎さんが言ったので

「ああ、分かりました。あ、そうだ。川崎さんは
結界とかは作れますか？」

俺が突然に言い出したので

「ええ・・私はこのリングで何回が使ったことありますが・・。
何ででしょうか？」

疑問に思ったので聞いてきた。

「もしかしたら・・。結界が簡単に成功するわけじゃない。

もしかしたらフラユンスさんが無理すると自分は考えてるので
最悪俺がサポートでフラユンスさんと戦うかもしれないが
この前の戦いを見てても自分は片手だけじゃ・・シャドウを
出さないと戦えません。しかもシャドウを出すのにある程度
魔力を消費しないといけないので・・。できれば最終調整のときに
変わればいいのでお願いします。」

俺は頭を下げた。

「分かりました。その時は私と変わらしましょう。ですが・・。
無理だけはしないようにしてくださいよ。山本さんだって
待ってる方がただ心配して・・いなくなったら・・。
どんな気持ちか・・ね。」

川崎さんが言ったので

「分かりました・・・」

俺は言っでリングをはめて最終調整に入っただけであつた。
(114
章終わり)

最終決戦の前に その1

リングを受け取ってから数カ月後俺はリングをつけたまま特訓をして・・大分魔力が上がった。というかどんだけ魔力が上がったのかも俺は知らない。なぜなら元々の魔力はすべてリングに吸収しているから・・。

そして・・最終決戦の前日俺はミーファさんと夜訓練をしていて川崎さんから俺に

「ちよつと来てください。」

と言われたので俺は特訓をやめてミーファさんと一緒にトレーニング室のほうに向かった。そして

「山本様忙しい時に呼びだしてすいません。」

ラファエルさんから言われて

「いえいえ、自分に何か？」

俺は言った。それを聞いて

「明日やつと終わる。だから最終調整としてもう1回説明を
したいけど・・大丈夫ですか？」

ラファエルさんが言ったので

「ええ、お願いします。」

俺は言った。今いるのはラファエルさんリディアさん

川崎さんフラونسさんミーファさんの5人だ。

「まあ・・一応他の人は俺たちがやばいときに呼びますが

俺たちの周りにいても・・もしかしたら被害が起きるかも

しれないから今回はこの6人で防壁をする。俺とリディアと

山本様は魔界人からの侵入を防ぎながら結界を作る。

ミーファとフラونس様は前列で防壁をしてくれ。

決して無理だけはしないように。これは戦争するわけでは
ないのでから。川崎様はあまり魔法を使わないように
サポート役でお願いします。」

ラファエルさんの説明が終わり俺たちは

「「「「「分かりました。」「」「」」

と言った。そして・・・話が終わりラファエルさんから

「山本様に会いたいという方がいらしゃって・・・」

大丈夫ですか？」

俺に聞いたので

「うちに？はい、大丈夫ですが。」

ラファエルさんは

「いいそです。どうぞお入りください。」

と言って入ってきたのは真魅先輩、高原さん、夏季坂、金崎
リオの5人だった。（第115章終わり）

最終決戦の前に その2

「やつほゝ山君ゝ元気ゝ？」

「山本さん元気ですか？」

「山本ゝ久しぶりゝ」

「山本元気してたか？」

「山さん元気でしたか？」

みんなから声をかけられたので

「ああ、俺は大丈夫みんな無理して来たのか？」

俺はみんなに言った。

「いやゝ明日でこの戦いが終わるつとラファエルさんから聞いたからゝそれを聞いてこのメンバーも応援として行きたくて無理にお願いをゝね」

金崎が言ってみんなもうなずいた。

「そつかゝゝ。みんなありがとう。でも確かゝ

明後日にはゝ卒業式じゃなかったっけ？

大丈夫なのか？」

俺はみんなに質問をした。眞魅先輩が

「みんな卒業式より山君のことが心配だから来たのよ。

だから心配しないのゝ。多分みんなは一緒に卒業式を迎えたいと思ってるよ？」

眞魅先輩が言つて俺は

「ありがとうゝゝでもゝ俺は留年は確定だからゝゝ。」

俺は言った。それを聞いて

「あ、それはいいですよ？一応学校には私が伝えてありますので卒業はできますがゝゝ。しかしゝ大学はいけませんがゝゝ。ラファエルさんが言ったので

「そうですかゝいろいろ迷惑かけましたゝゝ。一応大学はあきらめてたから気にしませんよ。」

俺は言った。それを聞いて

「じゃあ山本。俺たち浪人生活だな。がんばろうぜ！」

金崎が言ったので俺は

「え・・・？」

俺はびつくりした。高原さんは

「私と金崎さんりオさん夏季坂さんはみんな山本さんと一緒に
行きたいっという気持ちがありまして・・・一応親に伝えたら
了承もらえたので来年はみんなで大学受験大変だけど

頑張りましょう。」

と言われた。俺は

「もう・・・みんな・・・ありがとうな・・・。だけど・・・。

浪人はすごく大変だよ・・・。一緒に行く大学も・・・レベルがね・・・。
」

俺はそこを気にした。それを聞いて

「あ、それは大丈夫」 私の学校を受けるから過去問題は私がかき
集めて

くるから大丈夫だよ。だから心配しないでね。もちろん分
からない所は

私がビシビシ教えてあげるから」

真魅先輩が笑顔で言ったのであった。

（第116章終わり）

最終決戦の前に その3

「じゃあ・・・大変だけど頑張るわ・・・。3人は

あの後・・・どうなったの？」

俺は糺見、加奈子、コレットの3人が心配だった。

「この頃・・・は大分良くなったんだけど・・・まだちょっとね

先生から聞いたんだけど・・・3人は無事に大学は合格したんだって

だから大丈夫かな？だけど一応卒業式に山本さんが元気な顔を

見せたら喜ぶと思うよ。」

高原さんが言った。

「だけど・・・多分・・・3人に殴られるかもしれないから覚悟したほうがいいかもね・・・。」

いいかもね・・・。」

金崎が言ったので、

「ああ、分かっている・・・それは自分が悪いからな。」

俺が言って夏季坂が

「それはないよ。だって俺も最初はすごく悲しかった。

だけど金崎から聞いて山本は俺らを守るために

自分からみんなに言わずに行ったのは仕方ないよ。」

と言った。リオが

「うん。私も最初はすごく悲しくコレットちゃんとすごく泣いたよ・・・。」

だけどね・・・後から金崎君に聞いたら・・・コレットちゃんが狙われた時

山さんが助けくれたけど・・・もし山さんがそのままいてくれたら

うれしかったんだけどね・・・。だけど山さんは私たちを守るために今戦ってるもんね・・・。だから無理だけはしないようにしてね・・・。」

山さんがいなくなると私たちも・・・」

と言った。それを聞いて

「分かった・・・無理だけはしないようにする・・・それは約束するよ。でも・・・みんな本当にありがとう・・・。すごくうれしい。」

来年こそみんな一緒の大学に行こう。」

俺が言つてみんなが

「・・・うん！（もちろん！）」「・・・」

といった。これ以上遅くなるのは厳しいので俺はみんなを帰れさせラファエルさん達に

「みんなを連れてきてくださってありがとうございました。」

ラファエルさんリディアさんミーファさんフラونسさん

励さんみんな今日までお世話になりました。明日までがんばりますので

よろしくお願いします。」

俺は頭を下げた。そう・・・俺は明日で終わると思いその後ミーファさんと

訓練をして明日を迎えるのであった。

最終決戦 その1

俺はみんなの声を聞いて少し特訓をしてその後

明日があるので就寝をした。そして・・決戦

「そろそろ魔界人が来る前に結界を完成するぞ」

ラファエルさんが言って俺たちは結界を作り始めた。

完成するまでには最低3時間は必要になる。完璧にするためには

5時間はかかるので作る途中に結界に1つでも穴があつたりしたら失敗になる・・。だから俺たちは少しずつそして二度と壊されない

ためにも何重も結界を作りながら作っていくのだ。

最初のほうは順調だったが・・段々と魔界人たちが結界に

攻撃を仕掛けた。それをフラユンスさんが止めに入って

大分厳しい決戦になりそうだと俺は思った。フラユンスさんが

「ちよつと力解放するね。」

と言い少し魔力を高め

「チャージ1・・・チャージ2」

と全魔力がフラユンスさんの全身をまとまり

「行くよ・・。」

と言って一気に魔界人を気絶させていき4時間後フラユンスさんもかなりつらそうになって行き俺は

「励さん俺と変わってくれませんか？」

俺はフラユンスさんの状態が危ないと気付き川崎さんに伝え

「でも・・私じゃ・・魔力不足だから・・。」

川崎さんが言ったので俺は

「じゃあこれをつけて・・。」

俺は付けてあるリングを川崎さんに渡した

「これは一応川崎さんがフラユンスさん魔力で魔法が使えると聞いたから俺の全魔力を3、4ヶ月間ためておきました。

だから・・・励さんなら使えると思う。このままじゃ・・

「フュンクスさん無理しそうだから・・・お願いします。」

俺は頭を下げた。それを聞いて

「分かりました・・・。だけど山本さんも無理しないでくださいね。」
川崎さんから・・・言われ

「ありがとうございます。励さん」

俺は笑顔で答えた。そう・・・これが俺の最終決戦と

なることはみんな知らなかった。（118章終わり）

最終決戦 その2

もうすぐ結界が完成にするのだけど・・

フラユンスさんがそろそろ魔力の消費が激しく無理して戦ってるので俺は

「フラユンスさんをこっちに戻しますんで

ミーファさん後はよろしく頼みます。」

俺は言ってミーファさんは

「おう。任せとけ！」

と答えてくれた。そして俺は魔力をため

「エックスチェンジ！」

唱えて俺とフラユンスさんがいた場所を入れ替えをした。フラユンスさんはびっくりして

「まだいけるのに・・。」

とつぶやいたけどミーファさんが

「俺も見てたけどもうフラユンス様あなたは魔力がもう

ないはず・・。だから山本様に任せるしかないのです。」

と言ってフラユンスさんは

「そっか・・後は頼みます・・。」

とつぶやいたのであった。俺は結界に呪文札を張り付けて

「7属性封印！」

と言って結界に魔法をかけた。そして・・段々と結界が

完成をしていきラファエルさんが

「山本様そろそろ完成されるんでこっちに・・。」

という声がしたんだけど俺は

「すまん・・俺はこっちに戻れそうにないかも・・。」

と言った。俺の目の前にいたのはラファエルさんと同じぐらい

魔力を持った魔界人のエリートだったので

「今俺が戻るとこいつの魔法で結界が壊される・・。」

7属性封印は結果が完成してからしか発動しないから・・・。
だから俺はここに戻る・・・みんな・・・ありがとうな・・・。」

俺はもう1つのリングを取ってリディアさんに向けてリングを投げた。

そう・・・そのリングの中にいるのはシャドウだった・・・。

「マスターーーーー！！！」

とテレパシーで声が聞こえたので俺は

「シャドウすまない・・・こんなマスターだけど・・・シャドウ・・・

お前は俺と一緒にいてはいけないのだ・・・だからリディアさん
後は頼みます。」

と言って俺は最終魔法を唱えた。

（119章終わり）

最終決戦 その3

俺はラファエルさんと同じ魔力を持った奴と

周りにいる魔界人の中でもエリートクラスの魔界人に

対して禁じられた魔法を唱えた。

「究極魔法アルテマ！」

俺は光属性最強の技を俺から半径4m以内に全体攻撃をかけた。

しかし、それだけじゃ・・・よけられると思うもう1つ魔法をかけた

「ダークグラビティ！」

そう・・・俺も直接食らうけど全員に確実に当たるように

回避不可能にした。俺はラファエルさん達に

「みんな・・・今までにありがとうございました・・・。」

俺は笑顔で言つて光の中に消えていった。

その後結界は完成したんだけど・・・

「ラファエルさん今から・・・山本さんを・・・」

川崎さんが言った。しかし・・・

「無理です・・・川崎さま・・・さつき山本様が7属性封印したので・・・」

この5属性は闇、光、火、水、土、雷、風属性はすべてはじかれ
私には

どうしようもないです・・・。すいません・・・」

ラファエルさんもすごく悔しがつていて

「山本さん・・・無理だけはしないように言ったのに・・・」

あの子たちにはどう説明すればいいの・・・。」

川崎さんが・・・泣きながらフラユンスに抱きついて・・・

「励・・・」

フラユンスさんが・・・声をかけたけど・・・川崎さんは涙を流した。
それを見て

「川崎さん・・・止めなかったのは・・・私にも責任があります・・・。」

必ず・・・山本さんは生きています・・・私がいつか・・・

山本さんを探せる方法を見つけますので・・・。」

リディアさんが言った。一応もう魔界人が他の世界に攻めてくることは

無くなったが・・・山本も・・・戻ってくることはなかった・・・

そして・・・次の日にラファエルさんとリディアさんフラユンスさん
川崎さんはコレット達がいる学校に向かったのであった。 (第1

20章終わり)

卒業式・・・。

ラファエルさん達はコレット達がいる学校に向かった。

そう・・・今日は卒業式。卒業式後みんなは大きな桜の木の所に集まる予定だった。ラファエルさん達が来て金崎が

「ラファエルさんこつちです」

と声をかけたので4人は

「・・・皆さん卒業おめでとうございます」「・・・」

と声をかけた。それを聞いて

「・・・」「・・・ありがとうございます」「・・・」

金崎達は言った。真魅先輩は

「あれ？山君は？」

真魅先輩は探してたけど山本がいなくて聞いてみた。

「すいません・・・山本様は・・・結界を守るために・・・」

山本様の最終魔法・・・で居場所が・・・把握できずに・・・

今搜索中です・・・。生きてる堂かもわからないので・・・。

本当にすいません・・・。」

川崎さんは泣きながら金崎達に謝った。

「じゃ・・・もう山本は・・・この世界にはいないのですね・・・。」

夏季坂が言ったので

「そうなります・・・私たちの力不足で本当にすいません・・・。」

ラファエルさんが謝った。それを聞いて

「よ・・・。」

俺はみんなが暗そうしてるところを見て声をかけたそれを聞いて

「山本（山さん）（山君）（山本様）（山本さん）?!」

みんながびっくりして俺は

「お・・・おう・・・。ただいま・・・そして卒業おめでとう・・・。」

俺は声をかけた。だけど俺の服はボロボロだった。まあそうだろう技直接食らって生きていたのも不思議だしな・・・。

「山本様無事だったんですね．．．」

川崎さんが泣きながら俺に行った。俺は

「ああ、俺も生きて帰れるとは思ってもいなかったよ．．．」

まあ．．．この通りもう魔法が使えなくなったがね。」

そう。魔法を一気に使うのは魔法が使えなくなるという意味でもあり強力な魔法だったので直撃食らえば即死に近い状態にはなるが．．俺はなぜか無事だった．．。それは．．俺の親が俺を助けてくれた．．。

本当に．．馬鹿親だな．．。とか思ってた．．。

「でもよかった．．。山本さんにまた会えるなんて．．もう心配したんだよ．．。」

高原さんが言ったので

「ごめんな．．高原さんみんな．．心配をかけて．．でももう大丈夫．．。」

攻めてくることはないから．．。」

俺は言った。そのあと加奈子、糰見、コレットから殴られたのは分かってたけど

3人もすごく俺に会って笑顔になった．．。そして．．

「じゃあ．．今から家でお祝しましょ」

真魅先輩は俺たちを卒業祝いするために案内されたのはおばあちゃんの家だった。

俺は入る前に

「ただいま．．おばあちゃん．．もう俺は天魔人じゃないけど．．これからお世話になるね」

と言って俺たちはその後パーティを楽しめたのであった。（第1

21章終わり）

祝い

俺たちはおばあちゃんの家に入り、みんなで祝う準備をして

1時間後みんなで卒業パーティーを始めた。

その中にいたのは俺、真魅先輩、高原さん（いまだにさん付け）

コレット、リオ、加奈子、糰見、夏季坂、金崎、店長、リディアさん

ラファエルさん、フラونسさん、川崎さん、ミーファさんの15

人での

パーティーを開いたのであった。料理とかは俺が作ろうとしていたら
真魅先輩が店長を呼びだし2人で作り始め俺はしなくていいと拒否
され

出来たのが凄く・・・豪華なパーティーとなった。さすがに1つのテ
ーブルでは

全員入れないので2つ奥からテーブルを出し・・・、3グループに分
けて

座った。そして・・・

「「「乾杯」」」

みんなで言って後はいろいろ各自話していくところにリディアさん
から

「あの・・・山本様」

俺に言ってきたので

「何でしょうか？」

俺が言った。リディアさんから俺に見せたものはリングだった。

「これは・・・山本様が持つべきものです。」

言って渡されたのは契約されたシャドウのリングだった。

「ごめん・・・もう俺はこれを受け取る資格はないんだ・・・。あ
の時に

俺は全魔力を使いもう魔力を練ることもためることもできなくな
った。

だから・・・俺が持っていてても意味がないんだ・・・同じ天魔人である

リディアさんが持つべきなんだ・・・」

俺は言ったら川崎さんが

「それはないと思いますよ？まあ・・・天魔人には戻れるかは分かりませんが

山本さんは何年かすれば魔法は使えるようになります・・・」

川崎さんから言われリディアさんが

「それなら・・・山本様が持っていてください。私も自分で持つより山本さんなら任せれるので。」

リディアさんからリングを受け取った俺は

「ありがとうございます。」

と言った。少ししたらラファエルさんが

「あの時はもう山本様がいなくなると焦ってましたよ・・・。どうやって

こっちに戻れたのですか？」

と聞いてきたので俺は

「俺にもよくわからないですよね・・・7属性封印はどの属性の持ち主がいても

どれかに当たれば結界を通ることができないので・・・俺は闇だから・・・

通れないはずなんだけど・・・多分・・・俺のおばあちゃん。お父さん、お母さんが

助けてもらったかもしれない・・・」

俺は言った。俺は多分3人に助けてもらったと信じている。そうではないと

あの時俺は死んでたかもしれないから・・・それを聞いて

「山本様これからどうするのですか？」

ミーフアさんから言われ

「ん・・・まあ・・・俺はこの1年間は勉強して4年間の大学に入る

かな・・。

それ以降は決めてないから・・。その時に決めると思いますよ。」
俺は言つてミーファさんは

「そっか・・。じゃあまた何かあったら遠慮なく言ってくれ。」

ミーファさんは笑顔で言つた。シャドウもテレパシーで

「これからよろしくお願いします。マスター。」

俺の頭に伝えてきたので俺は

「ありがとう。シャドウ・・。これからもよろしくな。」

俺は伝えたのであった。 (122章終わり)

またね！！

俺はラファエルさん達と話した。その後

「山君」こつちばかり話してないでこつちにも来てよ」

眞魅先輩が言ってきたので俺は

「はいはい・・今行きますよ」。では楽しんでくださいね」

俺はラファエルさん達に挨拶をして眞魅先輩がいる場所に言った。

「お待たせ」

俺は言ったら眞魅先輩達が

「「「遅い」」」」

と言われた。

「ごめんごめん。」

俺は謝った。そう・・今回のメインはこつちだからの・・卒業だしね。

やっぱり内緒にしていたのが原因で俺は今度加奈子、糰見、コレットに

1人ずつデートを申し込まれた。というか罰ゲーム？と言えばいいかな？

俺は内緒にしていた自分が悪いから全く気にしないけどね・・。

「山本」明日からバイト入れるか？」

店長さんが俺に聞いてきてくれたので

「はい・・うちでよければ・・よろしくお願いします。」

俺は頭を下げた。それを聞いて

「おう！だって・・眞魅ちゃんだとね・・みんなが・・眞魅ちゃんばかり

みるから・・仕事にならなくてさ」。やっぱり指揮を取る山本がないとな

というかもう正社員になるか？」

店長が変なことを言ってきたので

「正社員は・・・困りますね・・・大学に入るという約束をしてしまったので・・・」

俺が正直に言ったら

「そっか、それは仕方ないな、まあ・・・明日からバイトよろしくな」

店長が言って俺はありがとうございます。と言った。

「山本さんこれから浪人生活大変ですが・・・一緒に頑張りましょう」
高原さんが言ったので

「ああ・・・こちらこそよろしくお願いします。」

俺は言った。後から真魅先輩から聞くと糺見は将来国語教師か本関係の仕事に

就きたいと言ったのでそっち関係の大学を加奈子はスポーツ推薦でオリンピック選手がよく出る大学にコレットは大学に入ろうとしたけども

ラファエルさんから高校までという約束だったので女王の役目もあり天界に

戻るということだ。俺はリオも戻るではないかな？とリオに聞いてみたら

「私は・・・コレットちゃんみたいに天界に戻っても暇だからね」だから

山さんと大学に行きたいもん」。

リオがノリノリで言った。パーティーは2時間で終了しリオ、コレット

ラファエルさん、リディアさんは天界に帰り、フラユンスさんと川崎さんは

魔法世界に帰り、ミーファさんは自分のいた世界、真魅先輩達は自分の家に

帰るということなので俺は

「さようなら」

俺は言ったら川崎さんが

「山本さんさよならじゃないですよ？こんなときはこういふのです。」

川崎さんが言ってみんなが一斉に

「『『『またね！！』『『『『

と言った。それを聞いて俺は

「ああ、またな！」

と言ってみんなは帰って言ったのであった。

（終わり）

またね!!（後書き）

んゝ短くてすいませんでしたゝ（汗
毎日？見てくれた方本当にありがとうございます。
多分次書くのがもう最後だと思えますので
また会えたらその時まで・・・。
というか・・・もう早く会えるのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4871o/>

学生時代

2011年3月23日13時04分発行